
ゲームの世界で第二の人生！？

シェイフォン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームの世界で第二の人生！？

【Nコード】

N4709W

【作者名】

シェイフォン

【あらすじ】

目が覚めると俺はゲームに良く似た世界にいた。

それだけなら別に構わないが、薄汚い路地裏で寝転んでいた浮浪児からスタートだなんてどんな上級者プレイだ？

まあ、良いだろう。

おれはこのゲームをかなりやり込んでいるからこの程度で心が折れることはない。

さてと、ログアウト出来ないのは放っておいてまずは生活できるほどの環境ぐらいは整えるか。

人物紹介（前書き）

これからどんどん加筆していく予定です。

書き込む順は私の気まぐれですが、主要キャラは全員書き込むので
ご安心を。

ネタバレを含みますのでご注意ください。

2011年11月25日更新

人物紹介

ユウキ「カザクラ

本編の主人公。

突然訳も分からずゲームとそっくりな世界に飛ばされたにもかかわらず慌てなかった。

これは本人は夢だと考えていることが起因している。

そのため己の行動に対する責任というのが曖昧で、キツカ達浮浪児と同居するなど常識では考えられない行動を取る。

技術や調合がチートであり、材料さえ揃えば作り出せないものはない。

第1章登場

ティータ「エルマライ

主人公が足を向けて寝られない人物。

主人公が生活の糧を得るために訪れた薬屋のお姉さん。

栗色の髪の毛をポニーテールにして眼鏡をかけている。

気さくな性格からか交友関係は驚くほど広い。

エルファとは旧知の仲である。

キツカ「カザクラ

主人公が拾った浮浪児その1。

活発な性格でそのエネルギーを表し、髪も瞳も燃える様に赤いのが特徴。

気安い性格をしており、誰にでもフランクに接することが出来るので人気者である。

主人公に拾われる前は4人組のリーダーとしてスラムを生き抜いていた。

冒険者を志望しており、将来は前人未到の地を踏破することが目標。アイラ達を仲間と表現するなら主人公を親と考えている。

アイラⅡカザクラ

主人公が拾った浮浪児その2。

キツカとは正反対の冷静沈着な性格をしているが、思い込みが激しいのでたまに暴発する。

青い髪と切れ目が特徴で、周りに油断ならない人物という印象を与えている。

諜報や謀略の類を好み、合理性を追求するので容姿にはそんなに拘らず、髪も短く切り揃えている。

主人公に拾われる前は、4人組の頭脳として活躍していた。

主人公を主として捉え、絶対の忠誠を一方的に誓っている。

ユキⅡカザクラ

主人公が拾った浮浪児その3

無口な少女で何を考えているのか本人以外誰にも分らない。

浮浪児なので何の教育を受けていないにも関わらず王国最高峰の魔法学校に入学出来た。

ある意味主人公以上のチート能力保持者。

クロスⅡカザクラ

主人公が拾った浮浪児その4

大柄な体格と優しい性根の持ち主。

その体力はどう学年でも飛びぬけており、一人だけ成人年齢が受ける訓練をこなすことが出来る。

主人公はクロスを成人だと疑っているが、キツカ達は主人公や自分達と同じ年齢だと言い張っている。

攻撃よりも防御に関心があったので主人公はクロスにファイアーエムブレムに登場するアーマーナイトに近い鎧を装着させた。

第2章登場

エルファ¨¨ララフル

主人公のメイド

鮮やかな緑色の髪と白磁の肌、そして顔のほりが深いので人形のよ
うな印象を与える。

主人公に対しては結構厳しく、辛辣な言動を行うことが多々ある。
元暗殺者で現在は人を殺せなくなったのでメイドをやっている。

今の居場所を大切と考えており、それを守るためなら手段は問わな
い。

サラ¨¨キュリアス

主人公を師匠と呼ぶ鍛冶屋の娘。

主人公が作成した武器に感銘を受けて自ら弟子入りを願った少女。
くすんだレンガ色の髪や同年代と比べてやや長身で筋肉質なことか
ら年上だと見られる場合が多い。

天才型の人間で、鍛冶に関しての才能は底知れないが、それ以外に
なると全く駄目である。

ヒュエテル¨¨クーラー

いつも優しい笑みをたたえる貴婦人。

全てを包み込むような包容力を兼ね備えている。

彼女がスラムを解体しようとしていたので、主人公が協力を申し出
て現在に至る。

人物を見る目があるらしく、ヒュエテルが目をつけた人物にまず外

れない。

そのため単身ジグサルへ向かった主人公の護衛を選んでいる。

第3章

フィーナⅡレグリアスⅡツバイク

ツバイク伯爵の双子娘の姉。妹のレアと違って奔放な性格なのだが、相手の警戒心を解かせる雰囲気を持っている。だから主人公はフィーナを外交兼営業に当てている。

体型は妹と全く同じで、ここまでは酷似している双子は珍しいとのこと。

海のような青い髪と深い色の瞳を持ち、顔立ちは綺麗にまとまっている。胸はあまり無いが、それを欠点だと思わせないほどしなやかでスレンダーな体つきをしている。

レアⅡレグリアスⅡツバイク

ツバイク伯爵の双子娘の妹。姉とは正反対の物静かな性格で何でもそつなくこなす器用な人物である。特に事務系が得意なので主人公は都市の内政全般をレアに任せている。たまに実の姉にする言動ではないことをしてフィーナと主人公を驚かせることがある。

間章

ククルスⅡフォンテジー

竜騎兵軍団副隊長

キツカの頭脳。

人を動かす能力に長けており、浮浪者を兵に仕立て上げた手腕を持つ。

栗色の髪の毛と大きな愛らしい瞳から小動物の様だが中身は腹黒く、キツカ以外の人を陰で罵倒しているがかなりのドMであり、キツカに苛められることを心の底から喜んでいる。
想像できない読者は恋姫無双に登場する桂花を思い浮かべてくれれば良い。

オーラ＝ユクエリス

諜報部隊副主任

「鬼がアイラなら仏はオーラ」と呼ばれている。
加減出来ないアイラのブレーキ役を務める。

金色の髪と堀が深い顔立のため人形の様な美貌を持ち、気さくで誰にでも分け隔てなく接するが、一番になることに固執し、陰でアイラを虐めていた過去があるが、色々あって今ではアイラの一歩の理解者となっている。アイラが容赦なく弾劾して傷心した隊員をよく慰める。

薬のせいで体が小さくなってしまったが、オーラはあまり気にしていない。

ミア＝キャストウィッチ＝ヴァルレシア

魔道騎士団副団長

ヴァルレシア侯爵の長女

ユキは口数が少ないので代わりにミアが魔道騎士団を纏めているので実質団長。

幼少から男として育てられたため男勝りなボクッ娘。性格も社交的で紳士なため女性から人気がある。ユキの様な可愛い者を愛でるのが好きという困った性格をしている。

モデルはアイドルマスターの菊池真。

レオナ＝カリスリン

ジグザール騎士団副官

クロスの元教官で現在恋人

用兵術は天才的で昔はエリート部隊である王国第2騎士団を率いていた。

常に礼服を纏って金色の髪を腰まで伸ばし、ある事故が原因で右目に眼帯をしている。特徴的なのはその豊かに突き出た胸であり、それがあるから彼女が罵倒をしても兵隊は喜んで従う。

ヘヴィーオブジェクトに登場するフローレイティアに金髪+眼帯を付けた姿。

無一文から始まる（前書き）

始めまして、シェイフォンです。

経験を積んだ主人公というチートな能力を使って襲いかかる不合理から必死に抗おうとします。

剣術から裁縫まで全てMAXレベルにまで上げた経験のある主人公がどのようなセカンドライフを歩むのか。
それを楽しんでいただければ幸いです。

無一文から始まる

気が付くと俺は子供になって薄汚い路地で倒れていた。

いや、冗談じゃないよ？

一応自己紹介しておこう

俺の名は火桜優喜。フルダイブ型MMORPGにどっぷりハマった高校二年生だ。

一応学校は通っている。ゲームが大好きだが平均点はクリアしている。

本音を言えば学校を辞めてずっとゲームをしたいのだが、それをやると確実に家を追い出される。

比喩じゃない、マジ話だ。

何せ内の親はやると言えば必ずやるタイプ。

どれだけ理不尽な約束でも絶対に履行するのだ。

……ヘタレと嘲っても構わない。

俺も自覚しているから。

閑話休題

俺の時代にはフルダイブ出来る機械がある。

ん？ それは何だってか？

それはヘルメット状の形をしたもので、脳からの電気信号を受け取り、そして逆に変換した信号を流すことによつてあたかも現実が存在しているよう錯覚させる機械だ。

洗脳されそうで怖いと感じるだろうが、正直俺達にはこれが無いとまともに授業についていくことが出来ない。

何せ高校二年の授業で不確定性原理を応用した問題を出されるんだぜ。

教科書だけで解けるか。

機械に頼らないと出来るわけがない。

そして俺は文系だ。 ついでに言えば理系はもつと恐ろしいぞ。

数字の羅列を見ただけで何を意味しているのか理解できるんだ。

スパイ養成課か、と思ったよ。

まあ、その機械のおかげで俺達は限りなく全能に近づいているがな。

普通の俺でさえ過去の名医と同程度の執刀が出来る。

また話が逸れた、すまん。

とにかく、俺はそのフルダイブ機械を使ってMMORPGをやっていたわけだ。

まあ、やっていることと言えば、パーティを組んで魔物を討伐するのではなく、ひたすらにアイテムを作ってそれを売り捌いていたわけだけだな。

ダンジョンにはレア素材を探すために潜る程度だったし。

そのゲームはユーカリア大陸物語。

各プレイヤーは望みの職業になって冒険者になったり国を興したりと色々と自由度の高いゲームだ。

ここからが本題だ。

俺はいつもの通り学校へ行き、いつもの通り帰宅していつもの通りゲームを起動させた。

普通なら俺は拠点としている工業都市ジグサルから始まるはずだった。俺は大富豪で、その都市に対して影響力がある。顔もイケメンで背の高いハンサムなキャラクターだったはずなのに、俺は気が付くとどこか訳の分からない街の裏側で倒れていた。

さあ、どうということだ？

眼が覚めた俺はまず始めにウィンドウを開いて見た。

ウィンドウに表示されるのは名前とステータス、持ち物や装備の他にゲームを終わらせるログアウトがあるはずなのだが。

「……ない」

その欄は空白になっており、目をこすっても変化が無かった。

どうやら不本意なバグが起こったのだと考える。

「仕方ない、しばらくここで生きるか」

喚いたり叫んだりしても意味は無い。それならば一度初心に帰ったつもりで始めからプレイしてみようと決めた。

「まずは何を持っているのか」

俺はもう一度ウィンドウを呼び出して己の状態を確認する。

名前： ユウキ・カザクラ

装備： 武器 なし

防具 ボロの服

頭 なし

足 擦り切れた靴

装飾品 なし

持ち物： なし

お金 0G

ステータス なし

「……何だこれは？」

その惨状を見て愕然とする。

良いところが一つも無い。普通ならお金も3000Gぐらいはあり、ステータスも幾らかは自由に設定できるはずだ。

ステータスというのはスキルの別称で、例えば剣を振るうとステータスに『剣』という項目とレベルが

追加され、そのレベルが上がることにSTRやDEFなどが上昇する。

ちなみに『短剣』のスキルが上がると『剣』と比べてSTRよりもAGEが上昇する。

そして、スキルが1から2に上がると能力の上昇は2または3程度だが、スキルが20代だと能力の上昇率は2桁まで上がる。ゆえに満遍なくスキルを伸ばすよりのと、一つのスキルを伸ばすのではあまり大差ない。

閑話休題

これだとボーナスポイントを使わず、さらに所持金を全てどぶに捨てた状態だ。

そして、それ以上に驚いたのは。

「この容姿は何なんだよ」

見た感じ五年前の俺である。年齢は12歳前後と言ったところか。

「まあ、上級者の俺にはちょうど良いかな」

初心者なら間違いなく匙を投げているが、生憎と俺はこのゲームをやり込んでいるマニア。だからこれくらいのハンデなど物の数ではない。

「とりあえず最初の目標は一軒家を持つことだな」

家さえ持つことが出来れば行動範囲がグッと広まる。薬を大量に調査出来たり鍛冶が出来たりとメリツ

トは計り知れない……まあ、月々に税を納めなければならない欠点があるがそれは仕方ないだろう。

「さてと、じゃあ始めますか」

俺はそう呟いた。

しかし、俺はこの時、これから先に起こることなど想像すらできなかった。

手頃な空き地に移動した俺は簡易な調査台を作成する。

「まずはポーションの調査から」

ポーションとはHPを回復する薬の中で最も安価で親しみやすい類のだ。値段は一個50Gと安い、材料

となる草はそこら辺に生えているので原価はほぼ0。まさに初期に作る物としては打ってつけだ。

「そつえば序盤の頃もこうしてポーションを調査していたよな」

何世代前のゲームとは違って材料を揃えてボタンを押せば完成という代物ではない。そして、このユー
カリア大陸物語というゲームはフルダイブ機能を駆使してリアルを
極限にまで追求した結果、現実と同じ
ように調合の匙加減で成否が分かれるのだ。

まさしくリアル志向。

現実と何一つ変わらない。

ゲーム製作者に殺意を覚えるほどリアルだ。

「確かポーシヨンの調合法は……」

俺は頭の中からポーシヨンの調合法について引っ張り出す。

ああそうだ、確かああいう作り方だった気がする。

捨ててあつた竈と槓を拾ってお湯を炊く。

沸騰するまでの間に材料の草をすり潰しておこう。

「……子供だから力がない」

普段ならシャシャシャとやってしまう作業が渾身の力を込めて行
わなければならなくなっている。だか

らいつもの倍の時間と労力を費やしてしまった。

「さてと、次はこれらの材料を手順通りに放り込んで混ぜると」

まずアカイ口草をすり潰したのを加えて混ぜ、色が淡くなつてきたらアオイ口草を加える。ここから激しくかき混ぜて完全な薄紫にした後キイ口草を加えて今度はゆっくり混ぜて完成。

「まあ、上出来かな」

ポーションを調合しているうちに体が思い出してきた。俺の経験から言つとこれは良い部類に入るだろう。

確認のため出来たポーションを少し飲んでみる。いつも俺が作っている上質なポーションと比べれば劣るものの、市販品よりかは味も効果も高いと判断。

「さすがは俺、弘法筆を選ばずとはよく言ったものだ」

うん、満足。

そして俺はそのポーションを持つて薬売りの店に行く。ここは様々な種類の薬を取り扱っており、その中にポーションが含まれている。

そして俺はその店の番人をしているお姉さんに声を掛けた。

「こんにちは、おねいちゃん」

ニッコリと、キッズスマイル全開で話しかける俺……気持ち悪い。

「あら、ボク。どうしたの？ お使い？」

まあ、そうだろうな。俺もお姉さんの立場ならそう判断するだろう。しかし、俺はお使いでは無い、営業をしに来たのだ。

「おねいちゃん、このポーションをどう思う？」

そう言ってガラス瓶に入ったポーションを見せる俺。

「あら、それは……」

お姉さんの瞳に真剣見が宿る。やはりそこはプロなのだあと実感した。

光に透かしたり、振ってみたり味を確かめた後にお姉さんはホウツと感嘆の吐息を洩らす。

「ボク、これは凄いわよ。少なくともこの街にいる調合師じゃあ一個一個丹念に作ってもこのレベルは作れない。一体どこの調合師が作ったの？」

そう聞いたので俺はにこやかに自分を指差す。

「え？ ボクが作ったの？」

「うん、そうだよ。なら目の前で実演してあげようか」

お姉さんが頷いたのを見た俺は予め用意してあった原料を取り出す。

「それってそこら辺に生えている雑草じゃないの。もっと質の良い草を使用しないと飲めたものじゃないわよ」

忠告してくれるは有り難かったけど、俺は首を振った。

薬売りの店の奥には調合台が備え付けている。やはりこのお姉さんも調合師の端くれなのだろう。

「じゃあ、作るからよく見ておいてね」

そう宣言して俺はポーションを作り始めた。

昨日と手順は似ているが微妙に違う。今回はアカイ口草と一緒にアオイ口草を加えたり、薄紫からさらに透明になり始めた所でキイ口草を追加したりしていた。

お姉さんの言う通りに、これらの草は生えているのよりも栽培した方が手順の変更がなくて楽だが、その分お金がかかる。

と、言っても一草3、4Gなのだが、それでも今の俺にその出費はきつかった。

どうせ俺はこれ以上の難易度を誇るエリクサーを何度も調合して

いるし。

あれはきつかった。ほんの少しでも力加減を間違えると失敗。しかも嫌らしいのが、エリクサーは失敗した時点には現れず、完成してからその失敗に気付く点だ。

あれで何人ものプレイヤーがエリクサーの調合を諦めたか。

「はい、完成したよ」

そう昔の思い出に想いを馳せている内にポーションが完成したようだ。それをコップですくってお姉さんの前へ持っていく。

お姉さんは目をまじまじと見開いた後、それを口に含んだ。

「素晴らしいわ」

しばらく咀嚼した後、そう吐息を洩らすお姉さん。

「これはすごいわ。私の人生の中でもこれほどのポーションにお目にかかったことはない、これなら50Gと言わず、100Gでも売れるわ」

早口に捲し立てるお姉さん。それを見た俺は手応えを感じて切り出した。

「ねえ、おねいちゃん。提案だけど、このポーションをここで売ってみたい？」

博打よりも安定的に収入を得られるのを優先する。確かに露天商は利益が相当出る代わりに、ならず者

による強奪が考えられるし、また売り上げ代をいくらか取られる可能性がある。今の時点で闇の者と関わるのは避けた方が良く、今後の活動に大きな支障が出る。

「ええ、いいわ。むしろこちらからお願いしたいくらい。ところでボクの名前はなんていうの？」

「ユウキ」カザクラだよ。おねいちゃんの名前は？」

「私の名はティータ」エルマライよ。これからよろしくね」

交渉の結果、俺はポーション一つにつき30Gの利益が出ることになった。もちろん、この俺の正体を隠すというのが条件付きで。

「とりあえず今日宿に泊まる分のGは確保できてよかった」

ポーション二個で60G。今回はおまけとして200G余分にくれた。

よし、これなら今日は宿に泊まれるな。

俺は人知れず安堵した。

今日の収穫

収入元を確保できた。

無一文から始まる（後書き）

フルダイブ機能という設定について説明不足でしたので修正しました。

11/4設定を変更しました。

俺は仲間を得た

合計して260G。100万G以上持っていた俺にはこの金額が物足りなく感じるがまあ良いだろう。

何せ全くの無一文からこれだけのGを得たんだ。

さらにこれからポーションを売ることによって安定的な収入を得ることが出来る。

「いやいや、お金のありがたさを感じるねえ」

俺は十二歳の少年とは思えないセリフを吐いた。

クルルルル

「お？」

宿屋に向かっていると突然俺の腹から鳴った。

「ん？ ユーカリア大陸物語に腹が減るなんてことはあったっけ？」
酒場などで食べ物を食べることはあるが、必ず食う必要はなかった。

たはずだ。

ぐーっ

「……とりあえずは腹ごしらえだな」

腹の虫には勝てない。

俺は腹が減る、減らないについての考察は後回しにして近くのパン屋へ向かった。

「毎度ありがとうございます。お釣りは五（S）シルバーと二（B）ブロンズです」

適当なパンを見つくるって俺は代金を払った。

そして手元に残る銀の硬貨と銅の硬貨。

この世界の通貨は1Gで10S。そして1Sで10Bとなっている。

まあ、食料品や安物の素材の単価に付けられるSやBなんて使うことは最近だと滅多にないから忘れていた。

何せ俺がGを使うと言えば何千G単位だから。

「さてと、食べるか」

俺は近くのベンチに腰を下ろし、ついでに買った飲み物もすぐ横に行く。

出来立てらしくパンはまだ熱い。

ふわふわとしている。

「さてと、いただきまー……」

俺が大口を開けてかぶりつこうとした瞬間目の前の少女と目があった。

「……」

少女は何も言わないが、目はしっかりと訴えている。パンをくれと。

年代は俺と同じぐらいだろう。

服装は俺と同じボロの服を着て金色の髪はぼさぼさ、顔も薄汚れている。

元は良いのに台無しだと感じる。

見た感じ小動物という印象を受けた。

「……すい」

試しにパンを右から左へ移動させると少女の目もそれに続く。

グルグルと回転させたら同じように少女の目も回転した。

「きゅー」

どうやらやりすぎて目を回してしまったらしい。

俺は調子に乗ってしまったと反省した。

「悪かった。ほら、これをやるよ」

お詫びに俺は手に持ったパンを差し出す。幸いにもまだ口を付けていないからセーフなはずだ。

「……くれるの？」

途端に少女の目が輝き出す。

本当に素直だなと感心しながら俺は頷いた。

「……ありがとう」

「って、おい!？」

少女は差し出したパンでなく、俺の隣にあったパンの袋を掴んで一目散に駆け出していく。

「ちょっと待て! ドロボー!」

俺は叫ぶがもう遅い。すでに少女の姿は見えなくなっていた。

「はあ、相手がNPCとは言え腹が立つな」

俺は毒づきながらもまたパン屋に赴き、同じパンを注文した。

店員に不思議がられたが、俺が少年口調で事情を説明するとパン屋の店員はクスクス笑い始めた……値段を安くするとかちよつとはサービスしてくれよ。

そして俺はまた同じベンチに座った。

キョロキョロと周りを見渡し、また同じアクシデントが起きないか確認する。

前方良し、左右良しそして前方良し。

俺はパンを手持った。

そして食べようとしたその時。

「本当に申し訳ありません！」

後方から突然大きな声で謝罪させられて俺は引っくり返ってしまった。

俺の目の前には四人の少年少女がいる。女子三、男子一の比だ。しかもその女子の内の一は俺からパンの袋を奪っていった無口女だった。

「ほら、謝りなさい！」

「……ん」

そのリーダーらしき女の子に小突かれて先程の無口女が頭を下げる。

リーダーらしき女の子は凜としていて口調もはきはきとしている。薄汚れているが、髪を洗えば燃えるような赤毛を見せるだろうと想像した。

俺は手を振りながら。

「いや、もう良いよ」

と、答えた。

「盗みを働き、本当に申し訳ありません。ユキは本当に良い子なんです、感情表現が下手ですけどそれは生まれつきなんです」

無口少女はユキという名前なのか。

「申し遅れました。私はキツカ、後ろにいる切れ目がアイラそしてなよなよしている奴がクロスです」

「よろしくお願いします」

「よ、よろしく」

同時に頭を下げるアイラとクロス。アイラの方は髪が藍色であることも相まって冷たく、鋭く切れるような印象を与えそしてクロスの方は俺と同じ黒い髪と瞳から真面目で実直なイメージがある。

「何度も言っただけに僕はもう怒っていないから。だからもう消えてもいいよ」

何度も言っているのだが四人組の少年少女はこの場から去ろうとしない。そして謝り続けている。

「……ああ、そういうことか」

再三言っても謝り続けるのを見て俺は得心した。

彼らは単に謝罪しに来たのではない。それ以上のものをせびりに来たのだ。

「これで良いか？」

俺は観念して財布から10G硬貨を取り出してキッカという少女に渡す。

「き、金貨だ」

「……きれー」

クロスとユキが10Gの光具合を見て感嘆のため息を漏らす。

「ねえ、ここでやめちゃう？」

「そうですね……」

そしてキツカも動揺して後ろのアイラに相談を始める。

「やれやれ、いい勉強になったな」

俺はため息を吐いてその場を後にしようとした。これ以上関わっても仕方ない。

「お待ち下さい」

が、少女に似つかわしくない氷の様な冷たい声音が俺を引き止める。

「ええと、確かアイラだったけ？」

俺が振り向いて尋ねるとアイラはコクリと頷いた。

「僕はもう話すことはないのだけど」

俺は声音を低くして問う。これで俺が苛立っていることが相手に伝わるだろう。

「あ、アイラ、もう止めようよ」

「アイラさん、ストップストップ」

「……怖い」

事実、後ろの三人も怯えているようだ。

しかし、アイラは意にも介さず言葉を紡ぎ始めた。

「私達を買ってくれませんか？」

「は？」

突然の申し出に俺は呆氣に取られる。

「アイラ！？ 何を言ってるの？」

「そ、そうですよ。いきなり何を」

「……おー」

後ろが困惑しているのが伝わってくる。

「あなたは私達と同じ浮浪児の格好をしています但し中身は全く違う、一人で自立できる能力と自信を持っ

ています。あなたは必ず瞬く間にこの最底辺から抜け出すでしょう」

「ほう……」

俺は感嘆のため息を漏らす。

アイラの言う通り俺は違う。薬の調合も出来るし鑑定の目聞きも出来る。さらに鍛冶も出来るため、あつという間に駆け上がるだろう……チートだし。

「NPCとしては洒落た誘い文句だな」

「NPC？」

アイラが首を傾げるが俺は気にしない。

「まあ、面白そうだから仲間に見てみるか」

どうせこのデータはバグであり、エラーから復旧すれば消えてしまふ運命にある世界。

それなら付き合ってやろう。

俺は彼らをもう一度まじまじと見つめる。

「どうですか？」

目の前のアイラは間違いなく抜け目がないだろう。ユキがパンを持ってきたところからここまで持つてくるのは並大抵のことではない。

キツカは決断力というか思い切りが良い。俺に声を掛ける時もある。うだが、彼女は竹を割った様な潔さがある。

クロスは大柄な体格だから力もあるだろう。これなら暴漢に襲われても大丈夫かもしれない。

ユキは確実に何かを持っている。ユキがいなければ俺達は出会ったことすらなかっただろう。

「よし、ついてこい」

「え？　つまり受け入れてくれるのですか」

確認するようにアイラが尋ねると俺は苦笑しながら。

「その通り、だから俺について来てくれ」

俺は仲間を得た（後書き）

2011年9月13日に一部改編しました。

紺屋の白袴

「どこへ行くのですか？」

「まあ、ついてくれば分かる」

俺は疑問を口にするアイラにそっけなく答える。

「急に乱暴になりましたね」

「否定はしないな」

猫を被るのは疲れるんだよ。

確かここら辺りに文房具屋があったはずだ。薬屋から宿屋へ向かう途中で見た気がする。

「ああ、あった」

お目当ての店を見つけた俺は文房具屋へ入って羊皮紙とインクとペンを購入した。

「さて、洋服屋へ行くか」

「……買ってくれるの？」

目をキラキラさせるユキには申し訳ないが、さすがに五人分の服を購入できるだけのGは無い。だから俺は首を振る。

「それはまたいつか今度だな」

不満顔を隠そうとしないユキに苦笑しながら俺は洋服屋へと歩を進めた。

「ここはお前らが来る所じゃない！ 帰れ帰れ！」

案の定、店員に入ること断られる。

まあ、そうだろうな。

浮浪児の集団など洋服屋に縁など無いからな。あつたとしても万引きか。

「はい、これ」

俺は店員に断られるのを想定済みだったので動揺なく10Gを店員に握らせる。

「え？」

突然の出来事に驚いたものの、店員は得心が言ったように後ろへと下がった。

「さあ、入るぞ」

後ろで所在なさげにうろつろしていた四人に俺はそう呼びかけた。

「気に入った服があれば俺に見せてくれ。ただし、絹を使っている服は駄目だ」

変な指示だと思ったのだろう、代表してキツカが尋ねる。

「どういうこと？」

「レベル上絹素材で服を作成するのは無理だからな」

木綿や麻、布は今の俺でも作れるが、絹になるとレベルが二ケタ必要だ。

「もしかしてあんた、服を作れるの？」

「ああ、それが何か」

店で装備を買うのは中級者まで。上級者になると装備は全て自作になる。

何せ一人一人のプレイヤーに個性が出るため店のものでは対応できなくなるのだ。

俺も最終的にはドラゴンアーマーなどを普通に作っていた。

「……どうした？」

ユキを除いた全員がポカンとした表情で俺を見つめる。

NPCが戦闘以外で驚くことなんてあったっけ？

俺が内心で首を捻っている間に四人が集まってコソコソ話合っていた。

「ちょっとアイラ、私達ってすごい人を見つけたんじゃないの？」

「ええ、私もここまでとは思いませんでした」

「夢なのかもしれないよ」

「……それなら殴ってあげる」

興奮しているのか全然内緒話になっていない。

俺はため息をついて先を促した。

「おい、早く決めてくれ」

洋服屋から出た俺達は布屋へと向かう。

上質な布は4桁Gもするが、生憎と今の俺達には用が無い。あるのは値段がB単位の布だ。

「ええと、緑色と青、そして赤色の麻と黒と白と黄色の綿だな」

羊皮紙に書いた字を眺めながら俺は注文する。

お金を払って商品を受け取った。

「荷物持ちは任せて」

後ろの方で控えていたクロスが俺の代わりに受け取る。四人分の布だから結構重いはずだが、クロスは顔色一つ変えなかった。

「力が合って羨ましいな」

ポーション一つ作るにもしんどい俺がそう漏らすとクロスは困ったようにはにかんだ。

その後には雑貨屋へ行つて糸と針とボタンを購入した。

「一人一泊20Gです」

「分かった」

俺は頷いて五人分の代金を支払った。

俺達がいる場所は宿泊街の一角にある宿屋だ。

本来なら薬屋のお姉さんが勧めた宿屋に入る予定だったのだが、出費が増えたのでお金が足りなくなった。

困っていた俺にこちら辺の地理に詳しいキツカがいい宿があると助言して今、ここにいる。

「悪くはないな」

キツカ推薦の宿屋に入った第一印象がそれだった。

『マミエルの夢』という名の宿屋で、一階が酒場そして二階が宿屋のオードソックスな冒険者の宿だった。

三人部屋を二つ借りて俺とクロス、そしてキツカとアイラ、そしてユキに分かれた。

本来なら俺とクロスの2人だから2人部屋なのだが、これから作業するので手広い部屋が欲しかったのだ。

俺は主人に別料金として石鹸とお湯の代金を支払って四人に入るよう促す。

もちろんレディーファーストだ。

三人部屋に五人は多過ぎだろうと考えたが、俺達は子供だったので十分スペースがあった。

全員集まったところで俺は買ってきた布で服を作りながら話を切り出す。

「ここは何という街だ？」

俺の質問にアイラが答える。

「シマール国の王都、カルギュラスです」

「カルギュラス……」

俺は口の中で反芻させる。

ユーカリア大陸においてカルギュラスという名の場所があった気がする。

しかし、俺が知っている中では少なくとも街じゃなかった。

「廃墟じゃないのか？」

ゲーム上の設定ならばカルギュラスは魔物の大進行によって滅びているはずだ。俺が昔クエストでその場所へ向かったのだから間違いない。

「何を言っているのですか？」

アイラが首を傾げる。そうだろうな、俺がアイラの立場でもそう言うだろうな。

気になった俺は今日の年数を尋ねてみるが。

「さあ？」

と、返された……まあ、浮浪児に年数など知っているわけないよな。そこら辺りは明日薬屋のお姉さんに尋ねてみるか。

「ほい、一着完成」

ユキの服が完成した。白をベースとしたワンピースでアクセントとしてリボンが付いている。

「……ありがとう」

そつけない返事だが、内心は大いに喜んでいるのが分かる。だって耳たぶが赤いもん。

「明日からはどうする予定ですか？」

アイラが明日からについて聞いてくるので俺は正直に話した。

「明日の午前中はポーションの材料となる草を取る予定だ」

「ポーション？ 草？」

アイラが疑問符を浮かべるので俺は苦笑して訳を説明する。

「実は今日薬屋の主人であるティータさんと交渉してポーション一個につき30Gで引き取る取引をしているんだ。だからポーションの材料となる草を集めるわけ」

俺がそこまで言うと、他の四人はまた隅っこで集まって内緒話を始めた。

「ねえ、聞いた？ あいつは安定的な収入があるのよ」

「これならもうゴミ漁りしなくて済みそうですね」

「これは夢だ、きつと夢だ」

「……可愛い服」

若干一名会話に加わっていないように見える。

しかもやはり声が大きいので内緒話になっていない。

「ほら、出来たぞ」

俺はアイラが選んだ黄色のブラウスと青色のロングスカートのセツトを横に置いた。

無論、アイラがすごい勢いで取りに来たのは言うまでも無い。

こういう所はやはり女の子で子供何だなあと、外見子供の俺が微笑ましく思った。

「あの、お手伝いできませんか」

次の服の作成に取り掛かっているとクロスが口火を切った。

「ん？ どういうことだ？」

手の動きは止めないまでも俺は返事をする。

「アカイ口草とアオイ口草、そしてキイ口草を集めているんですよ
ね」

「そうだな。ポーション作りにはその三つが不可欠だ」

「それらの草は雑草でどこにでも生えています。だから自分達がそれを集めるといふのはどうかな？」

「そうしてくれると助かるな、手間が省ける」

俺がそう答えるとクロスはパツと顔を明るくして。

「そうですか、ありがとうございます」

「礼はいい。そして、キツカの服が出来たぞ」

赤を基調としたこの世界のオードソックスな服装なのだが、スカーフでなくズボンとしているのはキツカは動きやすい冒険者が着るような服を選んでいたからだ。

キツカがそれをうつとりと見つめているのを見ると俺も嬉しくなる。作った甲斐があった。

「ああ、それなら作業用の服を作るための布を買ってくるんだっとな」

俺は失敗に気付く。

雑草を拾うとなれば当然服は汚れてしまう。そして、俺がさっき作った服は彼らのお気に入りであり、機能性は重視されていない。

「……大丈夫」

さて、どうしたものかと悩んでいると、それを察知したのかユキが慰めにくる。

「何が大丈夫なんだ？」

「私達は雑草取りをしない。その代わりにユウキが作った服を売る」

「なるほどね、そういうことか」

俺の技能はポーシヨン作りだけでない。今、実演しているように裁縫も得意だ。だから服を作ってそれを売ればいいとユキは提案していた、が。

「それは止めた方が良い」

露天商は俺もやろうとしたが、リスクが高すぎて止めた。シヨバ代とか言って金を取られるならまだしも変な奴らと関わり合いたくない。

「言い方は悪いが君達から俺の情報に辿り着く奴らが現れないとは限らない。俺はまだ目立ちたくないんだ」

いずれは関わり合いになることだろう。

しかし、それは今でない。

何の力も無しに闇の者と関わり合うと待っているのはゲームオーバーだ。

「……残念」

ユキは不満そうな顔をしていたが、俺が絶対に折れないことを悟るとしぶしぶ引き下がってくれた。

俺はそんなユキの頭をポンポンと叩いて。

「アイディア出してくれたことは嬉しい、だからそんなに落ち込まなくてもいいぞ。そして、クロスの服だ」

クロスはＴシャツに短パンと少年らしい服装を好んでいた。アクトメントとしてポケットが四つも付いている。

全員の服を作り終えた俺はウーンツッと一伸びした後彼らに言った。

「君達全員にお小遣いを上げるから明日は街で遊んでおいで。けれど明後日からはちゃんと働いてもらうよ……」って、聞いていないな」

四人は俺が自作した服を眺めるのに頭が一杯らしい。全員が興奮した面持ちで服の見せあいをしている。

俺はその様子を眺めながらベッドへ横になる。

ふかふかの感触を楽しみながら今日一日の出来事について思いを馳せた。

いきなりログアウト出来なくなったり、ステータスが貧弱だったりするが、今日の行動は悪くなかったな。

明日からはティータさんの所へ行ってポジション作りだ。これではばらくお金を稼ぐか。

そう言えば靴を作るのを忘れていたな、明日も雑貨屋さんへ行って材料となる皮でも買うか。

頭がぼんやりしてきた。どうやら本格的に寝るらしい。

いつも思っけどゲームの中で眠るといふのは不思議な感覚がするんだよな。

そう言えば大事なことを忘れていた気がする。

確か、何だっけ？

俺は睡魔によって使い物にならなくなった脳をフル回転させ、次にキツカやアイラ達が持っている服を見て思い出した。

あ、自分の服のことを忘れていた。

紺屋の白袴（後書き）

次の話の内容は半月ほど時間が飛んだ時点から始まります。

四人が素材を集めて主人公のユウキがポーションを作る。

そんな日々が続いていたのですが、ある日にクロスがお願いをユウキにすることになります。

さて、その内容とは。

魔物退治（前書き）

すいません。

予告通りの内容にはなりませんでした。

内容が長くなり過ぎましたので二分割します。

魔物退治

カンカンカンカーン！

ジューー！

「うん、まあまあかな」

俺は先程製造が終わった青銅の剣にそう評価を下す。

この武器はキツカが使用するので市販の青銅の剣よりも細くして軽さを上げていた。

けど、強度まで下げたわけじゃないから。むしろ2倍以上の耐久性がこの軽い青銅の剣に宿っている。

キツカは「大人と同じ武器を扱いたい」とか駄々こねていたけど、どれだけ粹がっていても俺達は12歳の子供だからね、大の大人が使う武器を軽々しく振りまわせないから。

「さてと、後はアイラが使うボウガンの矢じりとユキが使うロッドだけか。おじちゃん、まだ使わせてもらって良い？」

俺が店に奥にいる職人にそう尋ねると「あいよ」という返事が返ってきた。

良かった、これで今日中に作れそうだ。

何せクロスは力があるので普通の武器と比べて一回り大きいのを
作る予定だった。サイクロプスやキングアリゲーターなど大型モン
スターとの闘いを想定した武器で、例えば鎧を着ていても、鎧ごと一
刀両断するのを作ろうとしたが、それが想像以上に大変だった。

俺はこの時ほど子供であることを悔やんだ経験は無かった。

何せ重い。

ハンマーを打つのに水で冷却するのにも既存の武器と比べて倍
以上の負担がかかる。

たった2倍程度の負担ぐらいどうってことないと考えた時期が俺
にはありました。

もし、過去に戻るのならその時の自分を殴ってやりたいです。

手を抜くと失敗してしまうから休めません。正直最後の方は意識
が朦朧としていました。

どうやって宿屋に帰ったのか覚えていません。

気が付いたら朝でした。

筋肉痛で腕がえらいことになっていましたが、納品であるポーシ
ョンを作成しなければならなので根性でやり遂げました。

ちなみに俺が作った『鋼の大剣』をクロスは軽々と振り回してい
ました。

……俺は持つことすらできないのに。

勉強とは大事なものだ。

それを怠ると最悪死へと繋がる。

だから俺は心を鬼にしなければならない時がある。

「もう勉強嫌〜」

そう、例えばキツカを鎖と手錠で机に拘束させてでも知識を叩きこむ必要があるのだ。

「だから何度でも言っているだろう。字を覚えろと、それが出来なければ何も始まらないぞ」

「字を読めなくても、勉強できなくても死なない〜」

「死ぬから言っただろうが!」

俺の一喝が部屋に響き渡った。

「まったく、キツカ以外はすでに魔物特性の勉強に入っているのに、お前だけは机にじっとしていることすらできないよな」

浮浪児としての生活が長かったのか、最初の内は全員椅子に座つても5分すら持たなかった。まあ、浮浪児として行動しなければ死んでいたのだからじっと出来ないのは大目に見よう。

「放して、自由にさせて」

が、それがいつまでも続くとさすがの俺も堪忍袋の緒が切れそう
だ。なので俺は仕置きを兼ねてある紫色の液体を取り出した。

「そ、それは？」

キツカの動きがピタリと止まり、視線が俺の手に持っている液体
へ釘づけになる。

「そう、精神安定剤入りポーションだ。これを飲めばキツカも大人
しくはなるう」

ポーションにリラックス草加えると、飲んだ者を落ち着かせると
いう効力を持つ。アイラ達にも最初の内は椅子に座らせるためにこ
れを飲ませていた。

「いやー！ 苦いのいやー！」

ただこの薬、相当苦い。俺も一舐めしたが体が壊れるかと思った。
例えるならゴーヤの中身の部分を5倍に濃縮した苦さと言っべきだ
ろうか。

もしかするとアイラ達が素直に座ったのはポーションの効能なの
ではなく、二度とこの薬を飲みたいくない恐怖観念からゆえだろうか。

「さあ、口を開けておけよ。でないと鼻から入れるぞ」

「たすけ〜て〜!!」

キツカの悲鳴が宿屋中に響き渡った。

昼前

外へと繋がる門の前に4人の少年少女が整列し、その前に1人の少女が剣を掲げていた。

俺、キツカ、アイラ、ユキ、そしてクロスが装着している武器防具は全て俺の手作りだ。

ユウキ

青銅のダガー

革の鎧

革の小手

布の靴

キツカ

青銅の剣

プレートメイル

青銅の楯

革の靴

アイラ

青銅のボウガン

プレートメイル

ガントレット

革の靴

ユキ

ファイアロッド

絹のローブ

革の小手

布の靴

これだけ装備が充実していれば死ぬことはまずありえないだろう。どんなゲームにも最も装備は重要な位置を占める。装備を侮る者に勝利などありはしない。

その問いに否と答えるならば序盤から装備を一切変えずにラスボスまで行ってみてほしい。大抵の人は挫折するだろう。つまりそれだけ装備は大事だということだ。

俺が作った装備のおかげでキツカ達はレベルこそ一だが、そのステータスはレベル10程度にまで引き上げられている。近辺の魔物の生息についても確認したが、レベルが5もあれば集団で襲われても戦えるほどの難易度らしい。これなら負けることはないだろう。

ただ……

クロス

鋼の大剣

鋼の鎧

鋼の楯

鋼のすね当て

はい、1人だけ別格がいます。

おそらくクロスのステータスはレベル15にまで引き上げられています。

一度キツカがクロスを羨ましがって鋼の楯を装備してみたけど、腕すら上げられない有様でした。

本当にクロスは俺と同じ12歳かと疑ったよ。

クロスが12歳と言うのは俺以外全員が主張していたけどね。

ああ、それとユキは魔法の才能があるらしいので魔法の扱い方について多少レクチャーした。

まだ火の玉が出る程度だけど、この辺りの敵だとそれで良いだろう。

ユキはもつと火力を望んでいたが、危ないので教えなかった。

ちなみに俺の現在のスキル。

剣	6
魔法	5
斧	7
採取	8

弓矢	5
料理	8
鍛冶	10
調合	15
裁縫	10

ポーション調合やら草採取やら武器作りやら4人に戦い方を教える
やらでこの半月の間に相当上がりました。

裁縫がこんなに高いのは俺が毎晩簡単な服を作っているからだ。作
成した服は4人を通して無料で配って歩いている。

これは利益度外視で行っている。

裁縫というのは後々になってから重要になる。

極論を言えば剣や魔法などよりも重要。

何せ状態異常を防いでくれる防具を作ろうと思えば裁縫が必須だか
らね。

裁縫をめんどくさがって上げなかった俺は後でどれだけ苦労したか。

一ヶ月ぐらいずっと裁縫していた記憶がある。

おかげで学校の家庭科でSを取りました。

「皆、装備は持ったわね？」

一番張り切っているのが剣を掲げているキツカ。

聞くところによると昨日は興奮して眠れなかったらしい。

アイラとユキが眠そうに目を擦っている。

「ユウキ、ポーションは大丈夫？」

確認することは良いことだが剣を俺のど元へ突き付けるな。万が一があつたらどうする。

「ポーション、ポイズンボトル、パラライアウト、スリープブレイクなど近隣のモンスターが使う状態異常に対する対策は整っている」

「そう、上々ね」

キツカが当然とばかりに頷くがこれらは高いんだぞ。

もし俺が作った薬を一式買おうとすれば300Gは普通に飛ぶという事実を忘れてはいまいか。

と、ここでユキがクイクイと俺の袖を引っ張った。

「…………お弁当は？」

「全部ユキの好物にしている」

「ん」

俺の答えに満足したのかユキは満足そうに頷いた。

「思えばここまでの道のりは長かったわ」

外に出た俺達はキツカを先頭にして進んでいると、不意にキツカがそう口火を切った。

「この瞬間を私はどれだけ待ち望んでいたか」

「感動するのは勝手だがキツカがちゃんと俺の教えた通りにしていればもっと早かったぞ」

今は青銅のダガーしか装備出来ない俺だが、前のデータの時は剣術もレベル93あった。だからその経験を生かして戦いの基本を教えていたのだがキツカは全然聞いてくれなかった。

「あんな型に嵌った動きじゃ意味無いわよ」

このクソガキめ。

アークドラゴンやジェネラルオークなど一級モンスターを相手にしていた俺に言うか？

畜生、少年の体が憎い。

そうこうしている内に近くの草むらが動き、ついでモンスターが飛び出してきた。

相手はワームやビッグアントなど雑魚モンスター。

これといった特殊攻撃も無いので落ち着いて対処すればいいのだ

が、いかんせんこちらは初めての戦い。

クロスも顔がこわばって大剣が震えていた。

仕方ない、ここは経験者である俺が先手を出てや——。

「うりゃあ」

「——ふっ」

「……ファイアボール」

俺がクロスを案じている間にすでに戦闘は始まっていたようです。

それにしても内の女性陣は容赦無いなあ。

キツカは喜々としてモンスターに斬りかかり、アイラは冷静にモンスターの目など急所を射抜いている。そして感情の表現の乏しいユキでさえ正確に魔法を詠唱・発動していた。

モンスターも抵抗とばかりに攻撃を仕掛けてくるが俺の作った防具に阻まれてダメージどころか足止めにもなっていない。

「ふっ、口ほどにもないわね」

最後のモンスターを切り捨てたキツカが軽く決めポーズを取った。

「俺の出番はなしですか」

俺は呆れ調子で呟く。

これならばもう少し装備を弱くしても大丈夫なのではないだろうかと考えてしまうほど一方的だった。

その後は祭り状態に近かった。

モンスターを発見すると俺を除く全員が突撃してあっという間に息の根を止める。

それが単体だろうが集団だろうがお構いなしに突撃して刈って刈って狩りまくった。

「見て見て！ 『剣』のスキルが5よ。随分上がったと思わない？」

「私は『弓矢』が6ですけどね」

「何で私よりアイラの方が上なのよ！？」

「私の武器はこれですからね、当然です」

「ボウガンは卑怯よ！」

モンスター狩りに一息ついた俺達は持ってきた弁当で昼食を取っていた。

キツカとアイラはお互いのレベルについてやいのやいの言い合っている。

「本当に彼女達の元気は底なしだなあ」

クロスがそんなことを言うが、あんな重装備で軽装備の俺達と同様の運動量にも関わらず、息一つ乱さないというのはどういうことだ？

「……美味しい」

具が気に入ったのだろう、黙々と弁当を食べるユキ。

その様子は小動物みたいで可愛い。

「ほら、これも食べる」

だから俺は自分の分から一つおかずをユキに差し出す。

「……くれるの？」

するとユキは目を輝かせて俺に尋ねてきたので「ああ」と答える
と。

「……ありがとう」

「つて、おい!？」

あろうことがユキはおかずでなく俺の弁当箱をひったくった。

アハハハハハ

草原に軽やかな笑い声が響いた。

魔物退治（後書き）

次こそがクロスが主人公にお願いする場面です。
約束を破ってしまい、申し訳ありませんでした。

魔物退治についてどうして子供達が魔物を相手にできるのか説明が
不足していたため追加しました。

目標達成

ゴリゴリゴリゴリ

「よし、これでノルマの三〇本完成」

俺はいつもの通りに薬屋でポーションを作っていた。

「お疲れ」

薬屋のお姉さんであるティータさんが、俺が終わったのを見計らって出てきた。

「そう言えば今日は友達と一緒にいなくて良いの？」

ティータさんは俺達が外へ出て魔物の討伐をしているとは信じていない、だから俺はその問いかけに苦笑して。

「最近はお前抜きで遊んで（戦って）いるんだよ」

最初の数回は全員揃って出ないと街外へ出なかったが、最近はお前でも行くようになった。

俺はソロで行くのは大変危険だと懸念したのだがそれは杞憂に終わった。

キツカ、アイラ、ユキそしてクロスは長い間浮浪児としてスラムを生き抜いている。

そのため野生の勘が研ぎ澄まされているのか危険に関しては敏感だ。

先日、苦勞しそうなキングワームに遭遇した時も一人で突っ走らずに俺を含めて五人が見事なコンビネーションを発揮して敵を沈めていた。

だから大丈夫だと俺は判断している。

「あらら、はぶられちゃったの？」

こちらの状況を誤解しているティータさんのセリフに俺は苦笑を深めてしまった。

そして話題を切り替えるためにポーションを渡す。

「はい、これが今日の分」

「いつもいつも御苦勞様。ボクの作ったポーションは常連さんから評判が高いわよ」

ティータさんはいつまでたっても俺をボクと呼んで子供扱いする。それがたまに不愉快だと感じる時があるけど、それを責めてもティータさんは決して改めようとしなないことが分かっていたから俺はもう諦めている。

「明日もポーションだけで良い？ 何ならポイズンボトルやパラライアウトも作るけど」

「お生憎様、そちらは事足りているの」

「残念」

俺は肩を竦める。状態異常回復系はポジションより高く売れるが需要が少ない。

俺がポジションに拘る理由の一つだった。

最も、ティータさんに言わせると。

「状態異常回復系の調合の方が難しいんだけどね」

らしい。

まあ、調合レベル105だった俺から見るとポジションもポイズンボトルも一緒なんだけどな。

「そう言えばボク、結構稼いだんじゃないの？」

「うん、僕は今10000G以上持っているよ」

ポジションは一日30個と決まっているが、たまに予約買出しなど大口取引が三、四回あった。

大口取引一回につき大体ポジション二〇〇個ぐらい頼まれるから相当稼いだものだ。

大口取引は契約外として大目に一個40Gで買い取って貰えたからこちらはホクホクだ。

「で、それがどうしたの？」

「ボクって何でお金を集めているの？」

「それは家を持つためだよ」

家を持つことが出来れば大型の調合台や鍛冶場などが創設できるので、これ以上誰かの場所を借りなくて済む。

この調合台もポーション作りのみ認められていて、それ以外の使用は料金を取られていた。それが無料になれば今後の活動がぐっと広まることは予想できる。

「ねえ、ボク。提案何だけど、そのお金を担保にして家を手に入れない？」

「どういうこと？」

「近々郊外に空き家が出るのよ。で、その家の持ち主は色々なことをやっていたらしくて調合台や鍛冶場は勿論のことキッチンや畑まで完備しているのよ」

「へえ」

俺は感嘆する。もしこの話が真実ならばそれは非常に嬉しいことだ。

俺が家を持った暁にはそうだったものをいずれ作る予定だったから、それが省けて非常に助かる。俺にとっては非常に面白い話だが。

「まずその家を見たいのだけど」

ティータさんが俺を騙すことなんてないが、確認のため聞いておく。

するとティータさんは唇の端を吊り上げて。

「そう言うと思ったわ、この店が閉店してから向かいましょう」

閉店になった時刻に俺は薬屋の前で待機していた。

しばらくするとティータさんが現れる。

「お待たせ、待った？」

「いや、僕も今来たところだよ」

ここは社交辞令。

本当は1時間ほど待たされていた。

「ここがそうよ」

馬車で揺られること30分、目的の場所へと辿り着く。

まず始めに俺は立っている場所と紙で示されている場所とを示し合わせて誤りがないことを確認した。何せ他人の家を案内されちゃたまらない。

「ボクって用心深いわね」

ティータさんが感心と苦笑の入り混じった表情をした。

それはアイラから口を酸っぱくして言われていたからな。

この二テイルス（二ヶ月）アイラは俺に詐欺師のテクニックについて何度もレクチャーしてくれた。

アイラ曰く俺は騙されやすいのだから、詐欺師がどのようにして人を騙すのか方法ぐらいいは知っておきなさい、らしい。

「ほう……」

俺は感嘆のため息を零す。

中の様相は俺が家を買ったらこうしようかという想像を具現化したようだったからだ。

ちょっとした屋敷になっており、執事やメイドがいてもおかしくない。

そして外には広い畑もあって離れには鍛冶場も備え付けられている。

家の中を拝見してみる。

一階は大きな広間となっており、ドアを隔てた先には調合台やキッチンがある。そして二階へ続く階段を上がると、部屋がいくつもある。

これなら一人ずつ部屋を割り振ることが出来るだろう。

「これは本当に良い物件だね」

心なしか俺は興奮していた。

ここでティータさんが切り出す。

「で、この家なんだけど、おそらく300000Gで売りに出されると思うわ」

「300000か……」

俺は考え込む。

今あるお金がとてもしゃないけど払えない。しかし、この家は絶対に欲しい。

「これは提案何だけど、今のお金じゃボクが家を買えないから、私も一緒に出してあげる。そして200000Gはボクが返してくれば良いよ」

「え？ どういうこと？」

「だから私が残りの200000Gを払うということ。ボクには結構

お世話になっているからね。これまでの利益を考えるとこれぐらい安いものよ」

ティータさんは俺の作ったポジションを100Gで販売している。

つまり少なくとも見積もっても30000Gはあるのだ。

「けど、それは悪い気がする」

「何言っているの、ボクは家が欲しかったのでしよう。あの時、私から今日の年数を聞いた時から人が変わったようにお金を集め出したわ」

現在はイルヴァナス歴四五八年。

そして魔物による大進行によってこのカルギュラスが廃墟となるのが四六三年。

つまり後五年でこの都市は跡形もなくなってしまうのだ。

それを聞いた瞬間俺は今までの戦略を見直す必要が出てきたと感じた。

本来ならばこの都市を拠点としてゆつくりと力を付けようと考えていたが、それは諦める。

俺は前の住み家だった工業都市ジグサールに移り住み、そこで力を付ける計画へ変更した。

しかし、工業都市ジグサールの周辺にはこと比べ物にならない

強大な敵が徘徊している。

五人組のパーティでも平均レベルが30以上必要だろう。

当然ながら今の俺にその都市へ辿り着くことは不可能。

だから俺は一年以内に家を持ち、そこで各スキルのレベルを上げるのと並行して自分のレベルを上げることにした。

そのための第一歩として必要だったのが家だったのだ。

俺が黙りこんでいるのを見て何を思ったのか、ティータさんは腰を下ろして視線を下げ、俺の肩を掴んで語りかける。

「ボクが何を考えているのかお姉さんに分からないけど、ボクが焦っているのは伝わってきているよ。一度力を抜いて深呼吸して。ほら、少なくともお姉さんはボクの味方だよ」

俺は我知らず赤面した。

ティータさんは俺の母親に似ている気がする。

そう言えば母さんも今の様な恥ずかしいセリフを真顔で言っていた気がする。

あの時は何とも思わなかったが、今のようになるとこんなにも嬉しくなる。

そしてティータさんは立ち上がってニコリと微笑んだ。

「さあ、行きましょう。早くしないとこの家を誰かに取られてしま
うよ」

それを聞いた俺は慌てて先へと進むティータさんの後を追った。

数日後、俺は驚かせたいものがあると言ってキツカ、アイラ、ユ
キ、そしてクロスを連れ出した。

「ねえ、どこに行くの」

初めて乗る馬車に戸惑っているのか所在なさげにしているキツカ。

それに俺は「着いたら解る」と笑った。

そして到着。

「ここは何だと思う?」

俺が四人に聞くと、しばらく考え込み、最初にアイラが手を上げ
た。

「立派な屋敷ですね」

「そう、立派な屋敷だ。で、これは誰のものだと思う?」

ここまで言うときアイラをはじめ全員が理解したらしい、目を丸く
見開いてありえないというように首を振った。

「まさかこれは」

「そう、アイラの想像通り、俺達の家だ」

それを示すかの様に表紙には俺達五人の名前が記されていた。

「そして、さらにサプライズがある」

俺は隠していた小箱を目の前に持ってくる。

「家を持ったということは社会的地位があるということだ。どういうことだと思う?」

俺が尋ねると今度はユキが。

「……市民になれる」

「そう、その通り。これが俺達五人の市民証明書だ」

ティータさんに用意して貰った羊皮紙を一人一人に手渡す。

この市民証明書は『市民』になるために必須なものだ。

これで俺のステータスが『浮浪児』から『市民』に昇格できる。

『市民』になると出来ることがグッと広まる。

病院で診てもらえるし、図書館も利用できる。政治にも関わることが出来る。

そして何より俺は自分で作った物を自分で売ることが出来るのだ。
何せ『市民』だから。

人間と認められた証だから闇の者もおいそれと手出しが出来ない。
つまり、遠慮なく商売が出来る。

あ、もちろん薬だけはティータさんの所で売るよ。
そうするのが礼儀というものだろう。

はい、感傷終わり。

「さてと、入ろう。俺達の城——」

「待って下さい！」

俺がそう宣言して一歩踏み出そうとした時、突然クロスが大声を出した。

俺はつんめのってしまふ。

「これさえあれば自分達は市民なんですよね」

「まあ、そうなるけど」

ぶつけてしまった鼻頭を押さえながら俺は答える。

すごく痛いし、それ以上に恥ずかしいぞ。キツカもクスクスと笑っているし。

「学校にも通えるんですよね」

「市民だから当然の権利だな」

「だったら、お願いします！」

クロスは両膝について地に頭を擦りつけ始めた。

この出来事には俺を含めて全員が驚く。

「自分達を学校へ通わせて下さい！」

そしてクロスは思いの丈を語り始めた。

「僕は昔から騎士に憧れていました。将来は騎士となって国を守りたいと考えてきました。けれど僕は市民権を持たない浮浪児です。騎士になるための試験など受けることが出来ません！」

普段は温厚なクロスがここまで熱く語るとは。

よほど騎士への思いがあるに違いない。

さて、どうしよう。

学校へ通うとなるならばそれだけお金が必要となる。しかも騎士の養成学校となればなおさらだ。どれだけ低く見積もって通常に三

倍はかかるだろう。

「けど、まあ良いか」

あのクロスが自己主張しているんだ。

普段から我がままを言わないことを鑑みればそれぐらい良いだろう。

幸いにも『市民』になったから金策のあてはあるし。

「分かった、学費は俺が何とかしよう。だから君は学校に行ってくれば良い」

俺はそう言っただけで立ち上がらせようとしたがクロスは頑として動こうとしない。何故かと燻しっているとさらに言葉を紡いだ。

「僕だけじゃないんです。キツカやアイラ、そしてユキも一緒にお願います」

「く、クロス!?!」

「何を言っているのですか!?!」

「……」

それにはさすがにキツカとアイラ、そしてユキが反応した。

「キツカは冒険者に、アイラはレンジャーにそしてユキは魔法使いになりたいのです。ですから、僕だけでなく彼女達も一緒にお願

します！」

「ふむ、それは本当か？」

俺がジロリと視線を向けると、3人はバツが悪そうな顔をするが、
イイエとは答えなかった。つまり彼女達は学校に通いたいのだろう。

「しかし、まあ揃いも揃って学費が高い所ばかり」

どれもこれも全部学費が通常の学校と比べて高い。

そして最も高いのが、ユキが希望する魔法使いのための学校で、
これは通常の学校の学費の五倍はする。

4人全員にかかる学費を合わせると、通常の学校に14人送り込
めるほどの莫大な金額が掛かる。

これはさすがの俺も躊躇してしまう。

この家も二万Gの借金があるし。

俺は四人を見ながら思案する。

果たして四人にそれだけの投資をする価値があるのかどうか。

それらの学校では良い教育を受けられるから、もし四人全員が付
いてきてくれるのならば工業都市ジグサルまでへの道のりは楽に
なるだろう。

ジグサルさえ辿り着ければ何とかなるから俺についてくるなり

別れるなり好きにして貰っても構わない。

しかし、それはあくまで順調に事が進んだ場合だ。

もし俺に何かあれば学費の支払いは不可能になり、彼らは学校を辞めてもらうしかない。そうなれば今までの投資も水泡に帰してしまふ。

逆に彼らが問題を起こしてしまっても水泡に帰す。

ここは重要な分岐点となる。

学校に行かせるか否か。

投資をするか否か。

考え、考える。

キツカ、アイラ、ユキ、そしてクロスを順に眺めながら俺はどうするか思考をフル回転させる。

20分ほど経ったのだろうか。

その間誰一人声を出さなかった。

その様子を見て俺は四人の覚悟を知った。

「Be ambitious 大志を抱け」

俺はそつ口ずさんだ。

誰かが言ったのかを忘れたが、とても良い言葉だった気がする。

よく考えると俺は現実世界でも目の前の彼らの様な友人もいなかったし、将来はこうなりたいと考えることも無かった。

ただ、ゲームをしてさえできれば何も要らなかった。

だからこそ俺は彼らが眩しく映る。

俺に持っていない何かを持っているキツカ、アイラ、ユキそしてクロスが羨ましい。

「良いだろう」

俺は呟く。

「そこまでやりたいことがあるのなら、全てを出し切れ」

「では」

クロスが目を輝かせたので、俺は深く頷いて。

「自分が望むままにやってこい」

「「「「あ、ありがとうございます」」」」

四人全員が感激した面持ちで同時に頭を下げてきた。

「さてと、これからが大変だぞ。お前達は字が読めるか。それが出来ないと話にもならん。だから明日から特訓だ」

俺は照れくさかったので踵を返し、これからしばらくお世話になるであろう家に歩を進めた。

柄にもないことを言ったと自覚している。

今の俺はきつと変な顔をしているだろう。

このまま何事もなく自室に閉じこもって暴れたい衝動に囚われて集中力が疎かになった結果。

「大好きー!」

「必ず応えます」

「……一生忘れない」

「ありがとうございます!」

「——おわあ!」

キツカ、アイラ、ユキそしてクロスから抱き付かれてもみくちゃにされた。

目標達成（後書き）

予告通りクロスが主人公にお願いしました。

けど、失敗した感が否めません。

慣れないことはするものではないと痛感しました。

これで第一部は終了です。

無一文から家を持つまでの流れでしたが、流れが速過ぎたのではないかと反省しております。

第二章入る前に番外編としてアイラ視点でこれまでの流れを紹介したいと考えています。

番外編 アイラの視点（前書き）

番外編です。

ですので読まなくとも小説の流れに差し支えはありません。

主人公が拾った四人組の一人であるアイラ視点で第一話から第五話まで進みます。

アイラが主人公の活躍を見てどのように感じたのかを想像して頂けると幸いです。

番外編 アイラの視点

『市民』になること。

それは私を含めた全浮浪児が持つ願いであり叶わない夢であった。

私、アイラは親の顔を覚えていない。

物心ついた時には既に浮浪児としてその日その日を生き抜くのに必死だった。

ましてや私は女の子。

一人だと喰われて終わり。

だから生きるための知恵として私は仲間を組んでいた。

思い切りは良いけど猪突猛進なキツカ。

天然不思議系のマスコットキャラクターであるユキ。

気は弱いけど力と体格は規格外のクロス。

そして常に周囲の気を配って策謀を張り巡らせる私。

この四人で徒党を組んで過ごしていた。

盗みは日常茶飯事、詐欺や置き引きも普通にやっていた。

基本的に計画の立案は私で実行するのがキツカ。

たまに他の浮浪児グループと一触即発状態になった時はクロスの出番。

あいつは気が弱いけど力が強いから大抵の浮浪児は彼一人でどうにかなる。

ユキは……何でいるのか私も分からないわね。

いつの間にか私達の仲間に加わっており、気が付けば行動を共にしていたみたい。

邪魔にならないようだからチームのマスコットとして置いている。

それだけ。

それだけのはずだったのに、ユキがあいつを見付けてきたのは驚いたわ。

ユキは珍しくパンの入った袋という戦利品を手中にして戻って来たとき、私はパンの持ち主について興味を持った。

このパンは浮浪者専用のパン屋でしょう。

ならば必然的に持ち主は市民証を持っていない浮浪者ということ

になるわね。

ユキが言うにはこのパンを一人で持っていたという。

この量のパンを一人で？ 仲間もないのに？

少なくともただの浮浪者じゃない。

身元の知らないユキにあっさりとパンを奪われたことも相まって私は会ってみたいと感じた。

よほどの大馬鹿者かそれとも……

「提案があります」

久しぶりのまともな食事ではしゃいでいる三人に向かって私はあの考えを披露した。

結論的に言えば、ユウキという少年は想像以上だった。

あの時の「私達を買って下さい」発言は吊り橋を目隠しで渡るぐらい危険な賭けだったけど、その分見合った報酬——きれいな服とお金を手に入れたわ。

今、ユウキはベッドで熟睡している。

私達にきれいな服を作ってくれたのに、ユウキはボロの服を着ているのは多分自分の分の服を作り忘れたのだろっ。

可愛いところあるじゃない。

ユウキはしばらく食べられるだけのお金を置いてくれたから、私はここから逃げ出そうかと提案したけど反対多数で却下となった。

いつもは賛成してくれるキツカが反対するとは珍しい。よほどユウキが作った服に感動したのね。

私の考えは却下されたけど、不思議と腹は立っていなかった。

それは無意識の部分で彼について行ったほうが良いと訴えているのかもしれない。

まあ、今すぐに離れる必要はないわ。

幸いにも明日は貰ったお金で色々と遊べるから思いっきり楽しもうかしら。

その途中で他のグループと会ったらどうしようかな。

洋服を着てお金を持っている私を見た彼らはきっと悔しがるだろうな。

思いっきり自慢してやろうかしらね。

……自慢した結果、私は毎日服や靴をスラム街の入口に置く約束をさせられたわ。

どうやら舞い上がっていたみたい、反省しなくちゃ。

そして、驚いたことにユウキは毎日服や靴を作ることを快諾したのよ。

いえ、良かったのよ。

でないと私達のグループは全浮浪児の敵になっていたから。

ありがとうございます、ユウキ。

どうやらユウキは私達を驚かせるのが大好きなようね。

いったいどこの世界に銅貨や金属ゴミから武器防具を作る浮浪児がいるのか。

Bの銅貨と錆びた水道管から青銅の盾を製造したのも十分驚いたけど、鋼の大剣まで作ってくるとは私の常識の範疇を超えていた。

確かに、鋼の大剣を作る設備が鍛冶屋にあるとはいえ（王都だから）限度というものがあるでしょう。ここまで運んできた鍛冶屋の若い職人が呆然としていましたよ。「俺ってまだまだ井の中の蛙だったんだなあ」とブツブツ呟きながら帰っていったわ。

ユウキはそれどころじゃないくらい疲労してベッドに倒れたから

知らないでしょうけどね。

それに、鋼の大剣を普通に買おうとすれば二千Gは下らないわよ。
どうやってそれを一個五S以下の屑鉄から製造できるの？

ユウキに尋ねると「俺はもっとすごい武器を作っていた」と、冗談なのか本当なのか判断に悩むセリフを吐いたわ。

「いゝやゝ、たゝすゝけゝてゝ！」

キツカが叫んでいるけどこればかりはどうしようもないわ。

だって勉強しないキツカが悪いんですから。

知恵を働かすには知識が必要。

知識を蓄えることを怠れば芳しくない結果が待っているわ。

さて、私達は外で飲み物でも飲みながら一服しましょうか。

鬼の居ぬ間に洗たく。

ユウキがキツカに構っている間は存分に休めるわ。

キツカの要望通りユウキは全員分の装備を作ってきた。

キツカは当然のことだけどクロスも重装備に身を固めて満更じやなさそうだったわ。

そう言えばクロスは最近騎士になりたいとか呟いていたわね。

浮浪児だったあの頃はそんなことを言わなかったけど、やはり衣食住が安定すると夢を追いたくなるのかしら。

キツカも前よりまして行動力が上がっていたわね。

前々から底なしのエネルギーの持ち主だったけど、近頃は輪をかけてその傾向が強いわ。

あんなにも快活で生き活きとしたキツカなんてしばらく見てなかった気がするわね。

そして、ユキに魔法の才能があることは素直に驚いた。

ユキは前々からユウキと何をしているのか分からなかったけど、どうやら魔法を教えられていたらしいわね。

後でユウキにそのことを追及するとユウキは「ユキが黙っておいとくれと言っから」とユキが口止めしていたみたい。

あの子にも誰かを驚かせたいと思う所があったようね。

まあ、そんな私も皆を脅かせようと密かにユウキからボウガンの扱い方を学んでいたけど。

けど、その驚きの半分はユキに取られちゃった。

少し悔しいわ。

後でお礼として詐欺師が使う人の騙し方について教えてあげるけど、少々厳しめにレクチャーしようかしら。

ユウキがブチ切れる可能性があるけど、しばらく一緒に暮らしたからある程度怒りの境界線は判断できるわ。

ふふ、こんなところで浮浪児だった経験が役に立つとは思わなかった。

今日も私は一人で魔物を狩る。

始めの内は四人揃ってから魔物を狩っていたけど、段々とそれがじれったくなつたので各自がバラバラに行動しようと提案したのよ。

ユウキは「それは危険だと」難色を示していたけど、私から言わせればスラムより百倍安全だわ。

武器もあるしポジションも持っているからそうそう大事にならないわよ。

スラムで培った危険を察知する能力を舐めないでちょうだい。

そういった説得の結果、渋々ながらもユウキは単独行動を認めて

くれるようになったわ。

私は街の外にある森に身を隠し、気配を絶つてあるポイントに魔物が来るまで待ち続ける。

そして、魔物がそのポイントに入った瞬間に矢を放つ。

ユウキの作ったボウガンの糸は鋼糸を使用しているので、通常のより何倍も強い。

至近距離ならばベアー程度の頭蓋骨を貫通する程よ。

全く、本当に危険な代物を作ってくるわね。

急所を貫かれて絶命した魔物を確認した私は愛用のボウガンをつんと叩いた。

「あら？」

私は肉が焦げる匂いが漂ってきたのを感じた。

「どうやらユキもやっているようね」

ユキも積極的に狩りを行っているわ。

順番でいうとキツカ>私>ユキ>クロス>ユウキね。

ユウキはポーション作りがあるから仕方ないにしても、クロスはもうちょっと頑張れないかしら。

あれだけの重装備に身を固めているならばちよつとやそつとのとで死なないから思いつきり戦っても問題ないはずなのに。

私はクロスの臆病さは騎士としてやっていけるのか憂いた。

「つとと、今はそれよりもユキね」

ユキは魔法使いなので、私達より打たれ弱い。

万が一があつたら困るので私は様子を見に行くことにしましょう。

誤解の無いように言っておくとポーションのための材料は日替わりローションで個人個人が集めてユウキに渡しているわ。

さすがに材料集めを行わないほど私達は恩知らずでないと自覚しているわよ。

どうやら私も三人に感化されたようね。

ユウキがいない時に私達が集まると、決まって話すのが将来についてだったわ。

どうも私は隠密行動を好む傾向があるから、将来はレンジャーとして活躍したいわ。

キツカは冒険家、ユキは魔法使いでクロスは騎士。

ちよつと前の自分達が今の私達を見たら絶対驚くわね。

そして、キツカは魔物狩りをこの近辺だけでなく、隣街の周辺にまで足を伸ばしたいみたい。

けど、そこまで行っても私達は浮浪児だから通行証がない。

通行証があれば一度自分が行った街だと一瞬で行ける装置が使えるのだけど、市民しか貰えない。

ユウキがいてくれれば問題ないのだけど、生憎とユウキはポーシヨン作りで忙しい。そしてユウキ抜きで外で一泊できる程私達は自惚れていないわ。

そして、魔物狩り以上に私達は独学の限界を感じ始めていたわ。

もちろんユウキが教えてくれるのだけど、ユウキは体一つしかなく、食い扶持を稼ぐために私達に構ってあげる時間がない。

私達が満足するまで教えてくれる場所は学校にしかなかった。

私が行きたいのは弓など隠密行動を主とするレンジャー育成学校。

ここはレンジャーの登竜門と呼ばれるほど徹底的に教える学校。

ここを出れば私の夢へまた一つ近づく。

けれど問題が一つ。

学校に通えるのは一部を除いて市民以上の称号を持つ者のみ。

残念ながら私達は市民じゃないので学校に通えないわ。

もしかしたらユウキなら何とかしてくれる。

一瞬その思考が頭によぎったけどすぐに打ち消したわ。

おそらく皆もユウキに頼むという選択肢についてはあったのかもしれないけど、誰も言い出さないでしょうね。

何せユウキには非常にお世話になっているわ。

私達四人を養うために毎日ポジションを作り、暇を持て余した私達に武器や防具、そして戦い方まで教えてくれる。

そして最も凄いのが、それらのことに関してユウキは全く文句を言わずに平然としていることよ。

私ならユウキの様な対応は無理だと断言できるわ。

「まさかこれは」

「そう、アイラの想像通り、俺達の家だ」

……もしかして私はとんでもない人物に出会ったのかもしれない。

ユウキは買った屋敷の前で得意げにしているけど、普通の常識で考えて十二歳の子供が家を持つことなんてあり得ないのよ。

今更ながらにあの時の選択について考えると寒気がするわね。

もし、あの時パンの持ち主に興味を持たなかったら。

金貨を貰って引き下がっていれば少なくとも私は今この場になかった。

全く、匂いすら感じさせずに通り過ぎ去る。

本当にチャンスというものは分からないものね。

あら？ まだ何かあるのかしら。

ユウキが小箱を持ってこちらへ向かってきます。

そしてそれを目の前で開け、入っていた物は。

「そう、これが市民証明書だ」

もう説明は不可能ね。

私が。いえ、私達があんなにも望んでいた物が目の前に出てきたのだから。

本当にユウキは何者なの？

今なら私はユウキが神様だといっても「ああ、やっぱり」と納得

するでしょうね。

そんなユウキは気を良くして屋敷へと向かう。

と、ここでアクシデントが起こったわ。

普段は物静かなクロスが大声でユウキを引き留めたのよ。

ユウキがつんめのとって扱ける様は失礼だけど笑ってしまったわ。

「ふむ、それは本当か？」

普段とは全然違うユウキの気迫に私は生きた心地がなかったわ。

ユウキ、あんな目もできたのね。

まあ、あれだけの力量を持っていればたかが浮浪児ぐらい黙らせるのも訳ないわね。

およそ二十分の間ずっと黙っていたけど、私の人生の中でこれほどの威圧を経験したことはなかったわ。

たった一言、「学校に行かない」と言えば良かったのかもしれないけど、それは言えなかった。

目の前のユウキから発する『恐怖』よりも『願望』の方が強かったのよ。

それは皆同じ。

だからこそ、誰も言葉を発さなかったのよ。

「Be ambitious 大志を抱け」

ユウキが呟きました。よく聞き取れませんでした。ユウキは一つの決心をしたようです。私達は息を殺して次の言葉を待ったわ。

「良いだろう」

その瞬間、周りの空気がふっと軽くなったわ。

クロスも「では」と言葉を紡いでいたから、それは錯覚じゃない。

「自分が望むままにやってこい」

ユウキはそう紡いだ後、ふっと微笑みました。

その笑みは遠い記憶の中の顔も知らない両親を彷彿させるような慈愛の表情。

「」「」「あ、ありがとうございます」「」「」

いつの間にか私達は自然と、心から頭を下げていたわ。

よく師匠に弟子が頭を下げる場合があるけど、その時の弟子の心境がようやく理解できたかもしれないわね。

敵わないのよ。

自分のためにこれほど多大な労力と時間を割いてくれる存在がありがたすぎて何も言えない。

だから私はこのままユウキ、いえ、ユウキ様がいなくなるまで頭を下げようと考えていたけど隣のキツカが震えだし、そして突然奇声を上げてユウキ様に突撃し出したわ。

よく見るとユキやクロスも駆け出している。

これは遅れるわけにはいかないわ。

ユウキ様ごめんなさい。

最後のわがままです。

感謝の気持ちを表現させて下さい。

「必ず（ユウキ様のご期待に）応えます」

その後の私達は学園の筆記試験のためにユウキ様自らが字の読み書きについて教えてくれました。

これ以上ユウキ様のお手を煩わせたくないという想いは全員が共通していたようで、あのユキでさえ真面目に勉強していたわ。

その甲斐あってか私達全員が試験に合格。来ティルス入学式に参加できるようになったわね。

しかし、最難関と呼ばれた王立魔法養成学校にユキが合格できるとは予想できなかったわ。

噂によるとユキが唯一の市民だとか。

いつの間にか私達の仲間に入ってきたことといい、ユウキ様を見つけてきたことといい本当にユキは何者かしら。

「もう準備はできたか？」

ユウキ様が私の荷造りについて心配してお声を掛けてくれました。

私達が通う学校は全寮制で寄宿舎暮らしです。

そのため昨日は全員で下着や制服の素材やらを買いに出かけ、ユウキ様が徹夜で全て仕上げてくれました。

「はい、もう少しです」

私は努めて平静に答えます。

本当はユキのことを考えて全然進んでいないことは口が裂けても言えません。

ああ、そうだ。約束を忘れていたわ。

「申し訳ありませんがユウキ様、少々時間を頂けませんか？」

「そう言ってもそろそろ馬車が来るぞ」

「はい、承知しております。しかし、これから先しばらくキツカ達と会えなくなりますから最後に言葉を交わしたいのです」

「ああ、そういうことか。それなら仕方ないな」

ユウキ様は一つ頷いてこの場を去っていきます。ありがとうございます。
います、ユウキ様。

大急ぎで荷造りを終えた私は集合場所へ向かったわ。

その場所は屋敷の裏側にポツンと生えた木。

「急いで急いでアイラー」

「……遅い」

「転ばないよう気を付けて」

どうやら私が最後のよう、本当に恥ずかしい。

さてと、気を取り直して私は木の前で円陣を組みました。

これから先はしばらく会えない。

だからこそ、最後に皆の心を合わせるために円陣を組もうという提案をしたわ。

ここが第二の人生。

ユウキ様の目となり手となり、そして足となって動くための生活が始まる。

キツカやユキ、そしてクロスの様子を確認すると皆固い意志を瞳に宿していた。

うん、満足。

私だけじゃないみたい。

全員でユウキ様を守り抜く決意が満ち溢れている。

まず始めにキツカから。

「私達は」

「「「「一心同体」」」」

次にユキ。

「……最後まで」

「「「「信じぬく」」」」

クロス。

「後悔は」

「「「「ありえない」「」「」

最後に私です。

「この命を誰に捧げる」

「「「「ユウキのために」「」「」

番外編 アイラの視点（後書き）

稚拙な駄文を最後までお読み頂きありがとうございました。

普段の生活（前書き）

大幅変更しました。

普段の生活

14歳になった俺は以前と比べて大分力が付いた様に思える。

身長も伸びたしやれることも増えた。

だが、俺の心は未だにあの時から動こうとしない。

ベッドに寝ていた俺は何となくステータスウィンドウを開いてみる。

名前、装備、スキルなどが並んでいる枠の中に一つだけ空白が存在していた。

「やはりログアウトできないか」

その項目は夢から覚めるための必須場所。

それが無いということは、覚めない夢と同じこと。

覚めない夢＝現実と置き換えることはできると考える。

つまり俺はこの世界は仮想空間でなく、現実ではないのかと疑い始めていた。

いくらゲームが好きな俺とはいえ1年以上ゲームの世界に浸ることなど出来やしない。

精神はともかく体がもたないのだ。

だが、今のところ俺の体に変調はない。

つまり体は元気そのものだということになる。

「この世界は妙に現実感があるんだよな」

ゲームの世界ではありえなかった空腹や病気などの異変。

現実ではありえないステータスウィンドウの出現。

「……胡蝶の夢」

俺は何ともなしに呟く。

胡蝶の夢とは中国の荘子の偉人が思想であり、ここが現実か否かを論ずることよりも蝶なら蝶で、皇帝なら皇帝でその場を精いっぱい生きれば良いということを説いていた。

次に俺は自分のステータスを確認する

名前： ユウキ「カザクラ

装備： 武器 ミスリルダガー

防具 風のマント

頭 ミスリルヘルム

足 軽業師の靴

装飾品 厚手の手袋

お金 54600G

ステータス

剣 35

魔法	20
採取	25
料理	5
鍛冶	45
調合	56
裁縫	43

アイラ達と別れてからもう2年が過ぎ、昔と比べて相当スキルが上がった。

特に鍛冶や調合等はもうそれで食べていけるレベルだ。

「あいつらの学費を稼ぐために相当頑張ったからなあ」

俺は過去を振り返る。

4人が学園に向かった最初の一年は特に忙しかった。

入学金やら学費の支払いやらでお金がどんどん飛んでいく。

必要な金を稼ぎ出すために俺はポーションのほかに武器や防具を作って売っていた。

始めは正体を隠すつもりだったがもうそんなことを言っていられない状況じゃない。

これまで封じていた露天商まで行って金を稼ぎ出さなければならなかった。

幸いにも露天商を行っていた期間で闇の者が絡んでくることは無

くてホッとする。

半年ぐらい続けると俺の作った物は出来が良いと評判が出来て、次第には俺の家まで押しかけて来る冒険者が現れる始末。

商売も軌道に乗ってとりあえずは金の心配はなくなったのが1年前。

今はわざわざ売りに行かなくとも待っていれば客が来る状態だ。

だから俺はボーっとしていて良い

していて良い……はずなんだけど。

「いつまで寝ているのですかこの怠け者が」

罵声とともに俺は文字通りベッドから叩き起こされた。

「さっさと起きなさい。今日の分の仕事は山のようにあるのですよ」

「エルファさん、一応俺は主だよ？」

俺が涙目で抗議するがエルファさんは素知らぬ顔をしてさっさとベッドメイキングに取り掛かっていた。

俺を罵倒するのは最近雇ったメイドさんのエルファ「ララフルだ。

年は17歳前後。きめ細かい白磁の肌と鮮やかな緑色が映えた腰まである長い髪と瞳が印象的な少女。例えるならフランス人形、ただそこに佇んでいても絵になる美しさを秘めていた。

しかし、エルファさんは謎が多すぎる。

名前： エルファ＝ラフル

装備： 武器 アサシンダガー

防具 メイド服

頭 カチューシャ

足 ニーソックス

装飾品 薄手の手袋

ステータス

小剣 85

隠密 69

料理 75

裁縫 56

音楽 65

鑑定 75

「……一体何だこれは？」

顔合わせした際にエルファさんのステータスを見せてもらった感想がこれ。

どれもこれも高レベルだが、いかんせん方向性が色々とおかしい。

隠密ってなんだ？ どうしてそんな特殊スキルがここまでのレベルになっている？

小剣と隠密がここまで高くなるのに思い当たる職種が一つあるが、それはあまり考えたくない。

何故ならそれはアサシ――

「主、さっさとして下さい」

エルファの催促に俺をぎくりとしながらも頷く。

まあ、人の過去など詮索しても仕方ないからここは聞かないで
おくのが正しいか。

ティータさんが推薦したんだ。警戒しても仕方ない。

そのステータスから想像できる通り、食事も掃除も文句の付け
ようはないが、主を主とも思わない言動が玉に傷の、扱い難い困った
人だった。

本人いわく、ちゃんと主らしく振舞えばこちらも誠意ある対応を
取るらしいが、エルファが納得する主の振舞い方とは一体何だろう。

前に聞いてみると。

「人に聞く時点で主失格です」

……一言で切って落とされた。

言っておくが俺にM属性はない、貶されて喜ぶという特殊な性癖
は持っていないぞ。

どうしてエルファさんがここにいるのか。それは2年前に遡る。

俺は4人を見送った後、屋敷が広すぎてとても1人では管理出来ないと悟った俺は誰かを雇うことにした。

そのことをポツリとティータさんに漏らすと「じゃあ良い人を知っているわよ」と人を紹介された。

ティータさんの紹介なら何かと大丈夫だろうと判断した俺はろくに面接もせずに採用した。

しかし、それが運の尽き。

ご存じの通りエルファさんは俺に対して人間扱いしてくれません。

ティータさんは「愛情表現よ」と笑っていましたが、どこの世界に愛情をサドな言動で表現する輩がいますか。

「なにボサツとしているんですか、朝飯が冷めるからさっさと起きてください」

はい、分かりました。すぐに下へ向かいますから毛布でバサバサしないで下さい。

俺は高速で着替えた後、逃げるように下の食堂へ向かった。

食堂には人20人が座れるほど巨大な長テーブルが置かれている。で、入口から見て最も遠い上座の位置に俺の朝食が用意されていた。

パンに牛乳、季節のサラダやベーコンエッグで、デザート付きなど、普通の水準から見れば豪華な部類に入る料理が並んでいた。

俺はまだ湯気を立てているパンを齧ってみる。

パンは出来立てらしく口に含んだ瞬間にほっこりとした。

「うん、美味しい」

食堂は清潔が行き届いており、敷いてあるテーブルクロスも皺一つなかった。

綺麗なことは綺麗だが、アイロンもない時代にどうやって皺を伸ばしているのか。

「失礼します」

その方法について頭を悩ませているとエルファさんが手にある物を抱えて食堂に入ってきた。

「何を聞きますか」

エルファさんはバイオリンを肩に乗せて俺にリクエストしてくる。

「そうだなあ、少し明るい感じで」

「了解しました」

俺の意向を聞いたのか、エルファさんが知っている中で楽しめの

ポップな旋律がバイオリンから響いてくる。

その演奏はとてもアマチュアとは思えないほどレベルが高い。

「しかし、まあ」

俺は演奏に集中しているエルファさんを眺めながら考える。

確かに言動は最悪だが、それを補って余りある程の長所を彼女は有している。

俺がエルファさんをここに置いている理由もそれだ。

料理も美味しく、掃除も行き届いてかつ演奏を楽しめるのであれば多少の言動ぐらいは我慢してやろう。

「次は悲しめの曲で」

そろそろ終わりそうだったので俺は新たなリクエストをエルファさんに注文した。

「師匠、おはようございます」

朝食も食べ終わり、紅茶を飲んでいるとその声と共に食堂に入ってくる人影。

親のお下がりなのか頑丈なつなぎ服に身を纏っている。しかし、それによって美しさが失われることはない容貌を持っているのは。

「ああ、サラか。おはよう」

俺がそう微笑みかけるとサラは恐縮したのかペコリと頭を下げた。

俺より頭一つ分高い身長と大人びた物腰ゆえに見た目20歳実年齢14歳という年齢詐欺を犯しているサラ。キュリアス。親が職人で、幼い頃からの手伝いをしているせいか作業しやすいようにレンガ色のくすんだ髪を肩口で揃えており、体も同年代の女子と比べるとやや筋肉質だった。

「師匠、今日は武器を作るんですね」

目をキラキラさせて尋ねてくるサラに俺は苦笑して肯定する。

サラは俺のことを師匠と呼ぶ。

サラ曰く、鍛冶屋である親の所に、武器の修理に訪れた冒険者がその武器を絶賛していたので、冒険者に頼んで試しにそれを奮ってみると雷にしびれた様な衝撃を受けたそうだ。

あれほどきめ細かい出来栄えなのに実践重視で作られている。形式美と機能美を兼ね備えたあの武器を作ったのは一体誰なのかを知りたくて探った結果、俺の家に辿り着いたらしい。

「師匠、見学しますから」

サラは俺と同レベルの鍛冶職人になりたいそうだ。しかしまた、女性で職人とは厳しい道を選んだものかと感嘆する。

鍛冶職人の中の暗黙のルールとして子供はともかく鍛冶場に女を入れないというのがある。よく分からないがそういう決まりがあるから、彼女が鍛冶職人として生きていくのは厳しいだろうと俺は考えている。

が、ドエスのエルファ曰く、常識無視の塊である主の弟子が職人達から村八分にされるわけがない、例え敵に回したとしても、あんなの腕前なら例え前人未到の場所でも武器を求めて買いに来る客が後を絶たないとえらく捻くれた褒め言葉を頂いた。

俺から言わせるとエルファさんの方が常識無視なんだけど。

小剣レベル85って一体何？

閑話休題

実際問題として職人達から嫌われたとしても、サラが後悔せずに生きていけるんだったらそれで良い。

そう結論づけて俺はこれ以上考えるのを止めた。

「師匠、何の武器を作るのですか？」

離れの竈に向かって共に歩いているとサラがウキウキした様子で聞いてくる。

「鋼の剣に風属性である『風の石』を付加させてカマイタチを飛ばせる『風の剣』を作ろうと思う」

一般的に武器は鍛冶屋によって性能が若干異なるが、それでも俺の域までには及ばないだろう。鍛冶レベルが低かった頃にも同じ材料で重さや切れ味が数段上なのをいくつも作っていたが、鍛冶レベルが20を超えると俺は本格的に独自路線を歩み始めた。

簡潔に言つと武器に属性を付与。

常に高熱を発する槍や帯電している斧などを作つて売っていた

俺の武器は既存の概念をひっくり返すほどの衝撃を与えたらしく、鍛冶職人の間では俺のことを鍛冶職人の始祖であるメテルギウスの生まれ変わりと持て囃された。

まあ、呼び方なんてどうでもいいので、俺のことをなんて呼ぶかは自由に任せている。

とにかく、俺は武器に属性を組み込める唯一の鍛冶職人として評判を得ていた。

そう、俺は武器に属性を付与させるといふ困難な技術を習得している。

経験がある今でこそ簡単に出来るが、ログアウトが可能なプレイヤーの時は難しかった。

属性付与は豪快な腕力と繊細な技術の2つが必須である。

その相反するものを両立させるにはどれだけ困難か。

繰り返される失敗に心が折れかけたことは一度や二度でない。

さらに付与させる属性を増やすとさらに難易度が上がる。

『火』『水』『風』『雷』『土』『闇』『光』7種類全ての属性付与ができたときは冗談抜きで死んでもいいと思った。

鍛冶に関しては俺と肩を並べるプレイヤーはいなかった。

つまりすごいわけ。

だから、そう。

「師匠、1つの属性付与なんて言わずにもう2、3個属性を付け加えましょう。私は『風』と『雷』を付け加えた『風雷の剣』を作れますから」

出会ってから一年にも満たないのにここまで出来るのは天才を通り越して異常だぞ。

サラ曰く、師匠のやり口を真似ているだけですからすぐに覚えられたのであって、もし独学なら1つの属性付与さえ無理ですよ。と言っているが鍛冶は見えて出来るものでなく、経験が重要なことから、やはりサラは天性の何かを持っている。

だってステータスが。

名前： サラⅡキュリアス

装備：

武器 なし

防具 丈夫なツナギ

頭 なし

足 火モグラのブーツ

装飾品 力の指輪

ステータス

鍛冶 105

そのステータスを見たとき俺は目を疑ったよ。

ハンマーすら握ったこともないサラが鍛冶レベル3桁。

しかもそれ以外は全く使えない。

難しい剣の製造方法は一発で理解できる癖に、本を読むとなると
どれだけ優しくとも3行で眠ってしまう。

エルファさんとは別の意味で驚いた。

「それもいいが生憎と材料がない。だから今日はこれで我慢してほしい」

「えー、何で材料が無いんですか？」

「キツ力達の試験が近いからな素材を取りに行く余裕がないんだ」

最初の1年はともかく、2年目に入るとキツ力達も学校に慣れてきたのか4人は冒険に出かけて魔物を倒し、その際のドロップアイ

テムを俺に届けるようになってきた。

俺としては素材が格安で手に入り、キツ力達は小遣い稼ぎそして学費返済と双方ともに利益があるので結構長い間続いている。

「一応キツ力達の名誉のために言っておくが、この風の石は市場に出回らない非売品だぞ」

一般に流通しているのを市販品なら、闇市や冒険者から直接買わないと手に入らない素材が非売品である。

で、属性付与させるための素材の大半が非売品だからキツ力達の存在がどれだけありがたいか。

いやいや、本当にキツ力達を拾って良かったと思う。

「はい、わかりました」

俺の言っていることが通じたのか、しぶしぶながらも引き下がってくれるサラ。

もっと強くなりたいという向上心は称賛に値するが、感情をストレートに出すことをもう少し抑えてくれないものだろうか。

まあ、そのところは壁にぶつかれば改善するかと思っている。やはり人間には挫折というのが必要だということかな。

そして俺は頭を切り替えて原材料の鉄鉱石と風の石を手元に並べる。

どのように配分すれば出来上がりの剣に風を付与できるのか、俺はゲーム内での記憶にある精製法を引っ張り上げた。

「うん。よし、これでいくか」

頭の中で一通りまとまった俺はハンマーを持つ。

「サラも近くで見ておけよ。こういうのは基礎だから反復させても損はない」

サラが頷き、真剣に見ているのを気配で感じた俺は灼熱に溶けた鉄鉱石を打った。

カーンっ！　　っと、小気味の良い音が辺りに響いた。

武器の生成は一日に一本。

今回は単純に一属性だけ付与するので二時間あれば完成するが、もし全ての属性を付与するとなれば今日だけでは間に合わない。少なくとも明日までかかる。

サラの体力上まだうっちは厳しいだろう、となればそこがサラにとっては壁になるかな。

俺はそんなことを考えながら、完成したばかりの『風の剣』を振ってみる。

軽く振ったつもりだったのだが、発生したカマイタチは一般の魔術師が放つウィンドと同威力だった。

「ほら、振ってみる」

サラが試し切りしたそうだったので渡す。

「さすが師匠、私が作ったのと比べても段違いに強いし軽いです」
するとサラは大喜びでカマイタチをあちこちに放った。

サラの実家は鍛冶屋のためたまに俺から材料を貰って作ることがある。完成品を俺に見せてくれるのだが、いかんせんまだ俺の領域にまで達していないとみる。

「まだまだサラには負けないつもりだ」

サラが放つかマイタチを避けながら俺はそう言い放つ。

「さすが師匠です。これだから越えがいがあります」

剣を俺に返しながらサラは喜色と闘志を混ぜ合わせた感情を瞳に浮かべてニツコリと笑った。

「完成しましたか、そろそろ昼食ができますのでそれまでに汗を落としてください」

レディーファースト。だからまず始めにサラを水場へ行かせる。

サラは「師匠より先に入るなんてとんでもない」とよく分からない所で恐縮していたが、俺が入るよう命令すると従ってくれた。

俺に対する敬意を持っているのは構わないけど、その使う場面が間違っているのではないかと考える。師匠の言葉に嫌な顔を浮かべて「えー」は無いだらう。

そんなことを考えているとサラが上がったらしく、次に俺が入る。

屋敷の一角に備え付けてある水道は特別製で、常にお湯が出るよう改造されている。この発明はエルファも嬉しかったらしく「たまには良いことしますね」と呟いてくれたのが印象に残っていた。

「サラ、先程の工程は覚えているか？ 昼食を食べた後はサラが同じのを作るんだぞ」

「はい、バッチリです。師匠の作品を超えた逸品を作り上げてみせます！」

その意気込みは素晴らしいが、空回りしないようにな。何せ後始末は俺がしなくちゃなんないから。

エルファさんが昼食を用意している間に俺は午後の予定を確認する。

「エルファさん、ティータさんから頼まれごとか何か無かった？」

「そろそろポジションが切れそうですので納品してほしいとか」

パスタとスープを乗せた盆を運びながらそう受け答えるエルファさん。

「うん、分かった。サラの鍛冶が終わり次第ポジション作成に取り

掛かるから準備をよろしく」

「畏まりました」

エルファさんはそう述べた後、定位置に座ってバイオリンを響かせ始めた。

慈善事業

「そろそろかな」

「その通りかと」

来客室に備え付けられている椅子に腰かけていた俺の呟きに控えていたエルファさんが答える。

サラはいない。

と、いうのも昨日に「明日は修行なしだから実家で自己練習しろ」と言い含めていたから来るはずがないだろう。

「主、お客様です」

「本当に、よく分かるな」

エルファさんは気配を感じ取れる性質らしく、呼び鈴が鳴らなくとも来客が訪れることを察知できた。

「さてと、お迎えいたします」

エルファさんは音もなく歩いて玄関に向かった。

派手な装飾が好かない俺は屋敷のそれを必要最低限に抑えている。

簡潔に言つなら揃えるのがめんどくさかつただけ。

だから生活必需品以外の家具はろくに買い足さなかった。

が、エルファさんはそれが嫌だったようだ。

お金がない時は自制していたみたいたが、余裕が出てきても装飾品に金をかけなかった俺に業を煮やしたのかエルファさんは俺の許可なしに絵画や美術品を購入した。

その際に一悶着あつたのだが、ティータさんがエルファの擁護に回ったため俺が悪いということになった。

「ボクは他人の目というのをもう少し気にした方がいいわよ。ここに来る人の相手をしているエルファの心情をくみ取りなさい」

と、逆に説教されてしまった。

で、そこから反省した俺はとりあえず来客室くらいは見られるようにしようと頑張った。

そして、頑張った結果が。

「こんにちは、素晴らしい部屋ですね。金で出来た彫刻にプラチナの甲冑。まるで王宮にいるみたいです」

来客室に訪れる人が異口同音にそんなことを漏らすようになってしまった。

「やりすぎです。掃除する身にもなってください」

そんな陰口を叩かれた覚えがある。

「お褒めいただき光栄ですヒュエテルさん」

目の前の人物はヒュエテル「クーラー」。

俺が設立し、援助している孤児院の園長で、保母さんという表現がピッタリくる人だった。

年は40を超えているので小太りだがそれが愛嬌として出ている。全てを優しく包んでくれそうな雰囲気を持つ人物だった。いつもニコニコと微笑んでいるのは母性からくるものなのだろう。そして、この笑顔こそがささくれた孤児を癒してくれていた。

「ユウキ様のご尽力によって多くの孤児が悪の道に走らずに済みました。このことは感謝に堪えません」

そう言ってヒュエテルさんは頭を下げる。

金に余裕が出てきた俺はあのスラム街を何とかしようと思案していた。

キツカ達が何かをやらかしたので、俺は靴や服を作ってはスラム街に届けていたのだがスラムの環境が酷いこと酷いこと。

暴力や無関心が横行し、路上で人が死に、悪臭が漂っていることが日常の光景としてそこにあった。

そして、何よりも一番衝撃を受けたのは俺やキツカと同年代の子

が盗みや暴行を働いているのを目撃したことだ。

「仕方ないわよ、ああしなければ生きられないんだから」

キツ力が慰めてくれたが、平和な日本で暮らしていた俺には衝撃が大きすぎる。

この現状を何とかしたい。

と、言っても後数年で滅びる都市なので腰を落着けてやることはできない。

さんざん悩んだ末に出た答えが未来ある子供たちだけでも救おうということだった。

だから俺は小規模ながらスラム街を何とかしようとたまに炊き出しを行っているヒュエテルさんと接触し、彼女に孤児院の管理を任せた。

「いえいえ、僕のやっていることはお金を渡すことだけですから、実際に活動しているヒュエテルさんには敵いません。むしろ私が頭を下げるくらいです」

始めはヒュエテルさん1人とおんぼろ建築一戸なので、10人も世話できなかったが、次第にヒュエテルさんの心情に共感してくれる人が現れ始め、さらに孤児達のリーダー格の人が協力してくれたので、今では4ケタに迫る孤児達を保護できている。

そのことが可能になったのはヒュエテルさんが孤児を救うために奮闘し、職員の増加や建物の増築など孤児院に関する責任を一手に

引き受けてくれていたからなので、俺としては頭が上がらない。

目の前のヒュエテルさんは笑顔だが、その裏に壮絶な戦いがあったのだと想像すると本当に申し訳なくなる。

「ご謙遜を、資金がなければ何も始まりませんでした」

そう言って貰えるのはありがたいが、俺は資金を渡したただけなので大した活動はしていない。

「いえいえ、私でなくとも他の人が援助したかもしれません」

「ユウキ様ほど多額の、そして安定して援助してくださる方は他にいませんよ」

属性付与させた武器と言うのは相当高値で売れる。何せそれを製造できるのはこの世界でも数えられるほどで、さらに俺以上の品質を作る職人がいないからその値段を具体的に言つと風の剣一振りあれば大人10人が1年遊んで暮らせるほどだ。

その金を資金として流していたから、普通の孤児院よりも数段立派なモノができるのは道理。

下手すれば貧乏な市民よりも豪華な生活を孤児達は送っていた。

「ヒュエテル様、そろそろ本題に入りませんか」

ちょうど良いタイミングで紅茶と菓子を運んできたエルファさんが次を促す。

傍目から見るとエルファさんの態度は無礼かもしれないが、これがエルファさんなのでお互い何も言わない。

そして、ヒュエテルさんは居住まいを正すと徐に切り出した。

「ユウキ様のご尽力によってスラム街に巢食う孤児はほぼ一掃されました。孤児達も施設での生活に戸惑っていましたが、現在は落ち着いています」

「それは良かった。スラム街の治安も良くなったんじゃないかな」

俺の問いにヒュエテルさんは頷く。彼女曰く、まだ暴力は残っているものの１年前と比べると大分ましになってきたそうだ。

「で、私としては次の段階に進めたいと思います」

「次の段階？」

俺が聞き返すとヒュエテルさんはゴクリと唾を飲み込み、意を決して話し始めた。

「スラム街の大改造を行いたいと思います。具体的に申しますと給金を彼らに払い、彼ら自身の手でスラム街を解体させるのです」

「……なるほどねえ」

ヒュエテルさんの提案に俺は考え込む。

スラム街に集う連中が全員悪の道に走るわけではない。中にはやむに已まれず故郷を捨ててそこに落ちぶれた人間もいる。

そして、彼らを更生させるに一番手っ取り早い方法は職を持たせること。

もちろんそう上手くいくとは限らないが、それでもあそこで腐らせるよりかはずっと建設的だろう。

が、ここで問題が出てくる。

それはこの都市があと3年ほどで滅びるということ。

つまりそんな大規模政策を行ったとしても効果が出る前に終わってしまう可能性が十分にある。

もしそうなると金をどぶに捨てるのみならず、何よりもヒュエテルさんの願いを踏み躪る結果になりかねない。

「……僕的には孤児院に常勤教師を招き、孤児達全員に高等教育を施したいのですが」

そこから離れられない住居と違って人なら移動できる。彼らがどこに行っても生きていられるよう訓練するのなら俺は金を出すと提案するが。

「しかし、私はスラムを何とかしたいのです」

「おそらく3年後には全てが消えますよ」

「万が一そうなるかもしれませんが」

「……信じてほしいのですが」

実はこれまで何度も近いうちに国が滅びると訴えているのだが、誰も彼もが信じてくれなく、挙句の果てには胡散臭い人間が寄ってきて寄付を迫ってくる始末。

「なら、こうはとうですか？ その大規模工事は3年後に行うと、それまでの期間は区画整理や住民の説得などを行うというのは」

「それなら納得です」

信じてもらえないのであれば妥協案を提示しよう。

どうせヒュエテルさんの構想は一朝一夕で出来るものではない。行うにしてもここまで大規模になると国の許可が必要だろう。そして何よりも大金が必要なのでこの提案には頷いてくれた。

「では、積立金として毎月これくらいはどうでしょうか」

「そうだなあ……」

ヒュエテルさんが予め試算してあった金額を見て俺達はこのことで少々議論し合った。

「さて、ではそれまでの間、僕としては孤児達に高等教育を施すために教師を招きたいのですが、伝手はありますか」

「ボランティアの内数人が私塾の講師を行っています。あの人達に

声をかければ了承してくれるかもしれません」

「それは良かった、早速お願いします。で、給金の方は一般学校の教師より1割増しだということを打診して下さい」

「分かりました。しかし、給金1割増しという公表はまだ控えます」

「どういうことですか？」

俺が聞き返すとヒュエテルさんは少し笑って。

「そのことを示すと単にお金に惹かれた輩が集まりかねません。それはなるべく排除したいので、まずはその事実を伏せておきます」

ヒュエテルさんは孤児院の経営も兼ねていたので金勘定の力量が大いについていた。おかげで巷では『金庫番』という2つ名までつけられている。

俺としてはそこまで徹底的にやってもらうつもりはなかったのだが、ヒュエテルさんは貰うだけでは申し訳ないと言っている。

まあ、払う分が減るに越したことはないけど。

その後、孤児院の現状や備品の過不足など細かい協議を終えたヒュエテルさんは席を立ち、俺は玄関まで見送る。

ヒュエテルさんが来訪したのはまだ日が高いうちだったのだが、いつの間に完全に帳が下りている。

「実りの良い会合ができました。私達にここまで目をかけてくださり本当にありがとうございます」

と、礼を残して屋敷から立ち去っていった。

「変わっていますね」

2人きりになるとエルファさんはそんなことを切り出し始める。

「普通孤児なんて見捨ておかれる存在ですよ。ですから国も知らぬ振りをするにも関わらず主は彼らを救おうとするのですね」

エルファさんの問いに俺は背伸びをしながら頷く。

「これは俺の心によるものだな。俺のいた国では見捨てられる命なんてなかった。だからこの現状を見ると何とかしたくなるんだよ」

理屈ではない。

ただの感情であり、自己満足だということは己が一番身に染みて分かっている。

「しかし、今のところは問題がありませんので目を瞑ることにします。ただし、やりすぎには注意して下さい。いくら手を差し伸べたいとしてもそれで主が潰れるようでは本末転倒です」

「ああ、そこは分かっているよ」

「本気で危なそうでしたら私が無理やりにも止めさせますから」

エルファさんなりの忠告なのだろう。俺はそれに大きく頷いた。

「さて、そろそろ夕餉ですので主は少々お待ちください」

エルファさんは1つ完璧な礼をして屋敷の厨房へと歩を進めていった。

浅はかな考え

「さて、次はどうしようか」

夕食を食べながらそんなことを呟く。

「師匠、決まっているでしょう！ 私にみっちりと教えることですよ！」

「……本当に元気だな、サラ」

俺はげんなりした眼でサラを見つめるが、サラは俺の感情などどこ吹く風でフフンとばかりに胸を張る。

「当たり前です。何故なら始めて5つの属性を付与させた武器の製造を目の当たりにしたのです。これが興奮せずにいられますか！」

そう、俺はつい先程まで7属性の内光と闇を除いた5属性を付与させた武器を製造していた。

簡単に見えるが実際は言語で語り尽せないほど難しい。

何せ火と水、雷と土と言ったように属性の相性というものがあるために各属性を相殺させないよう絶妙なバランス感覚が必要になる。

で、どうしてそんな俺は作ったのかというと、そろそろサラに壁というものを経験させるためだった。

最近サラは天狗になってきたのか遠慮もせずに多くの属性を付与

させた武器を作ってほしいと催促し、それがあまりにしつこいと感じた俺は不可能な課題を出してやった。

サラの力量ではせいぜい3つの属性を付与させるレベル。

おそらく成功しないだろう。

が、不安というものもある。

何せサラは天才だ、凡人たる俺の思惑など易々と裏切ってしまう展開が頭から離れない。

「……まあ、それでもいいか」

俺を追い抜く風景が一瞬頭をよぎったが、俺はそれを認めることにする。

その時は7つの属性全部付与させた武器でも作らせれば問題はないだろう。

閑話休題

「で、とりあえず今日は飯食ったら寝る。今日は親に連絡しているだろうから問題ない」

早朝から製造を始め、完成したのがつい1時間ほど前。その間は気を抜くことが許されず、つきつきりで打っていたため、身体も精神も疲労がヤバイ。今すぐにでも倒れたい気分だ。

「むー、師匠。つれないですねえ。ちょっとぐらい先程の鍛冶につ

いて教えて下さいよ」

「頬をふくらませて剥れて俺を萌え殺させるつもりか？」

「師匠？ 何を言っているんですか？」

「……忘れてくれ」

どうも疲労によって思考能力が変になっている、俺は何て戯言を口走ってしまったのだろう。

「明日だ、明日サラに同じものを作ってもらうから今日はよく寝ておけ」

「しかし、私は興奮で眠気など起きないのですが」

「そうなのか？」

「はい、今にでもそこら辺を笑いながら走りたい衝動に駆られています」

どうやらサラは疲労が一線を越えるとテンションがハイになるらしい、新たな発見に俺は何となく頷く。

が、そんなことをしている場合ではないので俺は課題を出すことにする。

「それなら宿題だ。今、エルファがベットを整えているからそれが終わり次第そこで5分近くじっとしていること」

「嫌ですよ、私は眠る気分じゃないんです」

サラがそう言ってごねるので俺は新たな言葉を紡いだ。

「5分間ベッドで横になっていれば今すぐ5つの属性を付与させた武器を作っても良いぞ」

「分かりました、約束は守って下さいね！」

サラはそれを聞くやいなや2階の寝室へすっ飛んで行った。

——20分後

「御馳走様」

「御粗末様です」

エルファさん曰く、サラはベッドに入ってしまったら目はギンギンに冴えていたようだが、突然スイッチが入ったかの様に眠りに入ったようだ。

あまりに予想通な展開に俺は苦笑するしかない。

「さて、俺も寝させてもらうぞ、戸締りは任せる」

欠伸を一つした俺は食堂を出ていった。

鍛冶場には俺とサラの2人しかいないが、その場は和気藹藹とした雰囲気ではなく悲壮感に充ち溢れていた。

「サラ。もう分かっただろ、今のお前には無理だ」

もう何回言っただろう、数えることすら億劫になる程繰り返した台詞を紡ぐのだが。

「もう一度だけ、もう一度だけチャンスをお願いします」

サラは付与に失敗し、跡形もなくなった剣を握りしめながら涙ながらに訴えた。

始めは驕り気味のサラに灸を据えるつもりで今回の提案を出したのだが、ハッキリ言って今は後悔している。

てつきり俺はあまりの難しさに諦めて素直に俺の教えを請うと予想していたのだが、まさかサラは困難にぶち当たるとボロボロになるまで挑戦するタイプだとは知らなかった。

「師匠命令だ、明日にでもやれ」

俺は溜息を吐くとサラにそう中止を命令する。

無論サラは抵抗したのだが、すでにハンマーすら握れないほど手がボロボロになっていることを指摘すると不承不承ながらも頷く。

「また明日やりますから」

去り際にその言葉を残していったのが印象的だった。

2、3の属性を付与させるにはともかく、4つ以上になると相反する属性を同居させるために一般の鍛冶屋には置いていない特殊かつ巨大な設備が必要なので俺の鍛冶場は一辺10mという広さを持っていた。

そこにポツンと一人残された俺は先程までサラが打っていた失敗作を拾い上げる。

それは付与された属性同士が反発して無残な形となった剣だが、前のと比べると僅かにだが出来が良い。この調子だといずれかは成功するだろうと思われる出来だった、が。

「その前にサラが壊れそうだな」

悲しいかな、今のサラは才能に肉体が追い付いていない。

この調子だとサラに致命的な何かが起こってしまうことは十分に予想できた。

一応俺はサラの師匠なので、弟子であるサラの面倒を見なければならぬ。

で、サラがこのままだと不幸な結果が待ち受けているのならやることは一つだ。

「俺はサラにしばらくここに来るなど言わなければならない」

突然の禁止にサラは混乱するだろうし、もしかすると勝手に鍛冶

場へと侵入するかもしれない。

「言い訳かもしれないが鍛冶自体を禁止するわけじゃないぞ」

サラの身が危険なのはあくまで4つ以上属性を付与させることで2、3の属性付与させた武器の生成を禁止しているわけではない。

そして、4つ以上は俺の鍛冶場のような設備が無いと無理であり、この設備が置いてあるのは王宮公認の鍛冶屋が研究施設のみだろう。

「まあ、何を囁ろうともこれは俺の浅はかな行為が招いた結果に変わりはないけどな」

全ては俺が5つの属性を付与させた武器をサラに作らせたことにある。

身を切り刻まれる悔恨に顔を歪めながら俺は自嘲した。

「今日で4日目ですね」

エルファさんの言葉に椅子に座っている俺はゆっくりと頷く。

俺はサラに療養を言い渡そうと表情を硬くして待ち構えていたのだが、サラはあの日以来一向に姿を見せていなかった。

自宅へ帰って頭を冷やし、今の自分では完成できないと自覚して体を休めているのなら好ましいが、おそらくそうではない。

あのサラの性格上自らの意志でここに来ることを止めることはありえない。

十中八九サラの容体を重く見た両親が止めたのだろう。

「迎えに行くのですか」

エルファさんの問いに俺は応える。

サラは未熟だが、いずれは世界最高の鍛冶師になる可能性を持つ逸材。

休養させるならまだしも、二度と鍛冶に触れさせないとされたら俺は悔やんでも悔やみきれない。

「馬車を用意してくれ」

俺の要望にエルファさんは「畏まりました」と礼をしてこの場を去っていった。

逢引き？（前書き）

サラの話は次で終わりです。

やれやれ、本来なら1話で終わらせる予定だったのに……

逢引き？

世界最高峰の鍛冶職人という名は伊達でない。

高名な冒険者も大富豪も俺の武器を求めに来るため俺はあまり外へ出られないし、所用があつて外出するにしてもこの馬車のように外から中の様子が伺えない様カーテンで外部と遮断されていた。

「まあ、有名税といったところか」

俺はフフンと鼻で笑うことにする。

と、いつか笑うしかない。一体何が悲しくて屋敷の外から出られない実質軟禁生活を送らなければならぬのか自問してしまつたため、ここは優越感に浸っておくことにしている。

「が、今はそんなことを考えている場合でない」

ダークサイドに陥るのは後でいい、今はもっと大事なことがある。

灯りがランプしかない中で俺は帽子やマフラーなどで顔を隠して準備をした。

エルファさん曰く、サラの実家は中堅どころの鍛冶屋らしくそれほど人気があるわけではないにしろ、それでも客はいるので変装しておいた方が良くとアドバイスをされたから。

正直な話、この程度で騙せるかなと不安だったのだがエルファさんは。

「経験上、人なんて顔さえ隠せば大概何とかなるようなものです」

と、非常に説得力がある言葉を紡がれたため俺は観念して従った。

変装を終えた俺は腕を組んでこれから起こることを予想してみる。

サラからの情報によると、自分は一人娘で他に子供はいないことからサラの両親はサラを目に入れても痛くないくらい溺愛しているだろう。

そして俺はその愛娘に無理をさせてしまった。

サラの両親の怒りは相当なものだろうと予測できる。

「今日はサラ本人に会うことは出来そうにないな」

アポもなしに突然訪れたのだから当然として、多大な親の怒りをぶつけられることは覚悟しておかねばならない。

「まあ、それは俺の所業に対する罰として受け止めればいいか」

重要なことは如何にこちらの誠意を相手に分からせるかだ。

確かに今回俺はサラを傷つけたが、それはサラの才能が大きすぎたから。嫉妬の感情も交じっていたと正直に述べよう。その上でサラの素直さを褒め称えれば両親も理解してくれるだろう。

「よし、これでいい」

俺が頷くと同時に振動が大きくなったのは、石畳が敷き詰められている地区に変わったからだろう。

「ご到着しました」

その言葉と同時に業者は恭しく扉を開ける。

その通りはティータさんが薬屋を営んでいる地区と比べるとやや活気が劣るものの、その場所に漂う空気は実戦向きというか緊張感が溢れている。

そこを歩きかう人を眺めても、油断ない雰囲気を漂わせていることから熟練の冒険者達だということが分かった。

古びた石畳を通り抜け、少し奥まった場所にある年季の入った店の前で俺は立ち止まる。

『キュリアス鍛冶屋』

ここが俺を師匠と呼ぶサラハキュリアスの実家とみて間違いなかった。

「さて、入るとするか」

俺は己に発破をかけ、唾を飲み込んでから中へ入った。

入って2歩も歩かないうちにカウンターがあり、武器が壁に所狭しと並べられている。

少々狭いのではないかと感じたが奥から鉄を打っている音が響いてくることから売り場と鍛冶場、そして住居区がこの場所に詰め込まれているのだろうと考えると納得できた。

「あら、いらっしやい旅人さん。今日はどのような依頼で」

そう店内を見回しているうちに奥から40代半ばの物腰の良い年配の女性が出てきた。

よく見ると目の辺りとかサラの面影が見えるのでサラの母親ではないのかと推測する。

「あら、どうしましたか？ 何か私の顔についていますか」

頬を撫でながらそう聞いてきたので俺は首を振った。

俺は気付かなかったが、長い間彼女を見つめていたのだろう。そこは反省せねば。

と、まあそこら辺は置いて俺は本題を切り出す。

「サラの師匠、ユウキ」カザクラが参ったと伝えてください」

俺がそう述べると、サラの母親はビシリと硬直した。

「……」

これ以上言葉を重ねても意味がないだろうと判断し、俺は口を噤んで相手の判断を待つ。

1分、2分とお互い沈黙を保ったまま時間が過ぎる。

「主人を呼んできます」

サラの母親は辛うじてそう告げるとそそくさとその場を後にした。

で、残された俺は扉にもたれかかって相手が出てくるまで待つことにした。

この間は非常に長く感じられる。緊張してのどが渇き、気持ちが悪く落ち着かないので視線をあちこちに彷徨わせて気分を紛らわせる。一瞬外に出ようかと頭に過ったが、ここでそんなことをしてしまうと二度と来れないという確信があった。

そんな風に自問していると、奥からの音が止んで誰かがこちらに向かってくる足音が聞こえてきた。

「ここからが本番か」

俺は唇を舌で湿らせながらそう呟いた。

世の中には不条理というものが存在する。

こちらがいくら友好を訴えようと、手を取り合っていこうと手を差し出しても相手がその聞く耳を持たなければ意味がないとい

うことだ。

俺は今、その不条理を心の底から味わっている、何せ。

「……問答無用で外に放り出されるとは思わなかったな」

俺は服についた土ぼこりを払いながら毒づく。

あの時、サラの父親が現れたので俺はサラが如何に素晴らしいか、今後このようなことは起きないよう宣誓しようかと口を開いたのだが、言葉が出る前に俺は胸を掴まれて外へと投げられた。

まさかサラの父親がいきなりそんな強硬手段を取ってくるとは思いもしなかったので俺はさしたる抵抗もできず、なすがままに任せしかなかった。

で、俺としてはこのまま終わるわけにはいかなかったので、もう一度中へ入ろうとしたのだが扉は固く閉ざされている。

なるほど、つまり俺と話すつもりは全くないということか。

「せめてサラとお話しさせてください」

俺は扉をガンガンと叩きながら訴えるが返事は全くない。

仕方ない、根比べと行くか。

俺が叩くのをやめるか向こうが俺を招き入れるのが先かと考えたのだ、が。

「おい、ドアを叩いている少年はもしかするとユウキ」カザクラじゃないか？」

いつの間にか仮面が取れていたらしい。俺は慌てて装着するがすでに後の祭り。

このままだと取り囲まれて身動きが取れなくなると判断した俺は止めてあった馬車に乗ってこの場を後にする。

「……仕方ない、最終手段といくか」

乾いた唇を舌でペロリと舐めて俺はそのことの算段を始めた。

夜——この世界には電気というものがないため、必然的に明かりはランプなど油を使ったものになる。油は貴重なため、わざわざ街灯にするのは宿場街などよほど人の出入りが多いところだけ。

こんな一角など存在しているはずがないだろう。

明かりは外から漏れてくる光と月と星の光のみなので夜中遅くなると安全のため家に泊まらせた理由もこの暗さなら納得のいくものだ。

こんな場所で襲われたらおそらく完全犯罪が成立してしまうだろう。

「今はこの暗さがありがたいな」

で、俺はといえばその闇夜に紛れてサラのいるであろう2階の部屋のベランダによじ登っている。

フェザーブーツを使って己の体重が軽くなったとはいえ、この代物は空を飛べるわけではないので俺はフック付きロープを併用していたわけだ。

「これで見つかったら言い訳できないな」

俺の今やっていることはどう見ても犯罪、弁明など期待できないだろう。

「さて、エルファさんからの情報によると今がサラは一人の時間帯だな」

一体どこで調べたのか、エルファさんはキュリアス家の部屋配置はおろか全員のスケジュールまで割り出していた。

「これぐらい造作ありません」

素でそんなことを言っただけのエルファさんにドン引きした俺を責められるものはないだろう。

閑話休題

俺は一つ咳払いすると窓をコンコンとノックする。

「誰ですか？」

しばらくするとやや緊張気味ながらも返事してくれた。

今は少し張りが無いが、その声はサラだろう。サラの両親でなくてホッとする。

「サラ、俺だ」

近所迷惑にならない程度でそう囁くと、突然カーテンを引かれ、窓を開けられた。

「師匠？ どうしたんですかこんな時間に！？」

サラは突然現れた俺に混乱しているのだろう、目を丸くしている。

「シーっ！ それを含めて説明する。だから中に入れてくれ」

俺の要望にサラは頷き、俺を中へ招き入れた。

「ありがとう、おかげで助かった」

サラの部屋に潜り込んだ俺はサラに一礼。もしあそこで叫ばれでもすれば俺は決死の逃避行を演ずる羽目になっていた。

で、サラの部屋を見渡した印象が。

「……独特の部屋だな」

俺は苦笑いするしかない。

俺の偏見かもしれないが、普通女の子の部屋というものは人形や服など可愛い物が置いてあるものだと考えている。

しかし、サラの部屋は。

「どうですか？ このブラックアックス！ これは師匠ほどではありませんが、有名なギルロティィイエスマンが闇属性を付与させた逸品です。さらにこのアイスランスは……」

部屋の壁一面に飾られているのは武器。

それもほとんどが属性付きという高価な物ばかりだ。

サラの両親の身なりや店の規模からあまり繁盛しているとは考え難いので一体これらの武器を買うお金はどこから出てきたのだろう。

「ああ、これは私が生成した武器と交換したんですよ。私はこの都市でナンバー2を自負していますから。あ、もちろん一位は師匠ですよ？」

どうやらサラは商品として販売できるほどの技術を身に付けていたらしい。俺は誇らしい反面寂しい気持ちになる。

「で、師匠は何故来たのですか？」

そんなことを考えているとサラはそんな質問をしてきたので俺は咳払いを一つして口を開く。

「今日の昼ごろに尋ねたのだがそれは知らないか」

その答えに首を傾げる様子からサラの両親は俺が来たことを伝えていないようだ。まあ、俺が来たことなんて知っても両親にとって

は面倒が増えるだけだから正しい選択かもな。

「まあいい。俺が来た理由は簡単だ、サラの様子が知りたくてな。あの日から来なくなって心配したぞ」

「アハハ、ありがとうございます」

俺の言葉にサラは唇を綻ばせるもすぐに俯く。どうやら両親との間で何かあったようだ。

「サラ、どうした？ 元気がないぞ」

俺はさらに少し近づいて聞くと、サラはキッと眼を上げて俺を見上げた。

「師匠、私を連れて行ってください」

「は？」

思わず間抜けな声を出してしまった俺を責められる者はいないだろう。が、サラは続けて。

「両親は私に二度と鍛冶に関わらせようとしません。そこらの娘としての人生を歩んでほしいみたいです」

「まあ、両親からすればそれが一番だろうな。誰が子供に好き好んで苦難の道を歩ませるものか」

俺に弟子入りするといい、これら高名な鍛冶師の武器と交換できる腕前といい、サラの行動力と才能は常軌を逸している。

「鍛冶に関わる以上サラはまともな人生など歩めまい。下手すれば想像を絶する不幸が待っているだろうな」

「勝手に決めないでほしいです！ 誰が何と言おうと、地獄が待っているように私はこの道を選びます」

サラは脊髄反射の様に俺に跳びかかって胸ぐらを掴む。

「サラ、詰め寄る相手が違うだろう。俺に食ってかかってても仕方がない」

「ああ、そうでした。ごめんなさい、興奮しまして」

タハハと笑って俺から身を離すサラ。

先程までサラの瞳がすぐそこにあっただので動揺を見せないようポーカーフェイスを保つのに苦労した。

「とりあえず俺は3日後にまた来るからそれまでに答えを決めておけ」

「何ですか？ すぐに行きましょうよ」

そう言って急かすサラを見て俺はため息が漏れる。

「サラ、今のお前は混乱している。突然親から鍛冶を取り上げられ、そして俺が現れたから冷静な判断を下せない状態だ。そんな状態で俺についてきてもサラが苦しむだけだぞ」

俺は窓に手を掛けて外に出る準備を整え、最後にこう言い残した。

「最後にだが俺もサラの両親もお前のことを気遣っている。だからサラが鍛冶を捨てても俺は引きとめたりはしない」

まあ、口ではそう言いつつも本心では3年後の魔物大進行が起くる前にサラを助け出して鍛冶に関わらせるつもりだが。

俺は個人の幸せのためなら才能を腐らせてもいいと唱える善人ではないぞ。

父親の偉大さ（前書き）

これを書きたいがために前の2話を書いたといっても過言じゃないですね。

ふう、ようやく次へ進めることができる……

父親の偉大さ

「……激しい雨だな」

夜――

自分の部屋でランプに明かりを付け、眠気がくるまで安楽椅子で揺られていた俺はふと外を眺める。

窓には大粒の雨が打ちつけ、外の景色は自宅の庭の全貌さえ見渡せないほどの土砂降りだった。

「おお、雷だ」

突然一本の閃光が走り、次の瞬間には山が崩れ落ちた様な雷鳴が鳴り響く。

くわばらくわばら、念じていると俺の口からあくびが漏れた。

ようやく眠気が来たようだ。

俺は蠟燭の明かりを消してベッドに潜り込む。

「結局サラは断ったな」

先日の夜――俺はサラの答えを聞きに行った時のことだ。

「すみません、師匠」

俺が窓から入るなり額に頭を擦りつけて詫びるサラ。

「まあ、サラが選んだ道なら仕方ない」

だから俺は肩を竦め、努めて何でもない風に演じる。

本心としてはかなり落胆していたが、それを表に出したところで誰も得をしまい。そう、サラに罵声を浴びせて弾劾しても、期待外れだと切り捨てても双方共に苦しくなるだけだ。

「確認するが、サラは鍛冶を捨てて一人の娘として生きると」

俺の問いにサラは頭を上げてコクリと頷く。

「両親を捨てるなんていう選択などできません」

よく考えてみればサラはまだ14歳、親が恋しい年ごろだろう。

あの時は激情に任せて家出すると宣言したが時が経つにつれて心細くなっていたと想像する。

「師匠、何て言葉を申し上げれば良いか……」

「気にすることはない。俺は前にも言ったとおりサラの将来を案じている。だからサラがそう決めたのであれば俺からは何もなし」

「しかし……」

俺の受けた教えを全て無駄にするという罪悪感からか弱々しい声。

「そんなに苦しいなら3年後にサラを招待するから受けて欲しい。それで償いになる」

サラが鍛冶を捨てようが捨てまいがどっちみちサラを救う予定だ。

そこでサラがハンマーを手取るかは分からないが見殺しだけはしない。

「何せ俺の近くにいた人間だからな」

心が弱くても頼りなくても俺と触れ合ったのは何かの縁。

救いの手だけは差し伸べるつもりだ。

「それじゃあサラ。また3年後に」

「はい……」

やれやれ、最後ぐらいはもっとシャキツとして欲しいものだ。

サラと最後の別れのことを考えながらうとうとしていると、突然ドアがノックされる。

「主、起きていますか？」

「エルファか、入れ」

「失礼いたします」

ガチャリと開けられて三つ又の蠟燭台を持ったエルファが慇懃に入ってきた。

ティータさんに「メイドにさん付けはおかしいわよ」と注意されたから、今はエルファのことを呼び捨てにしている。

フランス人形の様な整った顔立ちと鮮やかな緑色の髪が蠟燭に照らされてよく映える。外見はこれ以上ないというくらいメイドなのだが、いかんせん俺を主として見ていない節があるのが玉に瑕だった。

「で、どうした？」

俺は促すと、エルファは書類を読み上げるかのように淡々と語り出す。

「先ほど、玄関からドアを叩く音が聞こえたので外を確認すると、サラが玄関先で蹲っていました」

「サラが？ どうして」

俺は眠気も吹き飛ぶような大声を上げたが、エルファは動じずに先を紡ぐ。

「詳しいことは本人に聞いてみないと分かりませんが、長時間雨に打たれていたせいか酷く憔悴しています。この状態では話すのを酷だと判断しましたので、濡れた服を着替えさせて温かい飲み物を飲

ませ、客間で寝かせました」

「そうか、御苦労」

サラがどうしてこんな夜中に来たのか、すぐにも理由を知りたいが本人が話せる状態でないのなら無理させることはない。

「明日の予定は全てキャンセルすることにする。そして明日はサラの分の朝食も用意してくれ」

「はい、畏まりました。しかし、明日の予定といいましても実質予定なしなのでから格好付ける必要はないかと存じます」

そんなことを言う必要は無いだろう。

俺の無言の抗議が伝わったのかそれともいないのか。エルファの表情から判断することは出来なかった。

翌朝、サラの様子を気遣いながら俺はパンをかじる。

俺の向かいにいるサラは以前と打って変わって塞ぎ込む様子は痛々しい。

「サラ、食べないとスープが冷えるぞ」

俺は何とか会話しようとサラに話題を振るのだが、サラはずっと俯いていた。

一体どうすれば良い？

俺は無言で後ろにいるエルファに助けを求めるが、エルファはピクリとも動こうとしない。

……本当に薄情だなエルファは。主が困っているんだから助けてよ。

エルファはあてにならないので、俺はどうしたもんかと首をひねる。

「まあ、言いたくないのなら言わなくても良い」

出てきた答えが無難な言葉だった……まあ、俺は誑しじゃないからそれでいいと思い込もう。

「部屋もあるし食事も心配するな。好きなだけ滞在してもいいから、気が向いたら話してくれ」

「……」

本当に、何か反応ぐらいしてくれよ。この空気は居た堪れないのだぞ。

俺は頭をバリバリと掻き毟る。ああ、どうして俺はこんな朴念仁なんだ。これならもっと女性と付き合って経験を磨いておくんだっ

「主、それは方向性が違います」

え？ 心の中を読まれた？

俺は驚愕の面持ちで振り返るのだが、相も変わらずエルファはそこに佇んでいた。

こうしている間にもこの気まずい雰囲気はどんどん進行していく。

仕方ない、あれを試すか。

俺はコホンと咳払いして立ち上がり、サラの隣にまで移動する。

「……………」

サラは放心状態なので、俺が隣に来てても何も反応しなかった。

本当に、やって良いのか？

俺は最後の確認という意味でエルファに視線を送ると、エルファは微かに顎を縦に振った。

ええい、後は野となれ山となれだ。失敗しても知らん！

俺はサラの手を掴んで引っ張った。

突然手を引っ張られたサラはバランスを崩し、俺の方向へと吸い寄せられる。

「はっ、え？」

サラは俺より身長が高いが、今は椅子に座っている。だからサラ

の頭がちょうど俺の胸あたりに来た。

「ちょ、ちょっと待ってください師匠！？ 何をやっているんですか？」

サラがバタバタと暴れるが、俺はサラを離さない。

体はサラと同じ14歳だが、普段から武器作りで鍛えられた体はこの程度の抵抗でビクともしないぞ。

「大丈夫、大丈夫だから……」

俺はそう囁きながらサラの背中を優しく撫でる。そうするとサラは初めのうちは暴れていたものの、徐々に大人しくなっていた。

「ふむ、少々ありきたり感があり、さらに行動も遅かったですが及第点と言ったところでしょうか」

それら一連の行動をそう論評するエルファ。

……お前、本当に俺のメイドか？

この時ばかりはエルファに殺意を覚えた俺がいた。

俺はエルファを食堂から叩き出そうとした。が、エルファは俺が全力で押しても岩のようにビクとも動かない。それでも俺は諦めずに押し続けているとサラが「もう良いです」という形で仲裁に入って現在に至る。

「家を追い出されました」

サラはそう口火を切って昨日のことを話し始めた。

昨日の夕食時にサラが両親にもう師匠の家に行かない、鍛冶も辞めると宣言したそうだ。

サラはこれで終わりだと思った。これで今までギスギスした雰囲気が消えて元の暖かい空気が戻ってくると考えていたが実際は違った。特にサラの父親から発するのが剣呑になっていたのだ。

「父は本当にそれで良いのかと聞きました。だから私は頷いたのですが、父は嘘を付くなど怒鳴り、私を外へ放り出しました。そして私が呆然としている間にドアをピシヤリと閉められたのを覚えています」

「ごめんなさい、そこから先の記憶が曖昧です。私は家の扉を叩いていたはずなのですが、気が付いたら師匠の家で寝かされています」。

そう言つてタハハと笑うサラ。無理にでも笑おうとしているのか顔がぎこちない。

「……」

俺はすべてを聞いてサラの父親が何をしたいのか考える。

俺が直接向かった時にはサラと話もさせなかったもので、サラの父親はサラに二度と鍛冶をさせないつもりだろうと考えていた。

が、実際にサラが鍛冶を止めて家にいると宣言するとサラを勘当した。

「うーん……」

サラの父親は職人というものを体現した人物だ。

己の信念を貫き、決して外部の圧力に屈しない気質を持っている。

あの時もそうだ。

職人の間で女を入れることがご法度なのは周知の事実。

俺も当初のころにサラを弟子入りさせ、それを妬んだ俺の弟子入り志願者が職人組合に密告して相当叩かれた。おかげで一時は俺の武器を持っている奴はこの街の鍛冶屋は相手にしないとここに来る商人や冒険者に通知され、「ユウキ」カザクラの作った武器は欠陥品」と誹謗中傷の連続だった。

彼らも鍛えればそれなりの鍛冶職人になるのだが、サラと比較するとどうしても霞んでしまう。

例えるなら人工の山と天然の山ぐらい違う。

どれだけ土を盛り、木を植えて景觀を良くしようとも所詮は作られた物——天然の山のみが持つ雄大さには何一つ敵わない。

だからこそ俺は始めて訪れたサラのみを重点的に鍛え上げていた。

サラを育てていたから村八分による精神的な攻撃は辛くなかったものの、金銭面で苦汁を味わったのを覚えている。

本当に、ティータさんがいてくれて良かった……

幸いにも俺が属性を付加させた武器を生成できることが広まり、職人組合よりも俺の武器を選ぶ者が増えたのでそういった弾効運動は潜んだはずだが。

「サラの父親はあの時でもビクともしなかったのだが」

危害はもちろんサラの自宅にも向かっていた。そこでも俺と負けず劣らずの非難を浴びたのだがサラの父親はサラがここに来ることを禁止しなかった。

「この無神経が」

どうしてエルファに毒づかれなければならないのか、全然わからないん。

しかし、突然の出来事に戸惑っているのは俺も同じ。これは一度親父さんと話す必要がある。

よし、行くか。

俺は自分に気合を入れると勢いよく立ち上がった。

「サラ、俺はちょっと用があるから席を外す。何か困ったことがあればエルファに申し付けてくれ」

「え、ちょっと、どこに行く気ですか」

俺の突然の行動にサラは動揺した。ここでどこに行くのか話すのは得策でないと判断した俺は嘘をつく。

「日課の散歩だよ。だから心配なくていい」

サラが次の言葉を述べる前に俺は背を向けて食堂を後にした。

「こちらでございます」

俺が来ることを予想していたのだろう。突然現れた俺にサラの母親は多少目を見開きながらも前回のようない硬直はなかった。

前に来たときは店先で終わってしまったため、奥まで入ることはなかったが今回は違う、俺はサラの母親に案内されて小さい居間に案内される。

そこは年季が入っており、多少汚れているが、日ごろの掃除のたまものなのか見かけほど酷くは無さそうだ。

「主人はもうそろそろ来ると思います」

サラの母親は身長こそ俺と同じだが、横が俺の二倍ほどある。かといっても、それは不快に感じることはなく、逆に包み込む暖かさを内包しているように見えるのでむしろ安らぎさえ感じた。

「ありがとうございます、おばさん」

ふつくらした顔立ちの、笑顔が似合いそうなのだが昨晚の件が影響しているのだろう。多少やつれて見えた。

「……」

俺はサラの母親が淹れてくれた水を口に含みながら静かに時を待つ。

すでに賽は投げられた、オロオロしていても仕方ない。

二、三口ほどコップを傾けると、親父さんが奥からノツソリと姿を現した。

例えるなら岩。体は鋼のように鍛えられ、服の上からでも筋肉が盛り上がっているのを確認できる。そして、その瞳はギラギラと輝いており、生半可な覚悟ではその瞳の前にたちまち吹き飛ばされてしまうだろう。

「こんにちは、おじさん」

俺は背筋を畏まらせてまず始めに挨拶した。

「サラの師匠を務めているユウキ」カザクラです。よろしく願います」

「キュリアス鍛冶屋のジド」キュリアスじゃ。ユウキ殿の活躍は耳に届いている」

本人は何気なく言っただけだが聞いているこちらとしては体の奥

にまで響く重低音の響きがある。さすが長い間この店を守ってきただけのことはある。貫禄が滲み出ていた。

「サラについて伺いました。事情を聞いてもよろしいでしょうか」

「話す必要はない」

つつけんどんに突っ張られる。その言葉に俺はどう反応していいか困っていると、さらにジドさんが言葉を重ねる。

「あいつとはもう親子の縁を切った。もう赤の他人じゃ。ユウキ殿が煮ようが焼こうがわしには関係あるまい」

どうやらそれで話は終わりのようだ。ジドさんは立ち上がろうとしたので俺は慌てる。

「ちょっと待って下さい。サラは、サラは突然のことで混乱してしました。せめてサラに何か言葉を掛けてあげてください」

「サラという娘は知らん。だからワシには関係のない話じゃ」

どうやらこれで話は終わりらしい。ジドさんは立ち上がって背を向けた。

「お前ほど自分勝手な人間は見たことがない!!」

俺は敬意をかなぐり捨てて腹の奥から叫んだ。ジドさんの足がピタリと止まる。

「サラを鍛冶から引き離すかと思えば勘当して家を追い出す！ 何

をしたいんだ、あんたは！ サラを苦しませただけなのか！」

「そんなことあるわけなからうが！！」

大地が揺れたと思うぐらいの一喝。俺はすぐにも逃げ出したい衝動に駆られたが、ありったけの力を込めてジドさんを見返す。

「わしはな！ サラが赤子の時から知っておる！ サラが生まれてから今までの間！ サラのことを考えんかった日など！ 一日もあるまい！」

こちらを見下ろしながら放つ一言一言が魂を抉り取るような衝撃を持っている。怖い、止めたい。そんな弱気な感情が胸の奥から出てきてしまう。

「じゃあどうしてサラを苦しめる！ サラがどれだけ憔悴しているのかわかっているのか！」

「黙れ若造！ 青二才が知ったような口をきくな！」

人間は本当の恐怖を感じるとその場に凍り付くことを思い知った。ジドさんから発する冷たい怒りに俺は身動きすら出来ない。

「サラは貴様のことを話すたび目をキラキラさせよる！ いつかは貴様のような武器を作りたいと訴えておる！ そのために己の体を壊しても良いというぐらいにな！ 娘が傷付いていく様子を眺めていたわし等の気持ち貴様に理解できるか！」

ジドさんの魂の叫びに俺は狼狽えてしまう。サラの態度に辟易していた俺が悪意ある課題を出してしまったのは事実。そしてそのた

めにサラは己の身を省みずに鍛冶に打ち込んでしまった。

もし俺があんなことなどせず粘り強く接していれば今回のような事態にならなかっただろう。つまり事の発端は俺にあるわけだ。

「……これだけは言える」

だからこそ、俺は筋を通す。

殴られようが罵られようが言わなければならないことがある。

「俺とあんたはサラに対する対応を間違えた！ もう少しサラのことを考えていればこんな事態にならなかった。そして、間違いはやり直せる！俺とあんたとサラの3人で話し合えばまたやり直せる！」

俺のミスはサラの欠点を知りながらも無理な課題を出してしまったこと。

ジドさんのミスはサラの性格を知りながら鍛冶から引き離してしまったこと。

この2つの間違いを正せば大丈夫だと俺は考えていた。

「……」

「……」

しばらくの間、俺とジドさんは見つめあったまま動こうとしない。

俺のほうはほぼ空元気だったが、ジドさんはどうなのか分からない。まだ底があるのかもしれないが、それでも俺は最後まで付き合おうと決めていた。

「……やはりユウキ殿は見かけによらず強いな」

ジドさんがそうポツリと洩らして目を瞑った。

「娘のような世間知らずに対しても目くじら立てず、それ以上に娘の身を気遣う。そんなユウキ殿のような方であれば安心して任せられる」

先ほどの剣幕が嘘のように消え、ようやく息が楽に据えるようになる。

「そらならサラに会って下さい。そして、3人で話し合うべきです」

俺はそう提案したが、ジドさんは寂しそうに首を振る。

「会えばわしはサラをここに引き留めてしまう。だが、それだとサラの夢を壊してしまうからそれは無理じゃ」

「そんな、それとこれとは別でしょう。鍛冶職人とジドさん、両立できる道があるかもしれません」

「はっはっは、ユウキ殿よ。今回のサラの態度を見たであろう。サラは弱い子じゃ。弱いがゆえに自分の夢よりもこの老いぼれを選んでしまい、弱いがために鍛冶職人への未練を抱きながら人生を過ごすことは容易に想像できる」

「それは……」

俺が何と言おうか言葉に詰まっているとジドさんは続けて。

「サラにこう伝えてくれ『生まれてきてくれてありがとう』と」

ジドさんは最後にそう言い残し、その場を立ち去った。

「お水をありがとうございます」

俺はしばらくその場で呼吸を整えた後に席を立つ。

もうここに来ることはあるまい。

何となくだが、そんな予感がする。

「待って下さい」

俺はそのまま立ち去ろうとしたが、その背に声が掛けられる。何だろうと思って振り返るとサラの母親が一抱えある荷物を両手に持っていた。

「サラの私物です。身一つで飛び出してきましたから、ユウキさんにさぞかしご迷惑を掛けているでしょう。少しでも軽くなればと思いますして」

その中にはサラの服といくらかのお金が入っていた。金是要らな
いと断りたかったのだが、サラの母親は頑として受け取ろうとしな

い。

こういうところは両親に共通しているんだなあと心の中で苦笑していたが、手荷物の奥の方にある一品を見て俺は目の色を変える。

「おばさん、これは家宝だ。さすがに受け取れない」

俺が突き返したのは一本の古びたハンマー。相当年季が入っているがそのハンマーの材質は史上最高の硬さを誇るオリハルコン。おそらくこれ一本で俺の屋敷が買えるほど高価な代物だ。

「道具は使ってこそ意味があります。主人はこれを使うほどの武器を生成する技術を持ちませんでした。サラならこのハンマーを使ってくれると信じています」

俺は思わず奥の方に目を向けると、ジドさんが背中を見せながら佇んで頷いていた。

「おばさん、サラについては安心してください。必ず後悔させません」

オリハルコンのハンマーを背負った俺はサラの母親の手を握りながら力を込めて訴える。

「本当に、本当にサラのことをよろしくお願いします」

サラの母親は腰を深く折り曲げて俺を見送った。

「おかえりなさいませ、主」

「サラはどこにいる？」

「サラ様は客間です」

自宅へと帰った俺はエルファにサラの居場所を聞いて客間へと向かう。

サラはまだ元気がなかったものの、朝から大分回復したようだ。

「これ、サラの母親から」

俺はまずサラの母親から受け取った荷物を渡す。

「……お母さん、お父さん」

サラはそれを見るとつつすらと涙が滲んできた。

「後、父親からの伝言だ『生まれてきてくれてありがとう』」

俺は居心地が悪くなったので背を向けながらジドさんからの伝言を伝える。

案の定、鼻をすすする音が後ろから聞こえ、さらに嗚咽が漏れてきた。

これ以上この場にいるのは耐え切れない。

俺は早足でその場を後にした。

扉を閉めると同時に部屋から泣き声が聞こえてきたのは言うまでもない。

「やれやれ、今日は疲れた」

俺は歩きながらそう呟く。正直な感想、キツ力達を拾った出来事と並ぶほど忙しかった。

「ん？ エルフア、何か用か？」

途中にエルファが待ち構えるように立っていたので俺はそう声をかける。

「いいえ、何も。ただ、今日の主は主に近づいていましたよ」

「それはありがとう」

俺は艶然と微笑むエルファの横を通り過ぎて自室へと戻っていった。

ジグザールへ（前書き）

超展開かもしれませんがお読み頂けると幸いです。

ジグサールへ

「師匠、武器ができました」

そう言っただけ俺のもとへ走ってくるサラに俺は冷や汗をかきながら。

「転ぶなよ、絶対転ぶなよ。転んだら地震で俺の屋敷が倒壊するからな」

サラが先ほど作ったのは土属性を付与させたハンマーなのだがこの代物、効果が半端なく強い。

正式に俺の屋敷に住みこむことになったサラは少しだけ落ち着き、物事の分別がつくようになった。

「今の私には5つ以上の属性を付与させることはできません」

と己の非力を認め、代わりとして1つか2だけの属性を付与させた武器の精度の底上げを行っていた。

サラの武器はそれこそ町職人のはるか上をいつているが、王宮専属や俺レベルから見るとまだまだひよっこ。

なのでサラは多くの属性を付与させる代わりにまず1つだけ付与させた武器を作っている最中だ。

が、そこまでなら美談なのだがサラは天才。

1年ちよつとで俺と並ぶぐらいに成長してしまった。

サラの将来が恐ろしい。

「主、お客様です」

サラと2人でサラが作った武器を論評していた矢先にエルファが現れてそう告げる。

「ヒュエテルさんか」

俺の問いにエルファは首を動かした。

「これを見てください」

開口一番そう切り出して両手に抱えた大きな袋を置くヒュエテルさん。

俺はその中身が気になったので開けてみたのだが中から出てきた代物に俺は目を丸くした。

袋には金銀宝石が詰まっている。袋の中を総計すると俺の全財産の内約3割に相当するだろう。

「『恩を返します』と銘打たれていますので、おそらくユウキ様が保護をした孤児達の中でその道専門の高等教育を受けた孤児の誰かだと思います。」

確かに俺は4ケタに迫る数の孤児を保護したが、社会に出ている

のはその3割に満たないだろう。だから俺は目の前の金貨が信じられない。市民の給料は月15〜30Gだということを考えると、まっとうな方法で稼いだわけでは絶対ない。

俺の驚きが伝わったのかヒュエテルさんは説明のために口を開くのだが心なしか戸惑っているように見える。

「ええと、言い難いのですが最近貴族の家のみ侵入する義賊が流行っているのはご存知ですか」

俺は首肯する。

今の俺の暮らしぶりは貴族から見ても上の方なので義賊に狙われる一つとして役人から注意するよう忠告されたことがあるからだ。

「ちょっと待て、つまりそれは」

俺の懸念が当たったようだ。ヒュエテルさんは困ったように首を苦笑して。

「ええ、お察しの通りその義賊はユウキ様が保護した孤児達の一部です」

「……最悪だ」

俺は額を抑えて天を仰ぐ。

何をトチ狂っているんだか。

彼らは良かれと思ってやったことかもしれないが、彼らが捕まっ

てその身元がばれてみる。知識と技能を与える環境を作った俺は一気に窮地へと陥ってしまうぞ。

「止めさせられないのか」

俺は一縷の望みをかけて聞くが、案の定ヒュエテルさんは首を振る。

「このお金は私が知らない間に置かれていますから止めることはできません」

これを役人に届けると俺が疑われる。つまりこのGを受け取るしか選択が無いようだ。

「けどなあ、今の俺はGに相当余裕があるからこんなリスクの高いものを受け取りたくないのだが」

俺自身を作った武器に加えてサラの作った武器も取り扱った結果、濡れ手に粟という表現がぴったりくるぐらいのGを稼いでいる。

おそらくこのシマール国の鍛冶職人の中では最もGを持っているかなと本気で考えてしまうほどだ。

ヒュエテルさんは俺の苦悩も分かっているのだが、ヒュエテルさんがこのGを持っていると聖者というイメージが崩れ、下手すれば俺以上の迷惑を被ってしまう。

だからこそヒュエテルさんはこのGを持ってきたのだろっ、自分では処理できないがゆえに。

「それでは私はこれで失礼します。またお金が置いてあればユウキ様にお届けします」

そう言つて去つていくヒュエテルさん。

そして残されるのは俺と大量のGのみ。

「どうしたもんかな……」

腕組みをし、無然とした様子で俺は鼻を鳴らす。

仕方ない。

このGは目立たない様に恵まれない人達へ施すか。

妥当な考えに一つ頷くと俺は袋の口を閉じた。

「私に提案があります」

いつの間に近くへ寄っていたのだろう、気が付くとエルファが俺の隣に立っていた。

「このGと主が貯めたGの何割かを私に任せてもらえませんか」

「別に良いが、理由を聞いても良いか？」

「はい。確か主は工業都市ジグサールに移住を希望していたと考えます」

その通りなので俺は頷く。

「で、つい先程宮廷闘争に敗れてジグサールへ左遷されたツバイク伯爵が逃亡しました」

「ほっ……」

この状況でそんなことを知らせる理由はただ一つ。

知らず俺は唇を歪める。

「なるほどね、それは面白い。ただ、街や都市を治めるのは貴族の特権だ。市民である俺がどうしてそこを治められるのか知りたいな」

そう聞くとエルファはクツクツクツと喉を鳴らし。

「このご時世、Gさえ払えばシマール国は爵位を与えてくれますよ」

と、囁いた。

「この国の腐敗はそこまで進んでいるのか」

Gで名誉を買える。

国の威信をかけて贈る称号をGで手に入れることが出来るのを聞いて俺は複雑な気分になった。

滅びた国のことなのであまり注意を払っていなかったが、シマール国が滅びた原因は魔物大進行だけではなさそうだ。おそらく長年かけて溜まっていた膿が溢れ出し、そして魔物大進行が引き金となったのだろう。

「やはり肝心なのは人か」

あらゆる万物は外側からの攻撃に強くとも内側からの攻撃にはえてして弱い。これが内と外の両方から攻められるといかに頑強な城であつても名将と呼ばれる人物が率いてもなすすべなく陥落するだろう。

「まあ、俺には関係ないか」

考察はここまで。

これ以上考えても意味のないことに気づいて俺は思考を止める。

「どうも話がつますぎるんだが、Gで爵位を買った市民に街の治安を守ることを他の貴族が許すか？」

貴族は保守的で嫉妬深い。突然俺みたいな市民が出ると叩かれそうな予感がしたが、エルファは何の心配もないと首を振る。

「ジグサールは周辺の魔物が強く、交通が不便な国の辺境にある都市です。あそこを治めるのは左遷された貴族ぐらいなものですから、さしたる妨害などなく手に入れますよ」

「あそこはまだ辺境だったのか……」

その事実には俺は呟く。

ゲーム開始のころには有数の都市として名を馳せていた記憶があるのだが、どうもそれはあてにならないらしい。

「まあ、いいか」

辺境で誰の目にも映らないのであれば好都合。それなら周辺の反対も少なく、思う通りの改革が進められる。

「エルファ、できれば早い方がいい」

善は急げ。ここはツバイク伯爵の後任が決まらないうちにさつさとジグサールを手に入れてしまおう。

エルファは「畏まりました」といういつものお辞儀を行ってこの場を後にした。

数日後——国からの要請で俺は男爵の地位を手にいれ、めでたくジグサールの赴任となった。

そして俺は单身ジグサールへと向かう。

サラはカリギュラスに残りたいと言ったのでお目付け役としてエルファを置いてきた。エルファは付いて来たさそうだったが、ヒュエテルさんの対応もあるのでエルファはカリギュラスから離れさせられないと説き伏せている。

まあ、実際の理由は今回の手腕の敏腕さに傍で置いておくのが怖くなったから。何故伯爵の逃亡という情報を察知できたのか何故こんな数日の間に爵位と領地を得られたのか、その理由が知れるまでエルファにあまり近寄られなかった……チキンだと罵ればいいさ。

そして、キツ力達は学校を卒業した後4人でパーティを組んで冒険がてら試金石となる素材を集めてくれるので何も言うこと無し。

で、俺がジグサールへ赴任した際の第一印象が。

「見事に何も無いな」

屋敷に入った俺は帳簿を確認してそんな感想を漏らす。

俺の知っているジグサールは多くの腕の良い職人を抱える鍛冶場が乱立している都市だ。この都市に住む人々の大半は職人で、外部からは良い武器を買い求めようと遠方からやってくる冒険者で溢れかえる活気ある都市だった。

しかし、目の前に広がる光景はそれとは程遠い。

今のジグサールには何軒かの古びた工房と空き家だらけの住宅群しかない。都市に現在唯一開いている中央商店街は店の大半が閉まっている。

この都市の人口の大半はどこから流入してきた身元不明者であり、まともな身分を持つ者の方が少ない。

王都であるカリギユラスの市民と貴族の割合は9割で、このジグサールは3割しかいないことを鑑みるとどれだけ酷いか理解できるだろう。

「金も無ければ人手もいない、拳句の果てには物も無い」

周囲の魔物が強すぎるためにここまで訪れる行商人が少なくなり経済が停滞して人口が流出する。人口が少なくなるとさらに訪れる行商人が減るといふ悪循環に陥っていた。

ツバイク伯爵が失踪した理由も分かる。

これだけ悪条件が揃えば逃げ出したくなるだろう。

事実、俺も始める前に心が折れそうだ。

ここがプレイヤー時代に親しんだ都市でなければ受けようと思わなかった。

「郷土愛って言うのかな」

我知らずそんな呟きが漏れる。

「まあ、泣き言はここまで」

俺は頬をピシヤリと叩いて気持ちを切り替える。

周囲の魔物が強いということはその分手に入る素材も上等な物が多い。

ヒュエテルさんと相談して冒険心溢れた腕っ節の強い孤児をこちらに回してもらおうか。

監督はキツ力達に任す。

そして、彼らに素材を集めさせて加工して売る。

まずはG。

それが無ければ改革など夢のまた夢。

治安や人口問題などやるべきことはたくさんあるが、今はGを溜めることに決めた。

「さてと、やりますか」

俺はそう頷くと筆を手にとってヒュエテルさんに手紙を書き始めた。

魔物大進行まで後2年。

急ぐ必要があるな。

名前： ユウキⅡジグサリアスⅡカザクラ
装備：
武器 アダマスダガー
防具 貴族のマント
頭 シャインヘルム
足 黒龍革の靴
装飾品 サファイアの指輪
お金 324600G
ステータス
剣 35
魔法 20

採取	料理	鍛冶	調合	裁縫	支配
2	5	7	6	4	5
5	5	5	6	3	

貴族になつたのでおれはミドルネームとスキル『支配』を手に入れた。

ジグサールへ（後書き）

読者様からの要望を考慮して主人公を単身ジグサールへと向かわせました。

次話から新キャラが登場しますが、読者様にとって魅力的に映るよう努力します。

番外編 エルファの追憶（前書き）

第3章へ移る前にちょっとした小断を用意しました。

読まなかったことで本編に影響はありませんので無理に読む必要はありません。

番外編 エルファの追憶

殺せない暗殺者は不必要。

確かにその通りだと私——エルファ＝ララフルは首肯します。

暗殺者は人を殺すから存在意義があります。

汚れ仕事を行うために生きています。

では、人を殺せなくなったら。

殺す瞬間に突然ナイフを持つ手が震え、胃の中のものを戻してしまふ錯覚に囚われてしまった暗殺者はどうなるのでしょうか。

答えは簡単。

ただこの舞台から消え去るのみ。

私は私を終わらせるために街の外へ出ようと思いました。

「あら、エルファじゃない？ どうしたの？」

懐かしい声がした方向を振り返るとそこには昔の面影を残した薬売りが立っています。

「……ティータ」

辛うじて私はそれだけを呟きました。

「ふーん、お仕事を首になったのね」

私はティータとすぐに別れようとしたのだが、ティータは私が尋常ならざる雰囲気放っていることに気づき、半ば無理矢理に近くの店へ連れて行かれて今に至ります。

そこで根掘り葉掘り聞かれましたが、肝心な個所はぼかして答えました。知ったことによつてティータが危険に晒していい道理はありません。

「でもまあ、それで死ぬことはないんじゃない？　ほら、人生つて仕事だけが取り柄じゃないし」

一般の職業はそうかもしれませんが、生憎と私の仕事は闇の領域に入る部類です。職業上の秘密を守る必要があるため墓場に行かなければなりません。

「もういいでしょう。これは私の問題です」

そう言つて私は席を立ち上がろうとしますが、ティータは袖を引っ張り離してくれません。

「私の問題は私の問題、エルファの問題も私の問題よ」

真顔でハッキリと言い切るティータを見て私は「ああ、昔と一緒ですね」と苦笑します。

思えば幼少時代もそうでした。

私とティータは記憶がある頃から一緒に、私にその道の才能があると判断される8歳まで一緒にいました。

寡黙だった私にいつも目をかけ、他の友達よりも私と共にいることを望んでくれました。

明るく、面倒見の良いティータが私の傍にすることを鬱陶しいと感じたことも良い思い出です。

閑話休題

「じゃあエルファはお仕事が見つかればいいのね」

しばらくの押し問答の後ティータが疲れた様子でそう聞いてきましたので私は首肯します。

しかし、私はその質問に意味はないと考えています。

どこの世界に重大な秘密を抱えた人物を野放しにする阿呆がいるでしょう。

この都市に留まっていると早くも数日後には私は屍を晒しています。

街を出ようにも私はこの生き方しか知りません。

つまり私は死ぬしかないのです。

「失礼していいですか」

これ以上話す必要はないと判断して私は再度席を立ちます。

今度は袖も引つ張られませんでしたので私は踵を返しました。

「ユウキ〃カザクラって知ってる？」

その質問を聞いた私は足を止めました。

最近現れた正体不明の浮浪児が市民権を手に入れて一角の人物になったので、念のために監視を付けるといふ話を聞いたことがあります。

私が振り向くとティータはしめたとばかりにニコーツと笑って。

「興味を持った？ あの子ってただの浮浪児には過ぎたる技能を持っているから不安なのよね。そういえばエルファって昔から強かったからあの子のボディーガード兼メイドになってみない？」

特段私は生きることに関心がないわけではなく、死ぬしかないから死のうと考えていたのです。

生きることができるのなら私は垂れ下がった蜘蛛の糸も掴みましよう。

後日

ユウキ〃カザクラのメイドとして侵入に成功できたことで、私は死から免れることができました。数日に一度報告書を書かされます

がそれは仕方のないことでしょう。

さて、メイド服に袖を通すのは初めてですが中々着心地がよろしいですね。下手すれば前に着ていた黒装束よりも動きやすいかもしれません。

「これはあの子が作った代物なんだけどね」

そう言つてティータは苦笑しますが私には笑えません。これだけの逸品を作るユウキは何者なのでしょう。このメイド服は王宮の備品と嘯かれても大多数の人が信じる出来栄です。

ティータに付き添われ、私は扉の前に立ちます。

呼び鈴を押されて中の主がこちらへ向かい、そして扉を開けました。

「ああ。ティータさんが、こんにちは。で、隣の女性は誰かな？」

私はティータにせつつかれたので一歩前に進み出て頭を下げました。

「お初にお目にかかります主。私の名はエルファ＝ラフル。横のティータ＝エルマライの紹介により主のメイドとして参上いたしました」

「へえ、エルファさんってバイオリンも弾けるのか」

ある日、朝食を作り終えて手持ち無沙汰だった私は何気なくバイオリンを手に取って弾きました。

こう見えても私の趣味はバイオリンです。

仕事を始める前と終わった後に自分を切り替えるためにバイオリンを弾いていました。

喜んでもらえて何よりです。

一曲弾き終わった私はバイオリンを元の位置へ戻しているところ、主がしみじみと呟きます。

「料理も掃除も大分マシになってきたことだし良かったな」

恥ずかしながら私は料理や掃除などメイドとして必要な技量を身に付けていませんでしたが、主はそのことに文句一つ言いませんでした。

しかし、主は許しても私のプライドが許さないので。

仕事は完璧に。

それが私のポリシーですから、しばらくの間メイドとして技量を身に付けるために努力しました。

そのために犠牲となった食材と装飾品には合掌を送るしかありませんが。

このところ、私は主に対してイラつきがあります。

他の家の従者から見れば贅沢だと非難されると思いますが言いたいことがあります。

主は怒らないのです。

いえ、怒らないというより全ての出来事に対して無頓着と言っべきでしょうか。

無礼な客が訪れて弾劾されようと、柄の悪い冒険者に脅されても主は何の関心も払いません。形だけとはいえ仕えている者にとつては主が私以外に馬鹿にされるといふのは酷く屈辱的な光景です。

しかも主はそのことをどうでもいいとしか感じていません。

これは少し喝を入れるべきでしょうか。

手始めに来客室に豪華な品を並ばせましょう。

それで怒ってくれば私としては喜ばしいことです。

……まあ、主を苛めることに若干の悦びがあつたことを否定しません。

「師匠、今日も来ました」

そう言ってニツコリと微笑みかけるのは最近出入りするようになったサラハキュリアスです。

主と接触しに来ましたので、念のため裏を探ってみましたが無事出てきません。これは正直に主の鍛冶の腕前に惚れたというところでしょうか。

このメイド服もそうですが、主は物を作るということにかけては常軌を逸していますから気持ちもわかります。

「師匠、今日も見学しますね」

そう馴れ馴れしく主に近づくサラ様。私が言うのもなんですが、仮にも師匠と崇め奉っているのですからもう少し敬意を払うべきでしょう。

と、主のメイドである私は思います。

私は人を殺せません。

いや、殺せなくなっただけじゃないでしょうか。

そのために私の能力は大幅に低下しています。

しかし、そうは言っても「はい、そうですか」とやられるわけにはいきませんが。

「ば、化け物め……」

大広間で現在立っているのはそう発したリーダー格の男と私だけです、他は全員眠ってもらいました。

主は闇の世界でも有名らしく、どうにかして主を手に入れようと画策している輩がいますが、その中に今回の様な乱暴な手段に出る者の後が絶ちません。

「さすが『氷の死神』と呼ばれただけはあるな」

懐かしい名を出してきた相手を私はジロリと睥睨します。

よくわかりませんが、私はやるべきことをやっているとそんな2つ名で呼ばれ始めました。

老若男女問わず人を殺す時は顔色一つ変えないからだそうです。

まあ、今となっては興味などありませんが。

リーダー格の男はこの場から脱しようと思いましたが、それを見逃す私ではありません。

得意のスローイングで彼の背中にダガーを投げつけました。

主特製のダガーですから当たると確実に眠ります。

やれやれ、こんな代物を作るから狙われるのですよ。

侵入してきた輩を縛りながらそんなことを考えます。

「お疲れ様」

全てが終わった頃に主が地下室から戻ってきました。

襲撃があつた場合、身の安全を確保できるまで主は地下室で過ごしてもらふことにしています。

「ふわー、エルファさんって凄いいんだね」

一緒に避難していたサラ様もそんな感嘆の声を上げます。

「ありがとうございます」

このような場合は謙遜するのが一番だろうと考え、私は一礼しました。

どうでもいいことかもしれませんが、サラ様に身の危険が迫ると主が困るため他の『草』が常に張り付いています。

ヒュエテル様と主が孤児達をどうするかで話し合っています。

本人達は良かれと思ってやっているかもしれませんが、警護するこちらの身にもなってほしいものです。

主が行っている孤児しかりスラムの解体を行って一番困るのは闇の人間です。

彼らは汚れ仕事をそいつた使い捨ての人間に行わせるのですが、

主達の行動のおかげで人間が集まりにくくなり、結果として彼らの行動を制限しています。

闇の人間は国にとっても害悪でしかないので国は主の行動を好意的な目で見ていますが、主達に対する報復活動が行われているのは事実。最近になって襲撃回数が増えてきました。

襲撃を行うファミリーはすでに見当を付けているのですから、国は早いところ解体させてほしいものです。

主も人の子だということが分かった出来事でした。

サラ様の態度に主もとうとう堪忍袋の緒が切れたようで、無謀な課題を出しました。

普通ならそこで終わりなのですが、サラ様は私と同じで己の身よりも課題をこなすことのほうが重要なようです。

その姿勢は仕事を完璧にこなす私は共感ができますが、主はそうではなかったようです。サラ様をどう止めようか狼狽して苦しんでいます。

仕方ありません。

私はそつとため息を吐いた後、サラ様の父親へ会いに行きました。

主に汚れ役を押し付けるわけにはいきませんから。

サラ様の父親は子煩悩なようです。

まさか話し合いに来た主を問答無用で投げ飛ばすなど想像できませんでした。

今の事態は私の責でもあります。

それを償うために今回は主を手助けいたしましょうか。

私はキュリアス家の行動パターンを整理して主に手渡しました。

主の笑顔が若干引きつり気味だったのは気のせいだということにしましょう。

サラ様の件で私はようやく主の人間らしい面を知ることができました。

ですので私はサラ様を慰めた主に対して賞賛させていただこうと口を開きました。

最近王宮がきな臭いです。

現国王の容体が悪化し、次の国王を誰にするか迷っているようです。

世襲的に見れば第1王子のフォルター宰相。

能力的に見れば第2皇子のキルマーク騎士団長。

現在王宮はこの2派閥に分かれて争っているようです。

王宮闘争に興味などありませんが、このままですと近いうちに権力とは違った力を持つ主が巻き込まれるのは必至。

せつかく得た安住の地を手放すわけにはいきません。

天が与えた機会とでも言いましょうか、目の前には義賊が奪った金銀財宝があります。

これと少しの主の財産を使えば王宮闘争の及ばない地へ逃げることができるかもしれません。

「主、提案があります」

私は前々から思索していた考えを披露しました。

主は単身ジグサルへ向かいました。

本来なら私も同行したかったのですが、そこは王宮からストップがかかりました。

大方私まで連れて行くと王国にとって主が脅威になると考えたのでしょうか。

まあ、その通りでしょう。

主は大きな力を持つ反面、隙が多すぎます。

どこかの刺客に狙われたら高確率で命を失うでしょう。

しかし、それは主が一人の場合です。

私は密かにヒュエル様と相談し、主の身辺を守るための教育を受けた孤児を何人が主の傍に置くことにしました。

私が太鼓判を押した孤児達です。

そこら辺りの刺客では相手にならないでしょう。

さて、私は主の代わりにサラ様の警護を行うことになりました。

サラ様は主ほどではないにしろ脅威ともいえる力を付け始めています。

上が上なら下も下と言いまじょうか、隙の多さは主と勝るとも劣りません。

主は落ち着いたら全員をこちらに呼ぶと仰っていますから、その時までサラ様の身の安全を守りまじょうか。

鍛冶場工房は主特製の施設ですので、使用中なら誰も入ることはできません。ですので今の時間帯は自由に行動できます。

「あら？ エルフアじゃない」

街中を進んでいるとそんな声が聞こえました。

「ティータですか、どうしました？」

私がそう尋ねるとティータは何が嬉しいのか笑いながら頷いていました。

「良かったわと一安心している最中よ」

「何を訳の分からないことを」

「アハハ。いいじゃない、別に。ところでエルフア、なんでメイド服を着ているの？」

「これですか？」

私は服の裾を摘み上げます。

色々理由がありますが、やはり安心するからでしょう。

さすがは主と言いますかこのメイド服はとても肌に馴染み、動きやすいので同じのを何着も持っています。

「エルフア、注目の的よ」

確かに言われると多くの視線が私に集まっています。おかしいですね、私の他にもメイド服を着て歩いている人がいるのにどうして

私だけ。

「エルファは少し自分の容姿を気にするべきね」

ティータが呆れ気味にそんなことを呟きました。

「ところでエルファ、今暇？ 時間があるなら少しお茶しない？」

そうティータが誘ってきましたので私は頷くことにします。

帰りは多少遅くなるでしょうがサラ様は気にしないでしょう。

「もう3年か、月日が経つのは早いものね」

3年前と同じ店の同じ席に座ったティータはしみじみとそんなことを呟きます。

確かにこの3年は殺し一色の日々と違い、充実していました。

「ティータ、ありがとう」

感謝の意味を込めて私は頭を下げます。

「ティータがいなければ私はここにいなかった」

私は自然と旧友に頭を下げます。

で、それを見たティータの反応は。

「どSのエルファが頭を下げるなんて、今日は雨でも降りそうだわ」

……失礼なことを言いますね、ティータは。

私は無言で目を細めました。

番外編 エルファの追憶（後書き）

追記 エルファが暗殺者として活躍していたのは8歳から15歳までで、主人公のメイドとなったのは16歳からです。

……かなり早熟ですがエルファは17歳という設定に合わせるために見逃してください。

まずは金、とにかく金（前書き）

タイトルについては何も聞かないでください。

まずは金、とにかく金

まずは金！　とにかく金！　金がなければ全てが始まらない！

「そう！　いくら高性能の自動車でもガソリンなしでは動かない！
どんな精兵であろうとも食料がなければ弱卒以下だ！」

「一体何を吠えているのですか？」

俺がそう叫んでいると横から呆れ気味の質問が聞こえた。

「まあ、気合付けだ」

さすがに誰かから今の痴態を見られ、咎められるのは恥ずかしい。
俺は誤魔化すために笑う。

横にいる女性は一ア＝レグトリア＝ツバイク。

海を映し出した深い青色の髪を腰まで伸ばし、瞳は涼しい色合い
を持っている。年は俺と同じ１６歳なのだが、身体の成長は１６歳
と思えないほど進んでいる。身長こそ俺より少し低い程度で胸はあ
まりないのだが、それを欠点と思わせないほどしなやかでスレンダー
な体つきをしていた。

ジグサールを治めていたツバイク伯爵の双子娘の片割れだ。

先日失踪したツバイク伯爵の人質として娘達をカリギュラスに留
めていたのだが、この辺境を統治するよりも娘を見殺しにしてまで
他国へ亡命したかったらしい。

で、亡命したツバイク伯爵の代わりに責を負うとして奴隷に成り下がりそうだったのだが、エルファの進言によって俺が引き取り今ここにいる。

「頼んでいた財政の案件は整理できた？」

俺が問うとレアは間髪入れずに頷く。

「隠れ借金や脱税など多岐に渡ってありましたが、すでに山場を越えました。後は事後処理だけです」

レアは事務能力が高いのでジグサールの内政の総責任者となってもらっている。

貴族の娘なのにしてここまでしっかり管理しているのか聞いてみたところ、博打好きの父のおかげで自分しか財政を操れる人間がいなかったかららしい。

せめて帳簿をつけることができるぐらいの人間は雇っておけよ。

家が困窮するほど博打に嵌ったことからツバイク伯爵はかなり無能だったのではないかと推測する。

「さて、そろそろ戻ってくるかな」

約束の時刻はもう過ぎているが俺の待ち人は現れる気配もない。

「毎度毎度のことだからもう気にならないが、何とかならないものかなあ」

俺の呟きにレアが困ったように笑うと、ようやくこちらに向かってくる足音が聞こえてきた。

「ごめんごめん、また商人が放してくれなくて」

「姉さんは余裕というのを覚えるべきよ」

レアはフィーナに説教を始めるがフィーナは堪えた様子もない。

矢のように走って俺の前で謝るのはフィーナ「レグトリア」ツバイク。レアの姉である。

フィーナとレアは双子で、しかも一卵性双生児であるがゆえに姿形は全く同じ。シャッフルされると全く見分けがつかなくなるほど似ている。

ヒュエテルさんも双子でここまで酷似するのは珍しいと評するところから如何に2人が鏡写しなのか分かるだろう。

が、残念ながら性格までは似なかったようだ。

妹のレアは几帳面で受け身な性格に対して姉のフィーナは活発的でアクティブに行動する。

レアは暇な時は本を読み、フィーナは外へ出る。

姿形がそっくりだった分を性格でバランスを取ったのかなと考えてしまうことなど何度もあった。

閑話休題

「で、フィーナ。どうだった？」

「ええ、大手の商会在ジグサールに支店を置く契約が決まったわ」

フィーナは笑顔で首肯する。

フィーナは相手の警戒心を解かせる素質を持っているので主に外交を中心に行わせていた。

宮廷暮らしのお嬢様が海千山千の怪物達と話し合えるのか不安に思っていたがそれは杞憂に終わり、今ではこのジグサールの顔としての位置を占めていた。

レアとフィーナが揃ったところで俺は次の計画を打ち上げる。

「では、そろそろ本格的に動きたいが街の治安はどうなっている？」

レアに先を促すと、彼女は手にした報告書を読み上げる。

「ユウキ男爵の財力とクロスとアイラが率いる孤児達のおかげで中央商店街周辺の治安は確保しました。全体からみると小さな地域ですが、あそこだけなら窃盗や暴行など起きず、安心して外部の者を招けると断言できます」

その報告に俺は満足して頷く。

ここに赴任してからすでに数カ月がたった。その間俺は何をしたかというと、まず都市内で安心できる場所を作る準備をしていた。

人を呼び込むためにはそこが安全だということを知らせないとならないのでこの事業には金と人手を惜しまず注ぎ込んだ。

ここでクロスの騎士養成学校での経験が生き、クロスを治安維持の筆頭に任せたところ十二分の働きをしてくれた。クロスがいなければ中央商店街の治安維持はさらに数カ月はかかったといえる。

もちろんクロスを支えてくれたアイラも外せない。

道理を通せば角が立つように、逮捕された不逞な輩からの報復を未然に防いでくれたのはアイラの功績だ。ここはアマチュアであるならず者とプロのレンジャーであるアイラの違いが出たということか。

その報告に続いて今度はフィーナが口頭で述べる。

「キツカとユキが中心となって集めてくれた素材が規定量に達したのでその一部を各都市の腕の良い職人に渡したところ、評判は上々よ。身の安全を確保できるならばらくジグサールに滞在しても良いという返事を貰えたわ。そして、各都市にユウキ男爵を含めた腕利きの鍛冶屋が集結するという噂を流したから早くも行商人はここに向かって動き出しているわ」

上々の結果に俺は口元を綻ばせる。

俺も職人だから彼らの気質を少し理解できるのだが、一流の職人ほど生活のためでなく優れた品を生み出すことに精を出す。

そんな職人達に普段は扱えない希少な素材に加え、俺が鍛冶を行

っている場面を見学させるのであれば断らない手はないだろう。

「本当にキツカとユキには感謝だな」

職人を呼び込むための素材を集めてくれたのはキツカとユキだ。彼女達が危険を顧みず最前線で活躍してくれたからこそ職人を呼び込めるだけの素材を集められた。

良い素材が大量に採れるとそれを加工する職人が来る。

腕の良い職人が集まるとそれを買求める冒険者や行商人が寄ってくる。

そして彼らが来れば都市にGを落としてくれる。

その結果、都市が潤う。

「さて、これが成功すると冒険者がこの都市に滞在すると予想されるが、彼らが宿泊するであろう宿や酒場について抜かりはないかな」

「はい、従業員はこの数か月でしっかりと教育を施しました」

うん、それはよかった。もし不祥事が起こってしまったえば客足が遠のいてしまうからそれは避けなくてはならない。

「冒険者のレベルに合わせた場所へ誘導できるか？」

「都市の入り口に情報屋を配備します。そこで聞けば今のステータスと装備でどの場所で狩るのか適切な場所を教えてくださいます」

未熟な冒険者が己の力量も顧みれず、無駄に命を散らせると後の風評に響く。だから死なせるわけにいかないし、それ以上にこの都市周辺でステータスを上げてくれればこちらとしても儲かる。

「そういえば1つ提案があったのだけど」

「何かな？ フィーナ」

「娼館や賭博場なんて作れないかな。ほら、あれって禁止しても無理な類のものだし」

「あー……それか」

プレイヤー時代はそういう類いのものをしなかったから失念していた。確かに人が集まるとそのような施設も必要になってくる。

「ねえユウキ男爵、もし良かったらそれらの指揮を私に任せてもらえない？」

「フィーナが？」

俺が聞くとフィーナは笑顔で頷く。

「ああいったものを一度でいいから運営してみたかったの。いつも父の傍で見ていただけたからとても気になって」

「うーん」

それを聞いて俺は一気に不安が高まる。

フィーナは自分がしたいことに関して一切の容赦がない。

以前手っ取り早く金を稼ぐために金貸し屋から不良債権を集め、その回収をフィーナに任せたら返却率が100%に近い状態へなった。それだけなら構わなかったのだが、フィーナがやり始めてから店や家を失う人が増えて治安に大きな影響を与えた。

「借りたものは返す。これ、正論でしょ？」

素でそんなことを言つてのけたフィーナに内政担当のレアが珍しく火を噴くように怒り狂ったのは記憶に新しい……そんなに大変だったのか、レア。

俺が唸っているとレアが口を開いてフィーナを擁護し始める。へえ、何だかんだ言っても姉妹なんだと俺は感心する。

「今回なら大丈夫です。二重三重の警戒網を張り巡らせ、もし引つ掛かった場合姉さんはしばらくハードプレイ専門の娼館で働いてもらいます」

「ちょっと！　そこまでやらなくていいじゃないの!？」

訂正

全然許していなかった。

レアが笑っていることから本気でフィーナをそこで働かせたがっている。

「まあ、そこまで言つのなら構わないか」

俺は許可を出す。娼館もカジノもいずれは建てなければならないのなら早い方が良いだろう。

大きな案件はここまで。後は小さな報告のみを済ませてこの場は解散した。

「ねえ、確認するけど娼館で働かせるというのは冗談よね？」

「さあ？ どうでしょう」

フィーナが震える声で尋ねてくるのに笑顔で返すレアが相当怖かったことを追記しておく。

まずは金、とにかく金（後書き）

誤字脱字やご意見、ご感想をお待ちしています。

治安向上

「〜」

「ご機嫌だなレア」

俺とレアがいつも通り執務室兼会議室で仕事を行っているのだが、時折レアから鼻歌が聞こえてくる。

本人は自重しているつもりなのだろうが、頬の緩み具合や眼が生き生きしている様子から喜びを抑えきれないようだ。

「ええ、何故ならここまで上手くいくとは思いませんでしたから。内政を預かる身として冥利に尽きる結果です」

普段表情を崩さないレアがそこまでご機嫌になるのは3か月前から行った都市の活性化が想像以上の利益を落としてくれた。

この利益のおかげでこれまで予算がなく、実現できなかった案件に手を付けられるのだからレアとしては笑いが止まらないだろう。

「まあその通りだな」

俺としてもこれからの方針を進めるにあたっての第一段階をクリアできたから万々歳。

レアも喜び俺も喜ぶ結果と終わったのだが、残念ながら約一名不満な者がいる、それは。

「何なのよこの忙しさは！」

髪を振り乱して足音も荒く入室してくるのはレアの姉のフィーナ。

彼女は豪商や貴族などの折衝を行う外交を主に行っている。

「馬鹿貴族どもが！ 袖の下とか利益供与とか便宜を図れとかなんて図々しい！ そんなに羨ましいのなら自分の領地で行えばいいじゃないの！」

フィーナがそう叫ぶのもわかる。

今回の町興しの成功を妬んだ他の貴族達が何とか甘い汁を吸おうと群がってきた。

で、その対応を一手に引き受けたのがフィーナ。

利益に目ざとい彼らの権謀術数を掻い潜り、相手に弱味を握らせずに奮闘していたのだからそれはそれは心労が溜まることだろう。

「ご苦労様、フィーナお姉さま。お姉さまの苦労がこのジグサールを支えていますよ」

言葉上は労っているように聞こえるがその実全然労っていない。

レアがフィーナをお姉さま呼ばわりするときは十中八九馬鹿にしている。

案の定フィーナが肩を怒らせてレアに詰め寄った。

「はいはい、もう分かったから2人とも止めてくれ」

このまま姉妹喧嘩にもつれ込みそうだったので俺は2人の間に割って入る。さすがのフィーナもこれでは不味いと悟ったのか渋々ながらも引き下がってくれた。

「……後で覚えておきなさいよ、レア」

（やれやれ、本当にお前らは仲が良いな）

そう口に出すと2人から折檻されそうだったのでその言葉を口に出すことはなかった。

「さて、フィーナは貴族の対応に追われていたらしいが、前に任せると言った娼館やカジノの掌握はどうなっている」

その言葉にフィーナは態度をコロツと変えて勢い込んで話し始めた。

「順調も順調、商人との提携も上手くいったし、そこから闇の人間を追い出すことも成功したわ。だからもうぼろ儲けよ。この2か月の収入だけで1年は遊んで暮らせそうだわ」

事もなげに言ってくれるが、実際にやるとなると途方もない労力を使う作業である。

「彼らを制御するのに何かコツでもあるのか？」

と、聞いてみるとフィーナは手を振って笑いながら。

「ああいつのを扱う人間は最終的に利益さえ得られれば良いのよ。だからそこを思考の基に置けば彼らが何を考え、何を得たいか、そしてそのために何をしようとしているのか、手が取るように分かるわ」

と、簡単に言ってくれた。

俺的には商人は貴族より厄介だと思っているのだが、どうもフィーナは違っらしい。

「下らない誇りや地位に固執し、後先考えずに付き纏ってくる貴族の連中よりずっと可愛いわよ」

この言葉にはレアさえも頷いていた。

「前々から思っていたがフィーナは貴族をボロクソに貶すな」

「だってあんな血筋だけのお荷物に尊敬の念なんて持つことが出来る?」

と、伯爵の爵位を持っていた元貴族のフィーナは非常に辛辣な言葉返してくる。

……もう何も言っまい。

同族嫌悪と思うことにしておこう。

「さて、街の活性化が上手くいったので次の段階に移りたいと思う」

その言葉に頷くツバイク姉妹。

だから俺は会議の始まりを宣言した。

「レア、現在の財務はどうなっている？」

「はい、収入と支出のバランスが崩れ、今は金余りの状況になっています。この量があれば大きな改革の1つや2つは起こせるでしょう」

レアの報告に頷く俺。

「よし、それなら軍を整備しようかと考えている」

「軍ですか」

レアが渋い顔を作る。

まあ、当然だろう。

軍というのは基本的に金食い虫なので内政を預かる者としては好ましい存在でない。

が、俺が考えているのはレアが考えているような軍じゃない。もっと生産的な軍だ。

「半農半兵、という表現が正しいかな有事の際は兵として活躍してもらうが、それ以外は公共の福祉に力を注いでもらう」

「具体的にどういうこと？」

フィーナが今一つ理解していなかったのでそう質問する。

「輪番制というものを採用しようかと考えている。つまり1日兵の訓練、1日公共事業そして1日休みという具合にな」

「それで上手くいくかしら」

「フィーナの疑問も最もだ。しかし、短期的にはともかく長期的に見ると相当な利益を生む。何せこのような形ならば普通より多くの兵を確保できるからな。だから頑張れレア」

「分かりました」

レアが多少沈んだ声だったのは気のせいにしておきたい。

「で、公共事業として何をさせるかという都市の整備が主な仕事。これから先、中央商店街以外でも治安を安定させたいからな」

「確かに。そろそろ都市の整備を行わなければ後々の業務に支障が出ます」

レアが納得するのわかる。

金が動けば人も動くと言うように、最近ジグサルへの人口の流入が著しく、このままだとまだ治安が整っていない場所に流民を住まわせなければならなくなる。

「これが街の整備の基本計画書。ヒュエテルさんが前々から構想し

ていたスラム解体の構図をジグサールに合うようアレンジしたものだ」

そう言っ て俺は2人にそれを配る。

このジグサールへ赴任する前にヒュエテルさんの所へ赴いてこのことを相談すると快諾してもらった。

そして俺はそれをアイラとその子飼いの孤児達にこの街の全容を解明してもらい、この計画書を作成した。

「人手はこの街に多数の身元不明者が在住しているから彼らを使うで、その際に兵役も負うならば一定の給付金を毎週送ると下賜してほしい」

「ふーん、大体理解したけど彼らの監督は誰がやるの？ 私やユウキ男爵のような上品な存在に彼らが従うとは思わないんだけど」

「フィーナの疑問もわかる。だから彼らの総監督はキツカ、そして中級監督はヒュエテルさんが選んだ孤児達にやらせようかと考えている」

「キツカが？ 確か彼女って根っからの冒険者でしょ、將軍には向いてないんじゃないかしら」

「フィーナの言うとおり、俺もそう思ったんだけどな。しかし、エルファの言葉によるとキツカは人を導くカリスマ性を持っているらしい。だから今回の人事に抜擢したのだけだな」

「エルファさんか、それなら納得」

自分を見出してくれたエルファはレアもフィーナも一目置いてい
る存在だ。そのエルファが推薦したのだから2人は頷かざるを得な
いのだろう。

「失礼ですがヒュエテル様が選んだ孤児というのは信用できるので
すか？」

「レアはそう思うだろうな。ただ、疑問に思うのは彼らの仕事振り
を見てからにしてほしい。ヒュエテルさんとは3年しか付き合っ
ていないが、その彼女が持つ人物眼は大したものだぞ」

4ケタに迫る孤児の確保と彼らを保護する施設の維持は1人の人
間にできる芸当じゃない。だが、ヒュエテルさんは目をつけた人物
にそれを任すことで可能としていた。

そのことからヒュエテルさんが持つ眼は優れている判断できる。

「エルファ様には敵わないと思いますが」

レアよ、どう答えていいかわからない言葉を口にしないでくれ。

「……とにかく、キツカからはOKを貰っている。だから具体的
な内容はレアとキツカで詰めてくれ」

その言葉にレアが頷いた。

「さて、公共工事と兵についてはレアとキツカに任せるとしてフイ
ーナはクロスとともに治安を向上させてほしい」

「私も参加するの？ 彼が率いる治安部隊で十分じゃないかしら」

「その疑問は最もだな。しかし、これ以上治安を上げると闇の組織——ブラッディ商会からの反発が予想されるからこの機にクロスの治安部隊で一掃しようと考えている。フィーナは反目し合って同士討ちを誘発し、彼らを弱体化させてほしいのだが」

今まではパワーバランス上彼らに手を出すとこちらがやられる為手出しできなかったが現在は違う。財政が潤い、こちらの味方も増えた以上彼らに遠慮する道理はどこにもない。

ちょうど良い機会だ。

フィーナの交渉能力とクロスの治安部隊を使って一掃してしまおう。

「こちらの手足となって動きそんな人間の処遇についてはフィーナの裁量に任せる」

こちらに降って忠実な手下として動いてくれるのならそれでよし。

やはり彼らは彼らなりに使い道があるのが事実なのだ。

「ただ、助ける人間は選んでくれよ。後々こちらの寝首をかかれては堪らないからな」

言っまでもないとはかりに笑うフィーナを見て俺は成功を確信した。

踊り場（前書き）

今回は総括だけです。

話的にはあまり進んでいません。

しかし、内政って結構難しいですね。

試行錯誤の毎日です。

踊り場

「芳しくないな」

レアから輪番制による練兵具合そして都市の整備状況を聞いた俺はそんな感想を漏らす。

「申し訳ありません。予想以上に兵の士気が低く、中々従ってもらえません」

レアが恐縮するのだが俺はそんなに縮こまらなくていいと考えている。

元からの兵士ならともかく、つい先ほどまで浮浪者だった人間に兵のような働きを期待しても無理だ。幸いにもジグサルはこの都市の規模でまだ補える範囲なので急ぐ必要はない。

「キツカと送られてきた孤児達が今も奮闘しているのだろう。だから俺達は温かく見守ろうじゃないか」

「はい、今はその手しかありません」

レアが首肯したのでこの話題は終わり。

ふとキツカとその孤児達が頭に過ったので聞いてみる。

「ところでキツカと孤児達はどう？」

ヒュエテルさんが選んだ人材がどうなったのか興味を沸いたので

伺ってみると、レアは恥じ入るように口を開いた。

「ヒュエテル様を疑ってしまい、本当に申し訳ありません。彼女が選んだ孤児は想像以上の働きをしてくれたおかげで最悪の形である失敗だけは防ぐことが出来ました」

こう言っただけだが、計画の失敗の回避よりもレアがヒュエテルさんを認めてくれた方が嬉しい俺がそこにいる。

「キツカについてはやはりエルファ様のご慧眼です。彼女が送られてきた孤児達を統制してくれたおかげで私の指示を全体に行き渡らせることが出来ました」

「ほう、それはよかった。ところでレアから見てキツカはどう感じた？」

その質問にレアは人差し指を顎に当てて考え、口を開いた。

「圧倒されました。普段は何の変哲もない小娘のはずなのですが、いざ指揮をするとなると彼女から溢れ出す何かが私を含めた全員を魅了します」

小娘って……まあ、良いだろう。問題はそこじゃない。

キツカは仲間内から永久機関の持ち主と呼ばれていたからな。その底なしの体力と気力が生み出す覇気にレアは吞まれそうになったのだろう。

「つまり当初の計画よりは遅れているがそれは深刻な影響を齎すものでなく、時間さえかければ解決する類のものなのだ」

俺がそう結論付けると同意するかのようにレアは頷いた。

「お疲れ様」

レアからの報告が終わるとそれに見計らうかのようにフィーナが顔を出す。

当初は3人が揃ってから報告会が行われていたのだが、報告する内容は事前に知らされていることから全員出席することに異議を唱えたのがフィーナ。

「大丈夫よ。聞きたいことがあれば出席するから」

そう言っただけで席に着くフィーナ。

余談だがフィーナが最初に報告する際には必ずレアが遅れてくる。

性格は真反対なのだが妙な所で似ている双子娘のフィーナとレアだった。

「治安の件は？」

「もう大成功。アイラの助力もあったけどクロスが率いる治安部隊のおかげでジグサル全ての場所に目が行き届くようになったわ。この調子だと夜に娘が1人歩いても大丈夫じゃないかしら」

「へえ、それは良かった」

治安の向上は兵や都市の整備と違って緊急の用件だったためそれ

が上手くいって良かった。正直な話これが上手くいかないと次の段階に大きな支障が出てしまうからだ。

「で、フィーナが担当していたブラッディ商会の件はどうなった？」

「ああ、それね。概ね成功というところかしら」

「具体的には？」

「ブラッディ商会は壊滅できたけど、有能な人材は手に入らなかったわ。それはこちらの就こうとした人間も何人かいたけど、彼らはとてもじゃないけど使えない。せいぜい鉄砲玉が良いところだから全員捕えたわ」

「当初の目的は果たしているから問題はないな」

人材が手に入らなかったのは痛いといえば痛いけどそれほど惜しむことじゃない。そういった人材はヒュエテルさんが送り出してくれるからあまり問題はない。精々優秀だったら拾ってやる程度の認識だった。

「ところでフィーナから見てクロスとアイラはどう見る？」

「そうねえ……クロスは責任感が強く、見ていて安心できるわ。だから彼の率いる部隊はどんな時でも動じないのかしら。何か事件があるとすぐに彼の部隊が駆け付けて冷静に処理する様子は惚れ惚れするほどだったわ」

クロスの評判が上々で何より。これはまだ誰にも明かしていないが、クロスは後1年ちよつとで起きる魔物大侵攻の際に守衛の指揮

官を任せるつもりだからな。

「で、アイラは……ユウキ男爵は愛されているわねとしか言えないわ」

「ん？ どういうことだ」

齒切れの悪い答えに俺は首を傾げるとフィーナは言葉を選ぶように語りだす。

「人ってさあ、愛する者のためなら残酷になれると言っけど、まさしくアイラはそれを地で行っているわ」

その言葉にレアも頷く。

「確かに、アイラの心酔具合は私から見ても寒気を覚えました」

「少しでもユウキ男爵を貶める気配を感じたらアイラの瞳から感情が消えるのよ」

「その通りです。諜報関係でアイラと打ち合わせする時があるのですが、次の瞬間には首と胴体が分かれていそうでいつもビクビクします」

そう言って頷く2人を見た俺はどう反応していいのかわからない。

「これだけは言えますが、もし私達がユウキ男爵に叛意を翻したら次の日には物言わぬ屍になっていますね」

「そうね。しかも見せしめを兼ねて無残な死に様を晒すわ——」

「——よくお分かりですね」

だからこそ俺の後ろから響いてきた怜悯な声音に全員が固まった。

「……アイラ」

フィーナが呻き声をあげた先には渦中のアイラがそこにいた。

諜報部隊主任 アイラ「カザクラ

装備：

武器 スリープボウ

射抜いた相手を眠らせる。

防具 カメレオンマント

周りの景色と同化する。

頭 忍の頭巾

己の呼吸音を消す。

足 サイレントシューズ

己の足音を消す。

装飾品 神の不在証明書

己の気配を消す。

ステータス

短剣 4 6

弓矢 6 5

隠密 7 2

魅了 4 3

恐怖 8 2

4年前と比べて成長したアイラは、浮浪児の時と比べて印象が鋭くなったように見える。藍色の髪のカットは変わりが無いが瞳はさらに鋭く光り、体も少女体型から女性の豊満な体型へと変貌していた。

「ベッドで人を殺せそうだな」

アイラの十分に育った果実から目を逸らして呟くと。

「その前に初体験をユウキ様で済ませてからですね」

腕を組んで胸を強調する姿勢を取ったアイラは至極余裕のある笑みを浮かべて返してきた。

その言葉は男として嬉しいが今は童貞を失う気が起きない。だから童貞を失ってもいいかなと思ったたらお願いしようと考えている。

「何場違いな会話をしているのよ！」

呆然状態から復帰したフィーナがアイラに食ってかかる。

「そうです！ 見張りはどうしたのですか？」

続いてレアもそんな声を上げた。

するとアイラはニツコリと妖艶な笑みを浮かべて。

「抜き打ち検査ですよ。このように不測の事態に対応できるかどうかという」

「へえ。で、結果はどうだった？ 会議室の外には5、6人が固めていたと思うが」

分かり切っていることだがここは聞いておくのが礼儀というものだろう。案の定アイラは唇を歪めて。

「全員鍛え直しですね。反撃はできなくともせめて声ぐらいは上げ

て欲しかったものです」

フッフとアイラは笑うが、仮にもヒュエテルさんが選んだ人材をこうもアッサリと無力化するのを見た俺は戦慄を禁じ得ない。

「いえいえ、私などエルファ様に比べるとまだまだ」

唇を笑みの形に広げながら謙遜するアイラ。それが本当かどうか分からないが、アイラにしてもエルファにしても化け物だと考えてしまう。

「それではこれで失礼します。会議を邪魔して申し訳ありませんでした」

驚きで声も出ない俺達を尻目にアイラはその場から出ていく。

「ああ、言い忘れていましたが。もしユウキ様を裏切ったらどうなるのか、とくと想像して下さい」

フィーナとレアにとってはこれ以上ないぐらい不吉な言葉を残していった。

「……えーと、会議を始めていいか？」

アイラが去ってしばらく経った後で俺は2人に伺う。

「え、ええ。大丈夫よ」

フィーナの震える声から推察できる通り2人ともまだ立ち直っていないが、このまま時間を浪費するのも何なので話を進めることにする。

「まあ、とにかく。レアは引き続き兵の調練と都市の整備を頼む」

「分かりました。ところで気になったのですがユキはどうしています？ 彼女だけ名前が出てこないのですが」

「ああ、それは私も思った。キツカやアイラ、そしてクロスはよく見かけるけどユキは最近見てないの。一体何をしているの？」

「そう言えばまだ伝えていなかったな」

今振り返るとユキがどうしているのか2人に伝えた記憶が無かった。

「ユキは今、魔法学園のOBやOG、そして同級生を尋ねて回っている」

「え、何で？」

「フィーナ、理由は簡単だ。ユキは近い内に創設する『魔道騎士団』のメンバーを集めてもらっているからな」

これは俺の構想の一つで、絶対数が少ない魔導師は1人で軍の一個小隊に相当する火力を持つ。そのため魔導師の数というのは軍の強さを表す一つのパラメーターにまでなっていた。

「しかし、そう簡単に集まるのですか？ 魔導師というのはその性

格上国や貴族が困い込む場合が多いのですが」

「レアの言うことも分かるな。ユキは最難関と名高いの王立魔導師養成学校で史上始めての市民で生徒会長を務めた天才だ。今でもユキに心酔している者が多く、国や貴族よりもユキの下で働きたいと表明している者が確定しているだけで20人は下らない」

「20人!……」

レアが驚くのも分かるだろう魔導師が20人ということは軍の一個大隊に相当する戦力だ。しかもその集団はユキを崇めている者で構成されているから結束力も並大抵でないだろう。

「何にせよフィーナの負担が増えることは確かだ。と、いうことで近いうちに魔導師を取られた国や貴族の抗議が来ると思うからそれを一手に引き受けてくれ。ああ、資金もある程度自由にしていいから決して魔導師を返さないように」

フィーナの悲鳴をバックにして俺はこの話題を打ち切って会議を終わらせた。

踊り場（後書き）

本当はアイラの登場予定など無かったんですけどね。
恐るべし、ヤンデレ。

作者の手を離れて動くとは。

大嵐（前書き）

キツカ大暴れ。

前半の内政パートが吹き飛ばすインパクトをキツカが与えてくれました。

大嵐

「報告出来るまでの仕上がりになりました」

どことなく嬉しそうに語るのは輪番制と都市の改革を任されていたレア。

「当初の予定より遅れましたが、仕上がりは上々です。最大の労働力を手に入れ、さらに無法地帯を撲滅出来ましたからさらに多くの人をジグサールに受け入れることが出来ます」

3か月前は芳しくなかったものの、キツカと送られてきた孤児達の活躍によって俺が思う通りの仕上がりを見せてくれた。

モデルケースは中国の唐時代における長安の都の再現。

碁盤状に区画を整理し、一定区画ごとに治安部隊の詰め所を配置することによって都市の治安維持を図る。

さらにこの中央役所を中心として以下の様に区域を割り振った。

北には強力な魔物出没地域に繋がる北門ゆえにここは素材買い取り屋や情報屋、鍛冶屋そして薬屋など冒険者向けの店を揃える。

東から外部の者がやってくるためこの区域に宿屋や商店街など行商人や旅人を対象とした商業区とする。ちなみに娼館やカジノ、闘技場もここにあった。

南については現在建設中だがここら辺りに学校や病院、研究所、

裁判所の他に訓練場や教会、汚物処理場など公共の施設を置く。

西が最も治安が安定しているのでこの区域に住居区を構える。中央に近づくほど相場が高い。

中央に行政機関の中心となる役所がある。他にも有事の際にいつでも対応できるよう軍や治安部隊の本部も用意していた。

「南の区画に置く学校だが、技術者養成学校を優先的に立てて欲しい」

ここは工業都市ジグサール。

その名前に恥じないよう後継となる技術者は育てておかねばならない。

構想としては都市内にいる技術者を順に学校に招いてより実践的に行う予定だ。

「技術者を育てるためのGは惜しまないからいくらつぎ込んでも構わない」

俺の愛した工業都市ジグサールが着々と完成していく。

レアが「畏まりました」と頷くのを確認しながら俺はほくそ笑んだ。

そして次はフィーナからの報告に移る。

あのアイラの一件から身の危険を感じたのかレアもフィーナも出席義務の無い報告会へ顔を出すようになっていた。俺が出席しているにも関わらず自分達が出席していないという状況はアイラの怒りを買っんじゃないかと恐れた結果だから俺は何とも言えない。

……お前らは身の危険を感じないと出席しないのか？

閑話休題

今回はレアが輝く反面フィーナは沈んでいる。

まあそうだろう。

ユキが勧誘した魔導師の雇い主からの抗議を一手に引き受けていたのだから。

噂によるとフィーナは時折奇声を上げていたそうだからそろそろ壊れかけているのかもしれない。

と、言っても雇い主を鎮めるためにかかるであろう袖の下を予想の半分に抑えているからまだまだ余裕があるのかと考えてしまう。

「魔導師を引き抜かれた貴族からの抗議だけど何とか捌いたわ。これに関してはアイラに感謝しなくちゃ。フッフ、もうアイラに足を向けて寝られないわね」

聞いたところによるとアイラの諜報部隊が貴族達の弱みを握り、それを材料にフィーナが駆け引きを行うことによって黙らせたらしい。

フィーナはアイラを頻りに褒めているが、俺から言わせると押しが強すぎると貴族達の反感を買って孤立してしまい、かといって弱すぎると魔導師を取り返されるので針の穴を通すような絶妙なバランスを取ったフィーナはやはり天才なのだと考える。

「抗議してきたのは貴族だけか。国からは無かったのか？」

俺はそっちの方を恐れていた。

貴族からの反感を買うのは痛い、民衆からの支持を得られているためすぐに影響が出ることはあるまい。魔物大進行が起こるまで持たせればいいだけの話だからな。

しかし、国の反感を買うともっと直接的な制裁が来てしまう。

罪をでっち上げられて犯罪者と認定されてしまう可能性があったので、国からの追及が避けられないのであればそちらは諦めるつもりだった。

するとフィーナはため息を吐きながら

「王宮は外部に目を向けるどころじゃないのよ、もう派閥争いが泥沼化してそんな抗議をする暇があるのなら王宮内で味方を付けた方が得というくらい。だから外部の私達が何をしようがどうでもいいみたい」

「悲しいですね」

元貴族で伯爵の地位にいたレアが顔を顰めるのだが、俺はむしろ

好機と見ている。

何をしても許されるのであれば精々好きなようにやらせてもらおうか。

そして後でエルファに頼んで王宮内で有能な人材をこちらに流してもらおう。

そう考えている間にもフィーナの報告は進む。

「実際問題としてユキが連れてきた魔導師の大半は国が召抱えている宮廷魔導師よ。彼らは権力争いに巻き込まれるぐらいなら安全な私達に付こうという魔導師が多かったわ」

「なるほど、だからユキの連れてきた魔導師のレベルは高かったのか」

貴族や実力者が持つ魔導師にしては練度が高すぎると薄々勘付いていたが、まさかそんな事情があったとは。これは思わぬ僥倖だ。

そう内心俺は喜ぶ反面とあることに気付く。

そこまで王宮の腐敗が進んでいるのであれば民衆の生活は相当酷いことになっているのではないか。

俺の懸念を読んだのか今度はレアが口を開く。

「産業都市ジグサールの繁栄はこの国に轟いています。今でさえ多くの人が流れてきていますが、これから先はさらに増えると考えて下さい」

「具体的には？」

「アイラからの報告によると明日の食事さえ覚束ない人間がこの国全体の10%に上ります。最悪現在ジグサールの総人口の5倍にあたる人間が流れてくると考えて下さい」

「5倍!？」

フィーナが絶句するのも分かる。

シマール国の総人口は1000万人。

そしてその1割にあたる人口がここに流れてくればどうなるか。

豊かになったとはいえ一都市であるジグサールではそれだけの人数を許容できないのは明白だった。

余談だがユーカリア大陸に住む人口は判明しているだけで1億人である。

「レア、もしそれだけの人口が流れてくるとすれば今ある食料の備蓄で何か月持つ？」

「半年です」

「……厳しいな」

ジグサールは現在順調に発展しているが、それは工業による二次産業によるもので、農業や家畜などの一次産業は全然発展していな

い。

それはジグサールの地質によるものであり、強力な魔物が徘徊するこの地域に農業など土地に根付いたことは出来ないのだ。

血の滲むような努力の果てに作物を育てても収穫前に魔物が大挙して押し寄せて食い散らかされるのがオチだろう。

一分、二分と俺は瞑目する。

フィーナもレアも俺の決断を待っているのか何も言わない。

「……仕方ない」

しばらく時がたった後俺は目を開ける。

「フィーナ、近隣の村に掛け合って交渉してくれ」

このままでは難民が押し寄せて都市全体が餓えるのは明白。だからそれを避けるために俺はある考えを披露した。

「肥糧と農業用具、そして警備兵を無償貸与する代わりに村の拡張を頼んで欲しい」

ジグサールはドラゴンの糞や世界樹の枝などが取れ、そこから作り出される肥料は他と比べ物にならないほど作物がよく育つので、肥料は輸出品の目玉の一つだった。

それに腕の良い鍛冶師が作る鋤や鍬も一級品。農家からすれば喉から手が出るほど欲しい逸品である。

収入を上げるためには村を拡張すれば良いのだが、拡張した分だけ畑を耕す人と守る人が必要となるので、少ない人口では不可能だが誰だつて収入を上げたいと、村を拡張したいと願うのが普通。

だから俺はそれを叶える代わりに農作物の安定給与と将来訪れるであろう難民の受け入れ先を確保しておきたかった。

「構わないけどそれらの村を統治している貴族はどうするの？ 彼らからすれば自分の領地を勝手にされるのは面白くないと思うんだけど」

「それらの村が納める租税を2割増しで払うと言ってほしい。最悪4割まで出せる」

レアの様子を伺うが反対する素振りは見せない。つまりそれだけの余裕はあるということだ。

フィーナは「また仕事が増える」とぼやいていたが、これは必要なことなので我慢してもらおう。

安心しろ、後に今の苦勞に見合った報酬を用意するから。

……多分な。

「さて、これで会議を終了する」

大まかな方針を決定出来たのでこれ以上することはないと考えた

俺はそう宣言する。

フィーナは辛そうだったがそこはどうすることも出来ない、頑張
って耐えてくれ。

「ちょっと待って下さい」

立ち上がりかけたその時、レアがまだ報告があると言う。

「非常に言い難いことなのですが」

レアの目は泳いでる様子からかなり無茶な要求なのだろう。しか
し、そういうのは会議の途中に言っ
てほしいな。

と、俺は苦笑しながらもレアに先を促した。

「先ほど申しました輪番制の成功はキツカの活躍と報告しました」

その通りなので俺は首肯する。上げられてくる報告を見てもキツ
カが重要な役割を果たしていることは明白だ。

「で、そのキツカが報酬を要求したのです」

「何だ、そんなことか」

身構えていた俺は拍子抜けする。

レアの深刻ぶりな様子からもっと重大なことだろうと予測してい
たが、そんなことなら何とでも出来る。

「しかし、それは普通の要求じゃないのです。具体的には――」

「そこからは私が話すわ」

扉が開いて、コツ、コツ、と足音を鳴らしながら一人の戦乙女が姿を現した。

ジグザール軍総大将 キツカカザクラ

装備：

武器 竜骨の槍

防具 ワルキューレアーマー

頭 雷神の兜

足 コルクマリッドの靴

装飾品 大將軍の証

ステータス

剣 65

槍 78

探索 63

魅了 92

支配 83

キツカの身長はすでに180cmを越え、トレードマークである赤毛をポニーテールにしている。口元には常に笑みをたたえ、スラリと伸びた長身に合わせるかのようなスレンダーボディは少女時代と一線を画し、その佇まいは將軍のそれを思わせた。

「で、何をしたいんだ？」

突然キツカが現れたことに意表を突かれながらも、何の用件を持つて来たのか尋ねる。

「ああ、簡単よ。そろそろ私も部隊も持ちたいと思ったから」

「部隊？ 変なこと言う。キツカはすでにジグサール軍の大將だろ
う」

前々からキツカは人を率いる素質を持つと睨み、その予想は今回の輪番制の件によって当たっていたと考えている。

おそらくキツカがいなければ兵も孤児も動かず、失敗していた可能性があっただろう。

が、そう言ってもキツカは首を横に振る。

「違うわ、私よりもクロスが大將に相應しい。だから私は別の部隊を持ちたいの」

「クロスはクロスで別の役割がある。だから大將はキツカしかない」

俺はそう言っただけで何かキツカの叛意を促そうとしたがキツカの決意は固い。俺は諦めて何の部隊を持ちたいか尋ねる。

「私が持ちたいのは竜騎兵よ」

突然の単語にキツカと予め聞いていたレア以外がポカンとする。

「……騎兵か？ まあ、キツカなら騎馬隊でも隊長が務まると思うが俺は役不足だと考えるぞ」

聞き間違いだと判断し、俺は騎兵についてそう述べたのだが。

「馬じゃない、竜よ。竜騎兵の隊長を私は務めたいの」

聞き間違いじゃなかったので俺は頭を抱える。

こともなげに言ってくれるが竜を飼い慣らすというのがどれだけ大変なのかキツカは理解しているのか。

竜というのは知能が高く、誇りが高いので脆弱な人間に背中を貸す竜はまずいない。通常は卵の頃から育て、その竜と兵は一蓮托生というのが一般的だった。

そのため卵から面倒を見なければならぬので、1人の竜騎兵を作るためには少なくとも20年以上の月日が必要だった。

シマール国に竜騎兵など数人。数十人単位で抱えている国は大陸でも5つにも満たないことから如何に竜騎兵が貴重なことが分かるだろう。

「安心して、通常の卵から育てる方法じゃないから」

「どういうことだ？」

そう聞くとキツカは花が咲く様な綺麗な笑みを浮かべながら。

「卵から育てるからそんなに時間がかかるのよ、成竜を従えさせれば問題は解決だわ」

それが出来たら誰も苦労せんわ！

と、叫びたい衝動を必死で抑える。

「まあ、とにかく。竜の住処についてはあてがあるから3ヶ月ほど空けるわ。ああ、それと私が見繕った者も連れて行くから」

そう言っでリストを見せるキツ力。

約30人ばかり載せられているそれを見た俺の感想は。

「……おい、キツカ。これに載っているメンバーを連れて行くって正気か？ これだけの人材が抜けたら軍が大変なことになるぞ」

リストに載せられていたメンバーはいずれもジグザール軍の中核をなす幹部ばかり。そして、幹部以外もリストに載せられているが、その人物達はキツカやクロスほどではないにしろ一軍を任せられる将帥の器を持った将来性のある者だった。

「成竜を従えさせるにはこれくらいの器を持ってなきゃ無理よ」

本当に、呆気なく言ってくれる。

もはや怒りを通り越して呆れてしまった。

「……反対しても行くのだな」

「当然」

俺の嘆息に即答するキツ力。

……もう何も言つまい。

「何か他に必要な物は無いか？」

こうなれば自棄だ、とことん付き合つてやろう。

「そうね、これだけの装備を一式揃えて欲しいわ」

「一式で良いのか？」

「ええ。戦うのは私一人だし、これを全員分揃えるのは多分無理よ」

そう言つてキツカが要求した装備は。

武器	風神のドラゴンキラー	ドラゴンキラーに風属性を3つ
付与、	カマイタチを飛ばせる。	
防具	火土竜の鎧	火属性によるダメージを軽減。
頭	セイレーンの帽子	熱風から呼吸を守る
足	リザードマンの靴	溶岩でも溶けない
装飾品	韋駄天の魂	AGLを2倍にする

「……まあ、これは俺が作つておくから3日ほど待て」

キツカの要求した装備は優秀な職人が多いジグサルでも俺しか作れないだろう。これを30人分揃えろとなると俺は死んでいたかもしれない。

「うん、我儘を聞いてくれてありがとう」

実際は我儘で済む範囲でないのだがな。

用は済んだとばかりに去ろうとするキツカに俺はこう一声かける。

「キツカ、死ぬなよ。もし竜騎兵を得られたとしてもキツカがいなければ意味はないのだからな」

その言葉にキツカは振り返らず、大丈夫とばかりに親指を立てた。

キツカという嵐の前にはばし沈黙としていたレアだが、とにかくキツカ達が抜けた穴を何とかしないとイケないので、突然降って沸いた難事に呆然としていたレアに「軍の再編成をクロスと相談して行うように」と命令する。

「フッフ、仲間仲間」

一人だけフィーナが暗い声で唄っていたのが印象的だった。

大嵐（後書き）

次回は番外編としてキツカの学生生活を含めた内容を執筆します。

急転直下（前書き）

2回目の超展開です。
心してお読み下さい。

急転直下

「完璧だな」

魔物大進行まで後1ヶ月を前にして俺はレアとフィーナを前にしてそう宣言する。

それを肯定するかの様にレアが口を開いて。

「はい。技術の面ですが、ユウキ男爵の弟子であるサラがジグサーに住み付いたためそういった技術関連が大幅に飛躍しています。おそらくジグサーはシマール国どころかユーカリア大陸全体から見ても工業の面においては他の追従を許さないでしょう」

治安が安定したのでようやくサラを呼べる環境が揃った。

ここに来た当初は危険すぎて招けなかったが今は違う。

今のジグサーに昔の荒廃したイメージはもはや無い。

国内有数の治安の高さを誇る都市へと変貌したのだ。

「ウフフ、本当に嬉しいわあ」

フィーナもやはり喜んでいる。

「エルファ様紹介のティータがあれば使えるなんてねえ。おかげで私の仕事も大助かりよ」

「ええ、私もヒュエテル様が財務を担ってくれたおかげでずいぶん楽になりました」

サラを呼んだついでにティータさんとヒュエテルさんも一緒にこのジグサールへと呼んでいた。

ティータさんはともかく、ヒュエテルさんは生まれ育ったカリギユラスから離れたくないと渋っていたが、俺は何度も出向き、いわゆる三顧の礼を尽くして説得した結果、レアの補佐兼財政担当を担ってくれた。

ヒュエテルさんは多くの孤児院と新しく建設した学校の運営を担っていたためその実務能力は折り紙つきだ。人を見抜く眼も持っているのでレアの意思が組織内に伝わりやすいよう人材を配置してくれた。

そして、ティータさんについてだが、これはフィーナの諸事情によって急遽招いた。

俺の見立てではまだイケると考えていたのだが、妹のレアから「これ以上は危険」とシスターストップを宣告されたのでフィーナに補佐を付けることとなった。

その結果、エルファが推薦したのがティータさん。俺から見てもティータさんは気さくな人物でフィーナと通じるものがあつたからフィーナと相性は良いだろうと考えていた。

そしてその期待は裏切らず、ティータさんの活躍のおかげでフィーナは日に日に元気を取り戻していった。

「うーん、本当に嬉しいわ。近隣の村からも評価は上がっているし貴族からのやつかみも無い。こんな週休1日、1日10時間労働がずっと続けばいいのに」

……フィーナが仕事中毒になっているような気がする。

「ええ、その通りです姉さん。私も久しぶりに日付が変わる前に就寝出来ました。こんな日など一体何時以来でしょう」

フィーナどころかレアも仕事中毒になっていた。

……ごめんな、人手が余りに少なすぎたから君達2人に押し付けることになってしまった。

俺は密かに詫びる。

振り返ればジグサルへ赴任してから1年と11か月。俺は休んだ記憶が無い。

起きている間はずっと仕事をし、気が付いたらもう寝る時間だったというのがザラだった。

うーん。これはもしかすると全員が仕事中毒だったのかもしれない。

「よし、ちょうど良い機会だ。来週あたりに都市を視察しよう」

このままだと緊張の糸が切れて肝心な時に使い物にならなくなる可能性がある。

後1ヶ月後には魔物大進行によって嫌でも働かなくてはならなくなるんだ。

ここら辺りでガス抜きをしておくべきなのかもしれない。

「都市視察ですか、どのようになっているのでしょうかね」

「そうね、いつもは仕事だったからじっくりと見ていなかったけど、それはそれは素晴らしいに決まっているわ」

レアもフィーナも都市の視察に乗り気だ。

それはそうだろう。

何せ自分達の成果が見られるのだから。

何せそう論評する俺でさえ心が躍るのを抑えきれなかった。

待ち合わせの場所は中央役所の前。

タイトルは抜き打ち検査なのでアイラを筆頭とした部隊に守られているだけだ。もちろん有事の際にいつでも対応できるよう治安部隊も遠くに待機している。

どうも貴族という肩書には慣れない俺は一般の市民が着るような布の素材でできた簡素な服に身を包んでいる。

布のズボンにジャケットと、向こうの世界でも好んだ服装だった。

「遅れました」

その言葉と共に姿を現すのは清楚なワンピースに身を包んだ少女。ワンピースは青い髪に映えるような色合いを主とし、無駄な装飾を徹底的に排除しているのが印象的だった。

「お待たせ」

今度は対照的な派手な色合い。日傘に二重フリルのスカート、ブラウスには光物が散りばめられているので相当目立っていた。

前者が自身を引き立たせるための服装なら後者は自身すら飾り付けの一部ということだろう。

性格的に考えれば前者がレアで後者がフィーナなのだが。

「何をしているレアとフィーナ、どう考えても服が逆だろう」

「あれ？ やっぱりばれた」

「……一瞬で見抜くとは」

清楚な服に身を包んだフィーナが舌を出し、派手な服装のレアが瞠目する。

まあ、普段からあまり接していない人間なら判別がつかなかっただろうが、俺はもう2年弱もともにいる。いくら2人がそっくりだからと言っても間違うはずがないだろう。

「あーあ、残念。お父様でさえ見分けがつかないと評された私達が通じないなんて」

すぐに看破されたことに不満の声を上げるフィーナ。

「ええ、昔はこれで色んな人をからかっていたんですが」

レアも溜息を吐きながら呟く。

「じゃあそろそろ行くぞ」

これ以上コントに付き合うのは嫌だったので俺は先を促すと。

「ああ、ちょっと待って。いくらなんでもこのちんけな恰好じゃ恥ずかしいわ」

「ちんけですって！ フィーナの選んだけばけはしい服よりもましです」

フィーナが思わず漏らした本音に目をむくレア。

そしてそのまま姉妹喧嘩へと突入する。

「……日が暮れる前に終わらせてくれよな」

キャンキャンと騒いでる様子を眺めながら俺はそんなことをぼやいた。

いつまでも続くと思われるに喧嘩はあっけなく幕を閉じる。

どこから現れたアイラがポツリと「何をしているのですか？」と呟くと2人は途端に硬直し、次の瞬間には仲の良さをアピールし始めたからだ。

この2人の阿吽の呼吸の良さは見ていて面白かったと付随しておこう。

「まずはどこに行く？」

俺は付き添っている両隣の姉妹に行先を聞く。ちなみにもう服は交換していた。

「そうねえ、やはり東を先に回りたいわ」

俺の右にいたフィーナがそんなことを口に出す。

「いえ、ここは西の住宅街でしょう。あそこがどうなっているのか気になります」

すると反対方向の左にいるレアがそう反論した。

俺的にはどちらでもいいが、なるべく早くこの場を去りたい。

実は俺たち、現在結構注目されている。

レアとフィーナは立ち止まって見惚れるほどの容姿を持つ美人だ。ここら辺りはさすが貴族の女というべきか己の武器はしっかりと

磨いていた模様。

それだけでも目立つのに、2人は一卵性双生児で姿形は全く一緒なのに、服装は全く逆ということで注目度が相乗効果で上がった。

そして駄目押しとばかりに先ほどの喧嘩。

俺達を中心に輪が出来ていた。

「……とりあえず北からまわろう」

この注目から回避するために俺は2人の手を取り引っ張っていった。

北区画は冒険者が使うような施設を中心に置き、さらに人も冒険者が多いので必然的に緊張気味の雰囲気が漂う。

「良いわねこの空気。このピリツとした感覚が交渉の時間を思い出させてくれるわ」

北区画の様子を見たフィーナがそんな印象を漏らす。外交官として戦場に身を置いてきたフィーナにとっては命がけで戦う冒険者に親近感を覚えるのであろう。

「そうですか？ 私からすればもう少し規則を守ってほしいものかと」

内政担当のレアらしい言葉だ。

確かにこの北区画は東区画を例外とし、それ以外の区画と比べて治安部隊の出動回数が多いから、それがレアにとっての悩みの種なのだろう。

「いいじゃないの、冒険者に規則を求めるなんて土台無理な話。そこら辺は大目に見てあげなきゃ」

現場重視のフィーナらしい意見だ。戦場というのは規則などなく、それどころか規則があるならまずそれを破ることが重要だからな。生き残るためにはあらゆる手段が許されんだよな、戦場は。

レアは経験していないことに口を出すのを控えたのかこれ以上反論することはなかった。

そして俺はこの北方面で最も大きい施設のキュリアス鍛冶屋へと向かう。

「あ、師匠。お久しぶりです」

鍛冶をしていた手を止めてパツと振り返るサラ。

このキュリアス鍛冶屋は最高基準の設備と30人以上の鍛冶師が常に待機している一大施設だ。

基本的にはサラの作る武器防具を周りの職人が観察し、その過程と完成品から同じ物を作るというシステムを取っている。

かなり面倒だが、サラは鍛冶以外の能力が致命的なためそうせざる

るを得ないと言うのが実情だった。

しかし、それで上手いところ回り、この施設から最先端の技術が産み出されているのだからそれで良いのだろう。

サラはこの2年で大人と呼ばれても違和感ないほど成長した。

「見て下さいこれを。ついに全ての属性を付随させることが出来ました」

俺が来るとすぐに見せたかったのだろう。

近くに飾ってあった剣を手にとって興奮を抑えきれないようにして見せる。

2年前はサラの身体能力的に無理だったが今は違うということをお教えるのにこれ以上の物は無かった。

うん、この剣は俺に作れないだろう。

サラの圧倒的な才能と不断の努力があったからこそ、この輝きが生まれたのだ。

俺は感慨深げにこの剣を上に掲げる。

太陽に照らすと刀身が虹色に輝いているのでこれは間違いなく全属性を付与させていた。

「すごいな、サラは。で、この剣の名前は？」

「師匠が決めてください」

間髪入れずにそう返すサラ。

「この剣は師匠の存在なしでは姿を見せることができませんでした。師匠がいたからこそこの剣があるのです。ですから師匠が産みの親として名付けて下さい」

そう言われて悪い気がしなくてもない。俺は顎に手を当てて考える。

この剣の本来の名称はエレメンタルソードだが、それをそのまま名付けても面白味がないだろう。

1、2分ほど考えて出た名前が。

「サラの剣でいくか」

俺がそう名づけると案の定サラは慌て出したのだが、先ほど言質を取ったことを繰り返すと顔を真っ赤にしながらも渋々と頷いた。

「師匠、意地悪になりました」

最後にそう言い残していったのが印象的だった。

悪いな、サラ。

俺はこの2年間で鍛えられたんだよ。

北区画の次は住宅地のある西区画。

このご時世の住宅地というのは隙間のないくらい綺麗に並んでいるかまたは逆の蛇の道が多い無秩序な状態化かのどちらかだが。俺の構想した住宅地は一味違っていた。

「余裕というものは大事なのです。一定間隔に空き地といえますか公園を置いた結果、こんなにも外観が落ち着いて見えるのは」

レアがそんな言葉を漏らす。

これは俺の育った環境によるものだが、どうしてもきつちりと決まった住宅の違和感が拭えなかったため、多少前例を壊してでも今の形に持って行ったというのが実情だ。

なんにせよ、それが成功して良かった。

価値観が違うから受け入れられないんじゃないかと内心ハラハラしていたのは秘密だな。

「子供達が笑いながら遊んでいるわ。これがどれだけ貴重なのか国は分かっているのかしら」

公園で遊ぶ子供たち。

これは一見何でもない風に見えるが、王宮がガタガタなので民の生活にまで目を向けていない結果、大多数の民は明日の生活に不安を覚えている。

ジグサール外での状況をよく知っているフィーナの言葉に俺とレアは黙り込んでしまった。

「まあ、何にせよこの光景は守らないといけないな」

俺の呟きにレアとフィーナが同時に頷いた。

次は南区画。

南区画は都市が出資元である公共施設が主に建てられているので、雰囲気も北とはまた違った意味で硬い。

「これは駄目だわ。この堅苦しい雰囲気は私に合わない」

と、視察して数分で音を上げるフィーナ。

「うーん、もう少し従業員の数を増やすべきでしょうか。皆疲れているように見えます」

対照的にレアは眼を鋭く光らせて道行く人々を観察する。

レアはここで働く人と根本的には似通っているので苦を感じるところか逆に生き生きしていた。

「改善点についてはヒュエテル様と相談し、予算の計上を行う必要がありますね」

何かを思いついては手に持った羊皮紙に記していくレア。

フィーナは早々にダウンして近くのベンチに寝転がり、俺は苦も楽も感じなかったのだ。ただ漫然とレアの張り切りようとフィーナの疲れぶりを観察していた。

うん、本当に2人は容姿だけ見ると良く似ているな。

……性格は真反対だけど。

レアの書留はまだまだかかりそうだったので俺はこの南区画で一番立派な建物に入る。

この建物は南区画の総司令塔のような存在で、多くの公共施設が立ち並ぶここを一手に総括する場所だった。

で、俺はこの建物の中で一番偉い人に会いに行く。

扉をくぐった先に書類仕事を行っているふくよかな体型に心当たりがある人物は。

「ヒュエテルさん、こんにちは」

「ご存じヒュエテル＝クーラー」

孤児院の元運営責任者で今はレアの片腕として財務の総指揮を任されている人物だった。

「あら、ようこそいらっしやいユウキ男爵。どうしましたか？」

突然現れたにもかかわらず眉一つ崩すことなく笑顔で応対するヒュエテルさん。

この芸当は真似できないなあと考えた。

「王都に戻りたくはありませんか？」

前々から懸念していたことを聞いてみる。

ヒュエテルさんはカルギユラスで生まれ、カルギユラスで育ったから王都を離れることに難色を示していた。

王都を愛していたにもかかわらずここに招いたことを不快に感じていないのか知りたかった。

そういった旨を伝えるとヒュエテルさんは一瞬きょとんし、次の瞬間には声を立てて笑う。

「クスクス。ユウキ様、それは愚問というものです。もしそうならばこんな大役を引き受けていませんよ」

ヒュエテルさんはこの南区域を統括する立場なので、彼女の肩に降りかかる責任がいかに大きいのか理解している。

その意味から自分が王都に戻ることはありえないと言外に伝えていた。

「それは良かった」

ヒュエテルさんが王都に戻るつもりがないことを確認して安堵を漏らす俺。

それぐらいヒュエテルさんはこのジグサールにとってなくてはならない人材だった。

ふと、ヒュエテルさんが遠い目をし始めたのでどうしたのか聞いてみる。

「ええ、やはりこの国は一度滅びるしかないのではと考えまして」

国王が崩御してからの王都はますます荒廃の一途を辿った。

貴族からの信頼が厚いフォルター宰相と騎士団から尊敬されているキルマーク騎士団長。

現国王も未だ決まっていなく、この2派の争いが更に激しくなったので市民の生活はますます困窮していった。

ヒュエテルさん曰く、どんなに力を尽くしてもスラムは拡大し、貧困層の大量増加のため積み立てていた資金を切り崩しても間に合わないほどだったらしい。

「彼らを救えるのであれば私は喜んでこの都市を離れてユウキ様のもとで働きましょう」

三度目に訪れた際にヒュエテルさんがそう言った言葉を今でも鮮明に覚えている。

あのいつも微笑みを絶やさないヒュエテルさんが涙を湛えながら声を詰まらせる様子を見て俺は胸が痛んだ。

「まあ、いいか」

俺は頭を振って思考を止める。

過去のことを考えても今は仕方ないだろう。

全ては1ヶ月後の魔物大進行を乗り切ること。

それが終わってからだ。

「じゃあ、俺はもう行くから」

その言葉にヒュエテルさんはお辞儀をして送り出してくれた。

ジグサールで最も繁栄している区画と聞かれたら10人中10人が東区画と答えるだろう。

人の出入りが最も多い東区域に店や娯楽施設を揃えてきた結果、この東区画がジグサールの顔だと認識され、不本意だが工業都市ジグサールでなく、産業都市ジグサールと呼ばれている。

「嬉しいわあ、ここまで発展するなんて。この区画だけで毎日何百万Gというお金が動いているのよね」

この東区画に力を注いでいたのはフィーナ。

外交官として各地を飛び回っていた合間にここの手入れをしていたらしいのだが、よくもまあそんな方法でやってこれたなと頭を抱える。

「ユウキ男爵、フィーナはやりたいことならいくらでも才能と時間を惜しまない性質です」

確かにレアの言う通りだ。

心身に異常をきたす寸前にも関わらずここの監督に勤しむフィーナは鬼気迫るものがあつたと付随しておく。

「こんな区画を作る暇があれば休めばいいものを」

フィーナはご機嫌の様だが対するレアは違う。

まあ、この区画は最も治安が悪いからな。

治安部隊の出動回数も毎日2桁は越えている。

犯罪と欲望が渦巻く区画——東区画

そんな2つ名がこの東区画に付けられていた。

「ユウキ男爵、あそこへ行ってみる？」

そうフィーナが指差した場所は18禁指定の店が立ち並んでいる。

「これは……」

俺が思わず引き攣ったのも分かるだろう。

まだ童貞の俺にここへ入る勇氣はない。

色っぽいお姉さんが立っていることや入る客は全員男性であることから、これらの店が何であるのか嫌でも想像がついてしまう。

「何馬鹿なことを言っているのですか、さつさと行きますよ」

幸いにもレアが氷の様な突っ込みを放って俺の腕を引っ張ってくれたためこの会話は終わった。

少しばかりの後悔はありそうでない様に見えるけど本当はある。

……ごめん、俺も何を言っているのか分からない。

「大体見回りは終わったな」

すでに日も暮れ、夜の帳が下りてくる中、俺は2人に声を掛ける。

「どうだった？ 見た感想は」

俺がそう振ると。

「素晴らしいです、あそこまで発展させたことが今でも信じられません」

とレアは頬を紅潮させ。

「そうよね。あれを見るためにあそこまで頑張ったと考えると今までの苦勞が報われるわ」

フィーナもウンウンと頷く。

俺も何よりだ。

少し予定が違ったが、概ね俺が愛したジグサールの姿だ。軍隊の方もキツカやクロス、そしてユキの活躍によって大幅に増強され、魔物大進行が起こっても全くの被害を出さずに終わらせる可能性も出てきた。

「さて、明日からはまた仕事だ。2人とも気を引き締める様に」

俺の言葉に2人はしっかりと頷いてくれた。

中央役所へ歩いていた俺達は役所の前にメイドが立っているのを確認できた。

「あれは……」

辺りも暗く、まだ遠いのでそのメイドが誰なのかはまだ分からないので少し歩くスピードを速める。

「エルファ様です」

眼の良いレアが始めにその人影が誰だか気付いた。

なるほど、あの特徴的な緑色の髪をしたメイドは俺の知っている中でも一人しかいない。

「お久しぶりです、主」

エルファとの距離があと数歩に迫ると彼女は頭を下げてそう挨拶した。

「ああ、久しぶり。どうした？」

エルファがここに来た事はおそらく始めてではないのか。

サラを呼び寄せたからエルファも来るのかと考えていたがその予想は外れ、まだ王都に残って人材を俺の所へ集めていた。

「調子はどうですか？」

「ああ、上々だ」

そう言って当たり障りのない言葉を少し交わす俺とエルファ。

「積もる話もあるからまずは中に入ろう」

ここで立ち話も何なので俺は中に入ることを促したが、エルファは首を振る。

「ええと、主にお伝えしたいことが」

あの冷徹なエルファが珍しく戸惑っているのを見て俺は警戒心を強める。

「百聞は一見に如かずと言います、このお方を見て下さい」

おそらく俺と同じ年代だろう。役所の中から現れたのは腰まである見事な銀色の髪を持つ少女。儂げな印象を醸し出し、純白と言っても差し支えないほど白い肌と相まって次の瞬間には折れてしまいそうな雰囲気だった。

「ひっ！」

俺には誰だから分からなかったが、フィーナは即座に理解したようだ。

口に手を当てて視線も落ち着かなくなっている。

「ま、まさかこのお方は」

レアも目に見えて狼狽する。

「えーと……紹介をお願いしていいか」

俺はこの中でただ一人状況を理解していないので助け船を求める。

すると鮮やかな銀色の髪を持つ少女はツカツカと俺の前まで歩き、目を覗きこんだ。

その底が知れない銀色の瞳で探るように俺をしげしげと観察してくる。

そのまま俺と少女は硬直していたが、先に動いたのは少女の方だった。

視線を外して後ろへ2、3歩下がる。

「へえ、私を見ても動揺の欠片も無い。さすがエルファの好いた男だわ、こんな反応を取った人なんて始めて見た」

アハハ、と何がおかしいのか高い声で笑い始める。

声を上げると一転。先程の儚い印象が霧散し、代わりに狂気そのものの雰囲気彼女から溢れ出してきた。

「エルファ、レア、フィーナ。誰でも良いから彼女が誰なのか教えてくれ」

「このお方は――」

「いいわ、エルファ。私が名乗るから。でもその前に面白い情報をあなたに伝えるわ」

口を開きかけたエルファを制した少女は何が面白いのか畏まって胸に手を当てて話し始めた。

「『ユウキ』ジグサリアス』カザクラ男爵。貴殿は第1王女を暗殺した咎として申し開きの場を開くも欠席したことによりこの咎を認めることとする。よって反逆罪の刑に処する』だって。近くこの都

市に騎士団を差し向けてくるらしいし、他の貴族も呼応しているようだからこのまま無防備だと蹂躪されて終わるんじゃないかしら」

とんでもないことをサラリと言う少女。

王女を暗殺？

申し開きの場を欠席？

始めて聞く単語に俺は混乱する。

「どういうことだ？ 俺はそんな知らせなど聞いた覚えはないぞ、それに第一アイラからその類の情報は上がってきてない」

「そりやそうよ。だって昨日王女が殺されてその日に裁判、そして今日に騎士団を出動させることが決定したのだから。で、あなた達はそんな重大な出来事が迫っているのに呑気に遊んでいた」

あっけらかんとそう言い放つ少女の瞳から喜以外の表情が見当たらない。

「どうしてフォルター宰相とキルマーク騎士団長が手を組んだのかというと彼らは前々から中立を保ち続けるあなた達存在が目障りだったみたい。だからこの機に乗じて協力したのよ」

憎い敵のために手を取り合う、素晴らしいわね。

そう言ってアハハハハと今度は回りながら笑う。

「……一体何が楽しい。そして、お前は何者だ？」

まるで俺の不幸を嘲笑うような態度に俺は目の前の少女に煮えぎ
たる怒りを感じる。

「ああ、凄いわあ。そんな顔も出来たのね」

が、少女は全然堪えていなかった。

「ああ、そう言えば自己紹介がまだだったわね」

少女はそう言って回転を止めてこう言い放つ。

「私の名はシマール国第1王女、ベアトリクスⅡシマールⅡインフ
イニティ。殺されたはずの王女よ」

アハハハハハハハハハハ。

もう楽しくて仕方ないと言う風に目の前の少女——ベアトリクス
は笑っていた。

急転直下（後書き）

ついにベアトリクスが登場。

作者はこのキャラを上手くコントロールできるのか！？

第4章へ入る前に間章へ挟みます。

竜騎士キツカの誕生（前書き）

首輪登場。

異論は受け付けない。

竜騎士キツカの誕生

「予想以上の展開になりましたね」

扉の外で待っていたククルスが嬉しそうにそう言っ
て私を出迎える。

彼女、ククルスⅡフォンテジーは私が冒険者のための学校にある寮で出会い、現在は私の補佐を務めている。

「あれだけの功績を残したキツカお姉さまにあの無能な連中は無下できるわけがありません、必ず吞まざるを得ないと考えていましたが、まさかこちらの要求を全て叶えるとは思いませんでした」

私をお姉さまと呼び慕うククルスは150?に届かない小さな身長や大きな瞳、愛らしい顔つきとフワフワの栗毛から小動物を連想させるけど、中身は結構腹黒く、私以外の人間を陰で罵倒する良くも悪くも小動物と言ったところが私の認識だわ。

しかし。

「いくらあなたでもユウキを馬鹿にするのは許さないわよ」

ククルスの性格の難点は知っているものの、どうしてもこれだけは譲れない。

ユウキがいなければ今の私は存在せず、あの街でゴミを漁っていたのだから。

「う、ごめんなさいお姉さま！ 決してお姉さまの機嫌を損ねたわけじゃなく……」

先ほどの嬉しそうな様子はどこにやら、一転して悲しそうに目を潤ませて平伏すククルス。

「ああ、誤解しないで。私は決してあなたを無下にしたつもりはないのよ」

「しかし……」

私はそう慰めるけど、ククルスの気分は晴れない。

これではククルスが普段通りに動くことができないから私はククルスの耳元に唇を近づけていつもの言葉を囁く。

「私がどれだけあなたを必要としているのかわかるでしょう？ 夜にその証拠を見せてあげるから元気出さない」

「は、はい！ お姉さま。楽しみにしています」

するとククルスはパツと顔を上げ、目を潤まして返事をしたわ。

……うーん。

私のせいでもあるのだけどククルスの百合具合は半端じゃないわね。

こんな性質だけど彼女はそれを補って余りある才能を秘めているから困ったものよ。

輪番制の際にもククルスがいなければ私は総監督時に何をしていいのかわからなかったでしょうね。彼女は人を動かしやすい環境を作るのが得意なのね。

「ああ、お姉さま。今日はどのような行為で私を可愛がってくれるのか。前日の首輪プレイは最高でした」

「……最初の頃の私達が今の光景を見たら卒倒するわね」

うつとりと目を細めるククルスを横目で見ながら私はククルスと出会った当初の頃を思い出しながらそんなことを呟いたわ。

私達の関係はお世辞でも良好な関係でなく、むしろ反発しあっていたのよね。

冒険者の卵として日々教育を受けるのは苦痛だったわ。

いったい何が悲しくて長時間椅子に座らなければならぬのよ。

けれどそれを耐えなければ冒険者になることはできないので、私は必死に耐えていたわ。

それだけなら良かったのだけど、相方である学年首席のククルスが腹の立つこと。

勉強ができない私を軽蔑し、いつも蔑んだ瞳で睥睨してくるのはうっとおしかったわ。

で、その辛さをユウキに手紙を書いて送ったところ、ユウキから大量の薬瓶が送られてきた。

「……ブラッディーX？」

よくわからない薬品の名称をそう読み上げる私。

これまでの座学で冒険者の心得として多数の薬品を学んだ私でさえこのような薬はなかった。

「危ないものなのかしら」

一瞬そう考えたがすぐに否定する。あのユウキが意味もなく送ってくることはありえない。必ず私にとってプラスになるものだ。

「えーと、何々？」

説明書が付随していたので私はそれを読み上げる。

『この薬は成長率を上げる効果と引き換えに副作用が心配されるが気にするな、死にはしない』

「……止めておこうかしら」

どんな副作用が起こるかわからない薬を飲むのはいくら私でも躊躇われるわ。死にはしないとしても体に異変が現れるのだからちよつとねえ。

そこまで考えて苦笑したと同時にククルスが部屋に入ってきた。

そして薬を手を持った私を睥睨して。

「あらあらドーピング？ まあ、そこまでしないと勉強できない人間って哀れよね」

「……」

胸に参考書を抱えて勝ち誇るように言い放ったククルスを見てこのブラッディーXを使用しようと心に決めたことは言うまでもないわ。

始めは飲んでも飲まなくてもそんなに変わらなかったのだけど、日が追うことにその効果がハッキリと見て取れた。

頭が回るといつか、複数の事柄を結びつける作業が容易になりだしたのよね。

そうして私はおちこぼれから天才と呼ばれるようになっていたわ。

と、同時に私の中で燃える様な感情を抱き始めていたわ。

カリスマっていうのかしら。

その衝動のままに言動を行うと周りの人間が先生を含めて私に羨望の目を向けるようになり始めるのよね。

今振り返るとあれが副作用だったのかもしれないわね。

現在では薬なしでもカリスマを発揮できるけど、あの時は未熟だ

ったわ。

まさか学園で革命を起こすなんて思わなかった。

ありえないけど本当なのよ。

若気の至りというか今では反省しているわ。

で、その時に参謀として私の騒動を大きくしたのがククルス。

ククルスは私と接する時間が長かっただけに、忠誠を通り越して依存の域にまで入っていたわ。

落ちこぼれたった私を蔑む様子から尻尾を振るような心酔具合までの変貌を見せられると、どうしても苛めたくなってきた。

……今も続いているけど部屋でククルスに首輪をつけて主従ごっこをやっていたのは内緒よ。

閑話休題

ククルスは勉強だけができる嫌な奴と言う印象だったけどそれは改められた。

あそこまで人を動かすのに長けているのなら鼻持ちになっても仕方ないわね。

とにかく、ククルスが参謀を務めたおかげであそこまで騒動が大きくなり、ククルスが後始末に動いたから私は退学にならず、逆に学園に私の要求のいくつかを認めさせれたわ。

で、本当ならククルスとはそこで終わりだったのだけど、彼女は私についてきたわ。

首席はギルドの幹部候補生として栄誉あるにも関わらずそれを蹴ってまで私に付き従うククルス。

ククルスの意志は固く、翻意を促せないとして妥協案で学年次席がギルドの幹部候補生になったわ。

学園長が送る言葉に「キツカとククルスが在籍したこの3年間は学園で永久に語り継がれることは間違いないのです」と名指しで涙ながらに語っていたのが印象的だったわね。

革命以外にも私とククルスは色々とやらかしたから仕方ないかもね。

「さて、ククルス。竜が住む場所の特定はできているのでしょうかね」

回想はここで終わり。私は頭を切り替えて次の算段について尋ねる。

「は、はいお姉さま。アイラからの情報もあってしっかりと掴んでいます」

ククルスの言葉に頷いた私はリストに載ってあった者の下へ向かったわ。

さあ、憧れの竜に乗れる日はすぐそこにあるのよ。

竜が住むとされる場所は人が踏み入れられない秘境にあると聞いていたけど、本当に前人未到の場所にあるのね。

ジグサールの周辺ほどではないにしろ、ここまで魔物が強く悪路が続く道は容易に人を奥へ進ませないわ。

「皆、ついてきてる？」

人の方向感覚を狂わせる樹海の中、一定時間ごとにそう聞いて回るのだけど誰一人として遅れる者はいない。

さすが幹部や幹部候補生とだけあって体力と精神力は並大抵なものではないわ。

「そろそろ目的地へ着きます。ですのでここら辺りで休息を取るのはどうでしょうか」

ククルスがそう進言してきたので私はそれを取り入れ、皆に休憩を言い渡したわ。

皆疲れているのだけど眼はキラキラと輝いている。

そうでしょうね。

後数時間後には竜と出会い、さらに上手くいけば竜に乗れて大空を飛びまわれるのであればこれまでの苦労など吹き飛ぶでしょう。

「あの……お姉さま、大丈夫でしょうか」

けど、一人だけ例外がいるわ。

ククルスだけは当初から浮かない顔でしきりに私のことを心配してくるのよ。

だから私は安心させるようにククルスの頭をなでる。

「大丈夫よククルス、もし失敗しても私だけが犠牲になるだけだから」

「それが駄目なんです！」

ククルスは通常出さない音量で私を責めた。

「私はお姉さまが全てなんです！ お姉さまがいないのならこの世界は要らない！ お姉さまのためなら全てを敵に回す覚悟はあります」

……正直驚いたわ。

まさかあのククルスがそんなことを宣言するなんて想像できなかった。

私は嬉しく思う反面悲しくもある。

もし私がいなければククルスは今頃ギルドの幹部候補生として片手団扇な生活を送っていたわ。

しかし、薬の作用によって私に依存してしまったからククルスは私の片腕として過酷な場所に身を置かざるを得なくなってしまった。

さすがの私でも多少の罪悪感を感じているのよ。

「死ねないわね」

ククルスを抱き締めながらそう心に誓う私。

おそらくククルスは私が死ぬとすぐにでも後を追ってくる。

ククルスをそうしたのは間違いなく私の責任だ。

ユウキとそしてククルスのため。

私はこの挑戦を必ず成功させなければならないと心に決めた。

樹海が終わり、その先にあるのは渓谷だった。

「……なんというか」

「壮観ですね」

「俺はこの光景を一生忘れないぞ」

後ろに控えている隊員のメンバーが口々にそう呟くのも理解できるわ。

普通竜というのはお目にかかる存在でなく、あったとしても一生に一度あるかないか。

そんな希少な存在が、目に入るだけでも20は下らない光景に出くわせばそんな感嘆が漏れても仕方ないわね。

「さて、ここからは私一人でいいわ」

竜のテリトリーに入る一歩手前で私はそう命令する。

「この内の何人かはククルスを抑えておきなさい。その他の隊員は何があってもここで待機。そしてもし私が死ぬことになれば一目散に逃げなさい。いいわね、ククルス？」

あえて名指しでそう呼ばなければククルスは私についてきただろう。ククルスが何か抗議を上げる前に私は背中を向けて竜の住処へと踏み入れた。

案の定、私が一歩侵入すると近くにいた竜が容赦なく咆哮を上げ、火炎を吹きかけてきた。

「本当にユウキの武器防具は大したものね」

鉄すら燃やし切るプレスを身に受けながらそんな感想を漏らす。

多少熱くは感じるけどその程度よ、我慢できる範囲内だわ。

プレスが効かないと悟った竜は大きな巨体を生かした突進を仕掛けてくる。

「まあ、この程度は予測済み」

韋駄天の魂によって強化された私にはハエが止まるかのような速度に見えてしまう。十分な余裕をもって攻撃を躲した後、手に持った私の身長ほどある風神のドラゴンキラーが生み出す衝撃波を放った。

竜の皮膚は何人も通さないとされているけど、ユウキ特製のドラゴンキラーの前では無意味みたい。軽く振った程度なのに竜の背中には大きな傷跡が作られていたわ。

「下がちなさい！ あなた達では相手にならないわ」

こついうのは気迫がものを言うのよ。

言葉は通じていないと思うけど私の意図は伝わったと思うわ。

そのせいか竜達の唸り声が止み、奥から老竜と呼んでも差し支えないほど皺くちやの竜が姿を現したわ。

「人間よ、我らの地に如何なる用で参った？」

何これ？ 直接頭に響いてくるのだけど。

「テレパシーと言うものじゃ。エルフなど高等生物が使う一種の意思疎通手段じゃな」

へえ、便利なものね。私にも使えないかしら。

「先ほどにも言ったであろう。テレパシーが使えるのは高等生物の

みじゃ』

ふーん、そう。まあ使えないのなら仕方ないわ、どうしてもほしいものじゃないし。

『お主は変わっておるのお。ここまで蔑んでも感情に起伏は見られん』

と、そこで老竜は私のことをまじまじと見つめてきたわ。

その年齢を重ねた瞳で見つめられると私の全てを見透かされそうで不快ね。

『ふむ……キツカというのか。そして竜を従えにここまで来たと』

私は何も話していないのによく分かったわね。

『お主が何を想い、何を考えているか。100も生きられぬ人の考えなど手に取るように分かる』

まあ、別にいいけど。知られたからと言って減るもんじゃないし。

「で、どうするの？ 私の要求はただ一つ、従うか否か」

『その答えはすでに分かっておろう。我らは人に頭を下げることでない』

「ふっん、そう。なら力づくで従えさせるしかないけどそれでも良い？」

私は手に持ったドラゴンキラーをコツコツと叩きながらそう言い放つ。私の挑発的な物言いに他の竜達が騒ぎ始めたわ。

「まあ、あんた達が戦うのなら別にいいけど。こう言うては何だけどおそらくあんた達は私に触れることすらできずに全滅するわよ」

ユウキの作った装備を舐めないでちょうだい。大陸最高の腕前を持つユウキ。カザクラの名は伊達じゃないわよ。

『鎮まれ！ 馬鹿者！』

氣勢を上げていた若い竜達を一喝する老竜。

『確かに、お主の力量はわしらのそれを大きく超えておる。おそろくわしら全員でかかったとしても、後に残るのは我が同胞の亡骸じやろうな』

へえ、よく分かっているじゃない。

『お主が親と仰ぐユウキ。ジグサリアス。カザクラと会わせてほしい。彼の態度次第でわしらは誇りか服従かを選ぶ』

まあ、妥当な提案ね。

いくら何でも突然現れて「従え」なんて無茶な注文だから仕方ないかもしれないわ。

「お姉さま」

交渉？ を終えた私は隊員が待機している場所に引き返すとククルスが涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら私に抱きついてきたわ。

「ちょ、ちよつとククルス？ いくら何でもこの場でこれは不味いんじゃない！？」

仮にも私とククルスは上司で見ている隊員は部下よ。部下にこんな様を見せて良い訳はないわ。

すると隊員は苦笑しながら。

「2人が禁断な関係にあるということはもちろんわかってはいます。けど、安心してください。だからと言って自分達がキツカ隊長とククルス副隊長を軽蔑することはありません」

むしろこれがあるから自分達はあなた達についていくのです、と言われて私は何とも言えない気分になるわ。

…… 本当にこの人選で良かったのかしら

「良かったですね、私達は公認です」

ククルスのそのセリフに私は頭を抱えたのは言うまでもないわね。

後日

めでたく私達の部隊32人は全員竜騎兵として大空を駆け回るこ

とできたわ。

ユウキ曰く「突然竜が現れ、訳も分からず問答が開始されて驚いた。交渉の末、キツカが生きている限り我が同胞32体を貸し出すということを決着がついたぞ」とのこと。

つまり私が死ぬと自然と竜騎兵は壊滅してしまうのよね。

だったらなおさら死ねないわ。

大空を飛びながら私はそんなことを考える。

『グルル、小娘よ。長老の命で仕方なく従っているが俺はこの背中につけられた傷を忘れていないぞ』

そう唸り声を上げるのは前回私に攻撃を仕掛けてきたあの竜。血気盛んで喧嘩っ早いけどその分実力はあの竜の里で一番らしい。老竜はその竜が訳もなく無力化されたのを見て私には敵わないと見たらしい。

「分かっているわよ。だからそんなに威嚇しないのギール」

ギールというのは私がつけた名前。これから一蓮托生なのだから名前ぐらいは必要かなと思ってつけたのよ。

ギールは嫌がっているけど満更ではないみたい。

だって名前を呼ぶと僅かに首が動くのだから。

「さあ、訓練を始めるわよ！ 全員！ 竜に感謝の心を忘れず気を引

き締めるように！」

手に持った竜骨の槍を天に掲げ、私はそう宣言したわ。

妖刀アイラの鞘（前書き）

2011/11/30

話を大幅変更しました。

妖刀アイラの鞘

「今日はここまで！ 皆もアイラのように精進するように！」

教官の号令と共に本日の訓練が終わる。

今日は短刀を使った内容で、得意分野である弓矢ではなかったけど難なく一番を取れた。

ここはレンジャーを育成するための専門学校で私は2年目に突入したわ。

あらゆる職種の中で最も死と隣り合わせとされているレンジャーのための学校よ。

そのせいか入学してくる生徒も浮ついた雰囲気を持つ者が少なく、どちらかというと復讐や妄念に凝り固まった子供が多い。

「……またやられているわね」

部屋に戻った私はその惨状に溜息を吐く。

私の私物は全て部屋にぶちまけられ、足の踏み場の無いほど散らかっているわ。

全く、こんな姑息な手段を使うとか本当に陰険な輩が多いこと。

そんなに私が憎たらしいのなら実力で示せばいいのに。

自室の掃除を簡単に終えた私は備え付けのベッドに横になりながらそんなことを考える。

ここに入る人間は大体協調性がゼロなので部屋は個人に与えられ、調理台や不浄場も付いていた。

「ああ、早くユウキ様のお傍に参りたい」

最近は何でも覚めてもそんなことを考える。

あのスラムから私達を引っ張り上げてくれたユウキ様。

私達のどんなに無茶なお願いにも快く叶えてくれるユウキ様。

私は親というものがどんな者なのか知らないけど、多分あんな感じなのだろう。

「少し疲れたわね」

今日の訓練は激しかったせいかな普段は感じない眠気が襲ってくる。

「10分だけ眠ろうかしら」

そう決めた私はベッドから起きて立ちあがり、壁にもたれながら目を閉じた。

こうすると寝過ぎないで済むからちょうど良い。

起きた後は本格的に部屋の片づけでもしましょうか。

そこまで考えた私は心地よい睡魔に意識を手放した。

次の日

朝食を済ませた私は座学のため教室へと向かう。

まだ早い時間なので教室には人が少なく、まばらしかない。

「あ、アイラだ」

そう声を上げて近寄ってくるのは2位に位置付けているオーラ
ユクリエス。

レンジャー志望には珍しく活発な性格で誰にでも声を掛ける人よ。

その気さくな性格から変人揃いであるこの学校でも人気がある。

確か前も誰かに告白されたと言っていたわね。

まあ、ユウキ様と関係ないからどうでもいいけど。

「また孤立しているね、本当に辛い？」

彼女は何が楽しいのかいつもそうやって私に声をかけてくる。

全く、本当にうっとおしい。

「……全然」

だから私はそっけなく答え、追い払うように手を振るのだけども
ーラは全然堪えない。

むしろ。

「嘘付かないでよ、あれだけ邪険にされて辛いわけじゃないじゃないか」

そう私を心配してくる毎日。

本当に邪魔よ。

私は天を仰ぎながらそんなことを考えていたわ。

「ウフフフフフフ」

「あ、アイラ？ 少し怖いよ」

隣のオーラが私を気味悪がるけど、どうでもいい。

何故なら次の課題が申告した人間をしばらくの間張り付くという
ものだからよ。

張り付く人間はもちろんユウキ様。

しばらく会えなかった分、しっかりと守らせてもらうわ。

ついでに害虫駆除も行おうかしらね。

オーラどころか教官さえも私に引いている様子を睥睨しながら私は心に決めたわ。

ユウキ様の屋敷の中で私は倒れていたわ。

「く……カハッ」

腹の底からせり上がってくる嘔吐感と闘いながら私は楽になるために体を丸める。

迂闊だった。

あのメイドの力量を見誤っていた。

ユウキ様に付き纏っているサラとかいう小娘は百歩譲って許すとしても、あのユウキ様を罵倒し責め立てると言う万死に値する言動を取るあのメイドだけは許せず、怒りのままに矢に向けた結果が今の様よ。

あのメイドにボウガンを構え、隙が出るまで張り付いた先に隙が出来たので私はその一瞬を逃さず矢を放った。

タイミングも完璧、軌道も問題無い。

私は仕留めたと感じた瞬間、あのメイドは首をこちらに向けて難なく矢を回避した。

失敗したらその場から逃げるのが基本。

それに忠実に従った私なのだけど、あのメイドにあっけなく追い詰められてしまった。

「まだまだひよっこですね」

私の鳩尾に膝を叩きこみながらそう教えることから、あのメイドは始めから狙われていたのを知っていたのでは。

そのために逃げるのが困難な場所にまで私を誘導してわざと隙を見せたのでは。

私は掌の上で転がされていた事実には気が付き、二重の意味で悔いていたわ。

力が欲しい。

私は強烈に力を求めたわ。

だから私はユウキ様にどうすれば力を付けられるのか手紙を送ってみると数日後に小包が届いたわ。

その小包の中に収められていたのはブラッディーX——飲んだ人間の潜在能力を引き出す薬よ。

副作用の心配があるから異変を感じたらすぐに服用を辞めるよう

にと警告文があっただけ私は気にしない。

力を得られるのなら私は全てを差し出すつもりだったわ。

その薬を飲み始めてから1ヶ月。

私は同級生から化け物と畏怖されるようになったわ。

飲み始める前も化け物じみていたけど、今では正真正銘の怪物だと。

教官ですら私に敵う者はいないまでになったわ。

でも、私の心は晴れない。

どれだけ称賛されようと畏怖されようと私の心は高鳴らない。

何故なら、私はまだ勝っていないから。

これまで何度も挑戦したけどあのメイドは私を苦もなくあしらう。

あのメイドと私の差は何なのか。

どうして敵わないのかずっと考える日々だったわ。

「アイラ、最近どうしたの？ とても怖いよ」

あなたは……確かオーラだったわね。どうでもいいから名前を忘

れかけちゃった。

あの薬を飲み始めてから酷く記憶が曖昧になってきちゃったのよね。

もちろん昨日食べた物とか授業で習った内容については逆に怖くなるくらい鮮明に覚えているのだけど、人の顔と名前が全然一致しなくなっちゃったのよ。

まあ、ユウキ様のことと全然関係ないから忘れても良い記憶なんだけどね。

そうこうしている内に授業が始まり、教官が講義を始めたわ。

すでに頭に入っている内容なので聞き流していたけど、途中で脱線した話に興味深い内容があった。

「狩人は見える罾と見えない罾の2段仕掛け行います。見える罾を回避したからといって油断していると獲物は見えない罾に絡め捕られます」

「これよ!」

突如私は電流に打たれたような天啓が閃いたわ。

これでようやくあのメイドを排除できる。

心の中から高ぶる歓喜に私は周りの奇異な視線などどうでもよかつたわ。

「こんにちは、オーラ」

あの金髪のボブカットと少し小さい瞳は確かオーラだった気がする。

「アイラ、どうしたの？ 私の部屋に」

突然現れた私に狼狽するオーラ。それはそうでしょう。

私が誰かの部屋を訪れるなんて初めてなのだから。

「少し聞きたいことがあってね……オーラ、あなたが私を苛めていた黒幕だったのでしょうか」

そう言い放つとオーラはビシリと顔を硬直させる。

「アハハ、いきなり現われて何を言っているのかな。私がアイラを苛める？ そんなわけないじゃないか」

ふうん、まだしらばっくれるのね。証拠も上がっているのに。

「オーラ。あなたのやり口は見事だった。私でさえ最初は無関係だと思っていたのよ」

オーラは直接手を下さず、間接的に情報を小出しすることで痕跡を残さず陰湿に私を責めていた。

「けど、あなたやり過ぎたわね。いくらばれにくくとも、何度も使

用すればボロが出てくるのよ」

「1つ1つだと分からなくとも、数が揃えばパターンというものが浮かび上がってくる。」

そのパターンというのは個人個人が持つ特有の匂いの様な物。

それを辿っていけば自然と真犯人へ辿り着くのよ。

「そんなに否定するのなら証人でも連れて来ましょうか？ ジェーンやキャシーが自白したわよ」

名前は確かこうであっていたはず。全く、本当に人の名前を覚える能力が低下しているわね。

そこまで問い詰めるとオーラは俯いたまま顔を上げなかったわ。

そしてそのまましばらく時間が過ぎた後、顔を上げてこれまで溜まっていたものを吐き出し始める。

「どれだけ頑張っても私はいつも2番。私は1番でいたいのに！ アイラがいるから私が1番になることを許なかったのよ！」

オーラは優等生の仮面を投げ捨ててそう叫ぶわ。

目を血走らせて恥も外聞もなく喚く姿はいつもの姿とは程遠いわね。

私はオーラの気が済むまで何も反論せず思うがまま叫ばしてやったわ。

「……私をどうするの？」

全てを吐き終え、息を切らしながら私にそう問いてくるわ。

「この事実を公表して私を除け者にする？ 別にそれでも良いわ。私は負けちゃったんだもの」

諦め、蚊の鳴く様な声でそう呟くオーラ。

ふむ、もう良い頃かしら。

「それじゃあ一つお願いを聞いてもらおうかしら」

オーラが頷いたのを確認した私はこれからの計画について話したわ。

私はオーラとともにユウキ様の屋敷へ赴いたわ。

「ね、ねえ。本当にやるの？」

オーラは初めて経験することなのか声音が震えている。

「大丈夫よ、先程も言った通りあなたは囷よ。奴の注意を引き付けてくれればそれで良いわ」

あのメイドがオーラを相手にした直後にこの矢を放てばいくら化け物でも反応できまい。

これでようやくユウキ様に平穏を与えることが出来る。

そう考えた私は逸る気持ちを抑えてじっとその瞬間を待ち続けたわ。

「……ねえアイラ。彼女って何者？」

「化け物よ」

私は吐き捨てる様にそう言い放つ。

「アハハ、化け物が誰かを化け物と呼ぶかあ」

オーラは何が楽しいのか廊下に転がったまま笑い始めたわ。

襲撃は見事に失敗したわね。

一応弁護しておくけどオーラは相当な体術と短剣の使い手よ。

ブラッディーXを飲み始めた私でもオーラと組み手を行えば結構手こずらさせられるわね。

そして私はあれから弓矢の技量も磨き、獣にすら気取られないほど殺気を抑えることが出来るようになったわ。

なのに完敗。

不意を突いたにも関わらずオーラは一瞬で無力化され、その数分後には私も廊下に伏していたわ。

私は痛む体に鞭を打ち、壁にすがりながらも何とか立ち上がる。

「……オーラ、もう良いわ。私を虐めたことは金輪際口にしないから。と、いうより私はこれから先あなたの前に顔を出さない」

「どういうこと？」

「決まっているでしょう、私はもう学校を辞める。これ以上あそこで学ぶべきことはないわ」

知識も技能も吸収した。

教官も全て倒した。

ならもう学校にいる必要はどこにもない。

「……それでどうするの？」

「奴に弟子入りする」

もう決定している。

おそらく学校で学べる技量では奴に敵わない。

そうならば学校に通う意味はないに決まっているじゃない。

「おめでとうオーラ、これであなたは一番になれるわ。精々楽しい

学園ライフを送っていなさい」

これ以上話すことはない。

だから私はオーラに背を向けて奴を探し始めたのだけど。

「……何をしているの？」

オーラは私の袖を引っ張って行かせないようにする。

「何か言いたいことでもあるの」

うつとおしいと感じながらも私は真意を問いただと、オーラは口を開けてポツリポツリと語り始めたわ。

「私も連れて行って」

「は？」

突然そんなことを言いだしたオーラを私はマジマジと見つめる中、オーラは続ける。

「私は井の中の蛙だということを思い知ったわ。あんた達のような存在を知っちゃったら学校で一番になっても満足できない。いえ、むしろよけい惨めになるだけよ」

オーラの決意は固いようです。

何が何でもついていくという気概が満ち溢れています。

「はあ、分かったわ。そんなに言うなら私も手助けしてあげる」

私はため息をついてオーラの願いを聞くことにしました。

「ん？ どういうこと？」

オーラが首を傾げたので私はブラッディーXについて話し始めました。

「なるほど、あれがあつたからアイラは常軌を逸し始めたのね」

あれを境に私が変化したのを感じ取っていたのでしよう。

「それを飲めば私もアイラ並みの強さを手に入れることが出来るのかしら」

「その可能性は限りなく高いけどお勧めしないわ。何せ強烈な副作用があるのよ。例えば私は感情が希薄になったわ。オーラもそう、それを飲めば心身に何らかの異変が現れる。もしかすると別人格に変貌してしまうかもしれないわ」

「構わないわ」

オーラは躊躇もなく答える。

「一番になれるのなら、強くなれるのならそれぐらい構わないわ」

オーラは瞳に決意の光を浮かべている様子から叛意を促すことをもう不可能でしょう。

私は手を差し伸べました。

「改めてよろしく、オーラユクエリス」

するとオーラも笑顔で手に取って握り返してきます。

「こちらこそよろしく、アイラカザクラ」

お互い手に力を込めた瞬間、私は久しぶりに心から笑いが込み上げました。

「また私の侵入を許しました。一体あなた達は何の訓練を受けてきたのですか？」

私は定例会議の警備担当をしている者達を弾劾します。

彼らは申し訳なさそうに恐縮していますがそれで済まされると思っ
ているのでしょうか。もし万が一が起きれば彼らは生かしておけ
ませんよ。

もう少し彼らにそのことを理解させようと思い、さらに責めよう
と口を開きました。

「もうそれくらいにしておけば、アイラ」

「オーラ……」

呆れ調子のオーラがそう言いながら私の隣に立ちました。

諜報部隊副主任——オーラ「ユクエリス

装備

武器

デモンズダガー

50%の確率で即死

防具

闇夜のマント

闇を生み出す

頭

影の帽子

光を吸収する

足

盗賊の靴

AGL上昇 足音を消す

装飾品

梟の瞳

隠れている敵を見つける

ステータス

小剣

67

素手

66

隠密

79

魅了

72

支配

67

2人揃って学校を辞めた私達はそのままエルファ様に弟子入りを志願しました。

エルファ様も何か思う所があったのかユウキ様に私達のことを知らされないことを条件に私達を受け入れ、エルファ様の手足として動いていました。

で、オーラにも私が飲んだブラッディXを施したところ、彼女は私と同じく技能が飛躍的に増大しましたが代償として。

「何かもう慣れたけど人を見上げるってしんどいわ」

オーラ曰く「私が8歳の頃とそっくりね」と言う通り幼児へと体

が退行してしまいました。しかし、体は幼女にも拘らず体力も技能も成人のそれと変わらないことからオーラ自身はあまり気にしていないようです。

…… 本当にブラッディXは摩訶不思議な薬です。

で、そのオーラが腰に手をを当てて私に説教を始めました。

「あなたはもう少し自分の力量というものを鑑みなさい。あなたが本気を出せば侵入を防げるのはエルファ様が私しかないわ」

確かにその通りです、私を止めた者は今の所オーラしかいません。

「ほら、あなた達は行っても良いわよ。各自反省をしておくように」

オーラは私が一言も話さない内に勝手に解散を宣言しました。

「相変わらずユウキ男爵一筋ね」

残るのは私とオーラの2人だけになった時、オーラが感嘆とも呆れとも似付かない声を出します。

「皆がアイラと同じなわけないんだからもう少し加減しなさい」

「慰めるのはオーラの役目です。適当な所になれば止めてくれるから私は加減しなくてもいいでしょう」

「まあ、その通りだけど」

私の言葉にオーラは苦笑してしまいます。

信じられないかもしれませんがオーラは私の一番の理解者となりました。

エルファ様の下で共に過ごした仲故なのでしょうが、オーラと私はお互いの好みから行動、昨日何をしていたかまで全てを知っています。

余談ですがオーラと深い仲になって以降物忘れが止まり、今では感情を消したい時に消せるようになるまでコントロールすることが出来るようになりました。

具体的にはユウキ様の単語が出てきても感情を消すことによって相手の挑発に乗らなくなりました。

……オーラとの組み手ではそこを攻められて負け続けでしたからね。

「ユウキ男爵が大切なのは分かるけど、そこをつかれて熱くなるようじゃ駄目よ」

と、何度もオーラから注意されました。

「彼らの元へ行くのですか」

オーラはしばらく私と談笑した後踵を返します。

「ええ、アイラの折檻が原因で彼らが委縮してもらっては困るからね。彼らはあれでも将来有望の人材よ、フォローは必要でしょ？」

オーラはそう言って手を振りながらその場を後にしました。

「さて、私は情報確認でも行いましょうか」

残された私はこの国に散らばらせた多くの間諜が集めてきた情報を確認しに部屋へ向かいました。

妖刀アイラの鞘（後書き）

苛めっ子と苛められっ子の関係から親友へ。

その辺りをテーマとして書いたのですが、締まらない内容になりました。

うーん、何がいけないのかなあ。

魔女と呼ばれたユキ（前書き）

今回は短めです。

いや、キツカとアイラが濃すぎたと言っべきか……

魔女と呼ばれたユキ

魔道騎士団団長——ユキカザクラ

それが今の私の肩書。

キツ力率いる竜騎兵軍団には敵わないけど、それでも戦の花形として持て囃される存在だ。

今振り返れば本当に色々なことがあったと思う。

あの時、私がユウキからパンを奪わなければ今頃はただのユキとして過ごしていたのかもしれない。

「どうしたんだい？ 団長」

どうやら深く考え事をしていたみたい。

魔法学園時代からの知り合いであるミアカヤストウィッチングアルレシアが私の目を覗き込んで心配そうに言った。

彼女はミドルネームがある通り貴族で由緒正しいヴァルレシア侯爵の長女だ。

身長ははすらりと長く、ボーイッシュな顔立ちで金色の髪を肩まで切り揃えている。気さくで活動的なのはキツカと一緒だけど、ミアはその動作の一つ一つに気品が溢れているのが大きな違い。

何をしてても絵になるというのはミアのみが持つ才能だろう。

「気分が悪くなったのなら言ってくれよ、ボクはユキが心配なんだから」

その男勝りな口調なのは親が自分を男のように育てた結果だと言っていたつけ。

学園時代からその口調と容姿が相まって王子様と呼ばれ、男子よりも女子からの告白が多いという難儀な人だった。ミアは「可愛い物を愛するのは好きだけど百合百合しい雰囲気はねえ……」とよく苦笑していたのを覚えている。

そんなに嫌なら態度と口調を改めればいいのに思っているのだけど、ミアは幼少の頃からこれで通していたからついつい出てしまうらしい。

閑話休題

私は魔法学園の生徒会長だったが、それはミアの尽力が大きい。彼女が私を全面的に支援したから私は生徒会長になれた。

で、それだけならよかったのだけど、何故かミアも副会長に立候補していた。

「やっぱりユキ一人にそんな重責を背負わせるわけにはいかないからね」

ミアはそう嘯いていたけど、実際は私と一緒にいたかったんでしよう。

私を生徒会長に推薦したのは他ならぬミアだし。

でもまあ、本当によく生徒会長として1年間勤めきれたと思う。

選民主義に凝り固まった魔法学園において史上初の市民での生徒会長になった私は、それはもう酷い仕打ちを受けた。

苦情や弾劾は当たり前。酷い時には私の命令に従えないと学園事業をボイコットされかかっていた。

生徒会長を辞めたかったけど、今度は市民出の教師陣から辞めないでくれと懇願される始末。

八方ふさがりになったこの状況をどう打開すればいいのかわからなかった私はユウキに手紙を送ると、後日に大量の薬瓶が送られてきた。

「……ブラッディーX？」

聞いたことのない薬品だ。色は真っ黒で毒々しく、私の本能がそれは危険だと訴えていたと思う。

だって説明文を見ると。

『これを飲むと潜在能力を解放つ代わりに人間が終わっていく副作用があるから気を付けるように』

……人間が終わるって何？ 相当碌でもない未来しか思い浮かばない。

「……けど、これしかない」

今のままだと私は貴族からの非難と生徒会長としての責任から壊れてしまう。

全てを失うくらいなら人間を失った方がまだ活路があるのかもしれない。

そう考えた私は覚悟を決めてそれを口に含んだ。

「ユキ、ボクはたまに君がとんでもなく恐ろしく見えるよ」

冷や汗交じりにそう呟くのは生徒会室で仕事をしているミア。会計や書記等の3人はまだ来ていない。

「それはボクも彼らがうつとおしいと感じていたさ。いなくなっても構わないとまで思っていた。けど、実際に退学させることはないんじゃない？」

「……私から逃げる？」

小首を傾げてそう尋ねるとミアは首をぶんぶんと振る。

「いや、ここまで来たらもう引き返せない。リーンやルナ、イータと同じ様に最後まで共にいるよ……何故なら——」

苦笑しながらミアは続けて。

「『魔女』に意見を述べられる立場を捨てようなんて思わないね」

魔女——そう、私はそう呼ばれていた。

あの薬を飲んで最も変わった点といえば悪知恵が回るようになったことだろう。

人を眺めているだけで、私はその人を貶めるにはどのようなことをすればいいのかを瞬間的に閃くようになった。

私は生徒会長としての権限とミアの人脈をフルに使い、敵対する生徒を社会的に抹殺していった。

ある者は原因不明の暴行に会い、ある者は女子の下着を盗んだとして学園を去っていった数は30人に上り、その中には教師も含まれている。

学園の皆はそれが私の謀略によるものだということが周知の事実。

しかし、そこまで畏怖されているにも拘らず私の評判はすこぶる良い。

それはそのはずで追放した生徒は学園の問題児ばかりであり、彼らがいなくなったことで学園内に類を見ないくらい平和な時が訪れているからだ。

彼らが消える前に必ず生徒会役員からの忠告があるのも大きい。

生徒会役員に逆らわなければ魔女に目を付けられることはない。

それが魔法学園全生徒の共通意見だった。

そんなわけで私は見事１年間生徒会長を務め上げることができた。

私の代の生徒会交代式は他と違って惜別の他に安堵が加わって教師を含む全員が泣いていたっけ。

……まあ、やりすぎてしまったのは認めるしかない。

で、そこでミアと別れたのだけど、すぐに出会うことになる。

ユウキが創設する魔道騎士団の団員を集めてほしいと言われ、私はまずミアのもとへ向かった。

キツ力達以外で最も長く接していたのはミアだったので彼女以外の副団長はいないとまで考えている。

案の定、ミアは２つ返事でOKを貰った。

けど、ここで問題が一つ。

ミアはヴァルレシア侯爵の跡取りなのでおいそれと抜けるわけにはいかない。

事実ヴァルレシア家の当主は首を縦に振らなかった。

「どつする、ユキ？」

さすがのミアも不安げな様子で私に尋ねるけど、私はなぜ無理だと感じているのかわからなかった。

私は魔女と畏れられた謀略の使い手。

綺麗な身の生徒ならともかく叩けば埃が出る貴族に要求を吞ませることは造作もない。

私は早速行動に移すためアイラに連絡を取った。

ヴァルレシア家の当主が快くミアを送り出したので、私は次に誰を誘うべきかミアと相談する。

「うーん、そうだなあ……生徒会役員の3人は加えるとして、他は調べてみるから少し時間をくれないか？」

火急の用事じゃないので急ぐ必要はどこにもないから頷くことにする。

「うん、ありがとう。シマール国最強の魔道騎士団の創設のために人材を選びすぐってみるよ。だから交渉はユキに任せる」

名門出かつ社交的な性格のミアは私と比べ物にならないくらい交友関係が広いのでこういう時は頼りになる。

軍の花形である魔道騎士団。

ユウキの期待に応えるためにも私は頑張らないといけないなと心に決めた。

後日――魔道騎士団総数50名をユウキの前に連れて行くことができたわ。

魔女と呼ばれたユキ（後書き）

次はクロス。

ブラッディーXの副作用はどうしよう？

クロス将軍（前書き）

とりあえず判明したことは自分に恋話など無理ということでした。

クロス將軍

「全体！ 整列！」

僕の隣に控えている副官がそう激励を飛ばすと眼前に控えていた3万に上る兵が一糸乱れずに統率を取る。

今は合同練習の最中。

全兵のうち3分の1を動員して行われるこの訓練は文官は勿論のことキツカやユキ、アイラやユウキも見に来るので決して無様な真似を見せることは出来なかった。

「右へ習え！」

ザッザと足音を鳴らして全員が右を向く。

「各隊に分かれよ！」

その指示を受けてからわずか5分後には綺麗な長方形が10個出来ていた。

「魚鱗の陣！」

次から次へと出される命令に兵達は混乱することもなく所定の位置へ着いていく。100人や200人ならともかく3万の兵が生き物の如く動くというのは生半なことでは出来ないよ。

これはユウキが取り入れた公共事業による全体訓練の成果である

し、もう一つは。

「さすがレオナ教官ですね」

僕は右に控えている副官に向かって小声で称賛した。

するとレオナ教官は唇を僅かに綻ばせ。

「いえ。私は命令しただけであり、兵がここまで動いてくれるのはクロス将軍の人望です」

と謙遜するのは元僕の教官で今は副官の女性——レオナ「カリスリン」。

レオナ教官はどんな暑い日でも礼服に身を包んでいることで有名だ。

とある事情で右目を失って眼帯をし、左目はその分鋭い光を放っている。年は20代前半で身長は180cmを超えるであろう長身と腰まで伸びた金髪ストレート。人形の様な整った顔立ち、そしてレオナ教官の最大の特徴である制服越しから盛り上がる胸があるせいでどんなに罵倒されようと僕他の候補生は喜んでいたのを覚えてる。

ちなみに僕の身長は2mを超えている。

「レオナ教官、僕と話す時の敬語は何かありませんか？ 肌がむず痒く感じます」

「何を言う。上司であるクロス将軍に普段通りの言動をとれば軍の

規律に違反するだろう」

レオナ教官は大真面目でそう反論する。

「それに私のことを教官と呼ぶのは止める。私はクロス將軍の部下なのだからレオナと呼び捨てにするのだ」

「やっぱり厳しいなあ」

変わらないレオナ教官に僕は苦笑せざるを得なかった。

「私の目に狂いはなかった」

残った左目に感慨の色を浮かべながらそんなことを呟くレオナ教官。

すでに訓練が終わり、ユウキ達は引き揚げている。

隊長クラスとの反省会も終わって、この会議室には僕とレオナ教官しかいなかった。

「始めてクロス將軍を見た時からお前は将来大物になると直感し、例外的に幹部候補生の訓練を受けさせたことは正しかったと思う」

「僕はあれで何度も死にかけましたけどね」

あれは辛かった。僕は同年代と比べて体や力が大きいとはいえまだ13歳。

そんな僕が20歳以上の正騎士が受ける訓練に参加すること自体が無謀だった。

それだけでも辛いのにレオナ教官は僕にだけ厳しく当たる始末。

何回腕立て伏せをしたのかも覚えていないや。

ユウキから貰ったブラッディーXが無ければ多分死んでいたと思う。

あの薬を飲むと血が沸騰したような高揚感と共に力が溢れてくる代わりに少し思い切りの良い性格になるんだよね。

「おかげで少し性格が変わりましたよ」

「フッフ、許せ。しかし、あの地獄を超えたからこそ今のお前がある。お前が率いるジグサル騎士団はシマール国で最強だ、近隣諸国と比べてもお前の騎士団には敵わない。これは王国騎士団元第二部隊の隊長だった私が保証する」

レオナ教官はその天才的な用兵術でエリート部隊である王国騎士団の部隊長を務めていた。彼女の指揮する部隊は精鋭と呼ばれ、どんな困難な状況でも必ず任務を達成することでも有名人だった。

「まあ、そんな輝かしい経歴を持つ私でもヘマはするものだ」

レオナ教官はそう言って影を落としたので僕は慌ててフォローする。

「そんなに落ち込まないで下さい！ あれは国が悪いのです。ユリカール子爵の反乱を鎮めるために1000の兵を連れ添ったそうですが相手は倍の2000で、さらに城に立て籠もられている状況で勝てと言うのは無謀です」

信念を通すレオナ教官は兵達に親しまれ、騎士団の中で最も人気があったためそれを妬んだキルマーク騎士団長が仕掛けたのがその謀略だ。

結果は当然の如く失敗する。

多数の兵の命を散らし、国の名誉を落としたとしてレオナ教官は幹部候補生のお目付け役に左遷された。

「ああ、ありがとう。けどな、失敗したのは事実なんだよ。どれだけ言い繕っても死んだ部下は帰ってこないんだ」

レオナ教官はそう言って右目の眼帯に手を添える。

その傷はユリカール子爵の鎮圧に失敗し、撤退している際に飛んできた流れ矢によってつけられたものらしい。

任務に失敗し、部下を失い、さらに自身の目も失って追い打ちとばかりに名誉も失ったレオナ教官がどんなことを考えているのか僕には分らない。

「教官、僕はキルマーク騎士団長が許せない」

だからこそ、僕はレオナ教官をこの立場に追いやったキルマーク騎士団長を憎む。

「もし戦うことがあれば刺し違えても奴を葬り去ります」

それしか僕には出来ない。」

だからそう力強く宣言することでレオナ教官を元気づけようとした。

するとレオナ教官は少し目を瞬いて僕を見、次にゆっくりと笑みの形を作る。

「その言葉は嬉しいが私はお前に死んでほしくないな。どこの世界に愛する人間の屍を見たいと思う？」

「いや、それはまあ……」

突然愛する人間とか言われて戸惑っても仕方ないと僕は思う。

そう慌てふためいている隙にレオナ教官は僕の隣まで近寄り、もたれかかってきた。フワリとしたレオナ教官の匂いが鼻腔に広がる。

「きよ、教官!？」

「今は教官じゃない、レオナだ。クロスの恋人としてのレオナだ」

「そ、そうか……れ、レオナ」

僕がたどたどしくそう呼ぶとレオナ教官はクスクスと肩を揺らして。

「何だ、今の君はヘタレモードだな。剣を持った際に見せるあの君はどこにいる？」

その言葉に僕の顔が引き攣る。

ブラッディXの副作用というかあれを飲んだおかげで力は付いたものの剣を握ると少しだけ気が大きくなってしまうんだ。

「私に告白して振られた際、野獣のように無理矢理私を求めたあのクロスはどこに行ったのかな？」

「きよ、教官!？」

黒歴史を掘り起こされて僕は慌てる。

いつの間にかレオナ教官に恋心を抱き、意を決して告白したのは良いけどにべもなく振られた時のこと。

僕は剣を握っていないにも拘らず狂暴になってしまい、衝動のままにレオナ教官を求めてしまった過去がある。

「今振り返るとお前は殺されても文句は言えなかったな」

「それは、まあその通りです」

上司に恋心を抱き、それどころか無理矢理求めると言うのは極刑になってもおかしくない。

「まあ過ぎたことだ。キツカケはあれだったが、今はお互い恋人同士。終わり良ければ全て良しだ」

そう言ってカラリと笑うレオナ教官は本当に器が大きいと思う。

僕じゃ釣り合わないと思ってしまっただ。

そんなことを考えていると急に僕の唇が塞がれる。

驚く僕の眼前にレオナ教官の瞳が全く揺れずに僕を見据えていた。

しばらくの間、そのままの時が過ぎる。

ようやく唇を離れたレオナ教官は普段とは違う震える口調で語りかけてきた。

「なあクロス。私は怖いんだよ。部下も名誉も何もかも失った私が今ではお前が傍にいて、さらに最高の騎士団を率いている事実が怖いんだよ。こんな幸せがあつて良いのか、いつ失ってしまうのかを考えると怖くて仕方ないんだよ」

レオナ教官から漏れる弱音を聞いて僕は胸が締め付けられる思いがする。

レオナ教官も人の子だ。

人なのだから完璧なわけがない。

「……ごめんね」

だからポツリと僕は謝罪を口にする。

「僕はレオナのことを疑っていた。レオナの器があまりに大きいから釣り合わないと思っていた。本当にごめん」

僕は精一杯謝罪したつもりなのだが、レオナ教官は僕の様子を見て噴き出した。

「ハハハ、何を言ってるんだ。私よりお前の方が器が大きいぞ……全く、本当に今のお前はヘタレモードだな。あの野獣モードのお前はどこに行った？ 私はあの本能丸出しで求めるあっちの方が好みだぞ」

「き、教官!？」

今までの雰囲気はどこにやら。急にレオナ教官は元氣を取り戻してそんなことを言い始める。

「教官でないレオナだ。安心しろ、冗談だ。私は今のお前も好きだぞ」

「……本当に教官は冗談が多いですね。あの鬼教官とどっちが本当なんですか？」

「どちらかというと私はこっちの性格だ、出来れば1日中冗談を言っただけでいいくらいだ……しかし」

そう言っただけでカラカラと笑っていたレオナ教官だけど急に笑いを引締め、代わりに妖艶な雰囲気を醸し始める。

「ここから先は冗談でないぞ」

レオナ教官は自分の軍服に手を掛けてゆっくりと脱ぎ始めた。

クロス将軍（後書き）

意外ですがクロスはユウキより大分進んでいました。

まあ、ユウキがそんなことを知っても「あ、そう。おめでとう」「済ますと思いますが。

とある日の葛藤

「うーん……」

俺は机の上に作成した薬をどうしようか頭を捻る。

サラはいなく、エルファもどこかを掃除しているためこの部屋には俺1人だ。

「使うか使うまいか、それが問題だ」

俺をこんなに悩ましているのは目の前に置いたブラッディXについてだった。

この薬は本来課金アイテムであり実際にお金を払うことによって得られる類のものである。

効能はこれを飲むとステータスが上がり易くなるというもの。

俺は金が無かったので使用できなかったが、サラリーマンなどお金はあるけど時間がないプレイヤーがよく使用している代物だった。

もしこの薬を自在に作れるようになればどうなるのか。

確実にこのゲームの支配者になれる。

そんな魅力に憑りつかれた1人のプレイヤーが違法ツールを使用してこの薬を自在に生み出せるようにした。

管理者側がそれを規制するまでの間、短時間で最強クラスのプレイヤーが大量発生したのは言うまでもない。

プレイヤー時代ではもうこの薬は作れないが、この世界だとうなるのか。

幸か不幸か俺はその違法ツールを知っていたので、調合レベルが規定以上に達したから違法ツールに書いてあった素材と手順から違法ブラッディーXを作ってみた。

「作れることは作れるんだな」

出来た代物は色も味も全てブラッディーXそのものだ。

だからこれはブラッディーXと判断していいのだが。

「正直な話、怖くて使えない」

ゲームの世界で禁止されたものをこの世界で使つとどうなるのか予想がつかない。

そんなに不安なら使わなければいいじゃないかと思うのだが、捨てるには未練がありすぎた。

「どうしようか……」

堂々巡りである。

「主、お手紙です」

そんなことを考えているとエルファさんが現れ、ペーパーナイフで封を切つて俺に渡して退出する。

「ふむふむ……」

手紙の内容はキツカからだつた。

勉強が大変でそれに相方も嫌な奴、本当に苦しいとの旨が書いてあつた。

「そうか、困っているのだな」

椅子にもたれてどうすればいいのか思案していた俺は机に置いてあつた違法ブラッディーXが目に入る。

「ちょうど良いかな」

俺はニヤリと笑う。

この薬をキツカ達に試してみよう。

たぶん大丈夫だ、死にはしない。

そう考えた俺は早速この薬を大量に作つてキツカに送つた。

「さてさて……どうなることやら」

後日談としてキツカの他のアイラ、ユキそしてクロスにも同じように送って効果を確かめた結果、めでたくお蔵入りとなった。

「やはり違法な代物は駄目なのだな」

俺は一つ学んだ。

とある日の葛藤（後書き）

これで間章は終わりです。
ありがとうございました。

対貴族連合（前書き）

今回からしばらく戦いが続きます。
相当ご都合主義な展開が続くかもしれません
どうか寛大な心でお許しください。

対貴族連合

突如振って沸いた出来事に俺は何と答えればいいのだろう。

つい先程までは俺達が心血を注いで作り上げたのを見て万感の思いだった都市が、それが今にも崩れそうな砂上の楼閣になり果ててしまった。

「あらあら、大変ねえ」

そんな危機を伝えた少女——ベアトリクスは何が楽しいのかまたクルクルと回り始めた。

「誰か、こいつを——」

捕える。と言う前にエルファが一步前に進み出る。

「お待ち下さい、主」

エルファはベアトリクスを擁護するかのように俺の前に立ち塞がった。

「何の真似だ、エルファ？」

場合によってはただで済まない。そんな気迫を込めて言い放ったが、エルファは瞳の揺らぎすら見えなかった。

「怒りにまかせてベアトリクス王女を捕えても何もありません。それに」

そのエルファの相変わらずな冷静さに俺は少しだけ正気を取り戻した。

だから俺はエルファに先を促す。

「ベアトリクス王女は策略や姦計において右に出る者はありません。ここは王女を参謀として迎え、この難局で試してみても如何でしょうか」

「……」

「それに主は重大な勘違いをなさっています。ベアトリクス王女は謀略に巻き込まれた被害者です、この騒動はどう見ても王女に何一つ利がありません」

「謀略や姦計において右に出る者はいないのに策略に引っ掛かったのか？」

「それは……」

「これから先は私が説明するわ」

エルファが言い淀むとベアトリクスは回転を止めて俺に向き直る。

「私も馬鹿だったわ、国内だけに目を向けていたからこの様になった。まさか隣国のリーザリオ国がこんな謀略を仕掛けてくるなんて思いもしなかったわ」

リーザリオ国とはシマール国の西にある国家で国土は同じくらい

だがそのほとんどが山脈のため痩せているのだがその分民は逞しく、兵も精強である。

飢えや逆境を経験している兵を侮ってはならない。彼らは引くことを知らない死兵へと容易になり易い。

「フォルター兄様が唆されたのよ。私を謀殺してその罪をユウキ男爵に被せろって。間一髪エルファが気付いたおかげで何とか生き延びることが出来たわ」

つまりこの国を狙っていたリーザリオ国が謀略を仕掛け、あわや殺されそうになったので俺の所へ逃げのびてきたと。

話としては筋が通っている。

最近リーザリオ国が軍事演習で活発になってきたという報告が届いていたから真実味はあるだろう。

しかし。

「お前がリーザリオ国の間者という線も否定できないな」

すでに王女は死んだことになっており、目の前にいるのはただ頭のおかしい少女だからそんなぞんざいな口調で構わないだろう。

「あらあら、性格悪いわねえ」

お前には言われたくない。と、心の中でそう叫ぶ。

「けど、こればかりは信じてもらうしかないわ。今の私に証明でき

るものは何もない」

まあ、そうだろう。

2人は相当慌てていたらしく、最低限の持ち物で逃避行を続けていたのか衣服の所々が薄汚れていた。

「イズルガルド」

俺には手が余るとし、確かな審議眼を持つ者の名前を呼んだ。

『何用かな、ユウキヨよ』

すると一秒もしないうちに頭の中に返信が来る。彼はキツカが竜騎兵の結成のために訪れた渓谷の長で、その時に俺と老竜が交渉していくつかの竜を貸してもらったのだが、老竜は俺の何が気に入ったのか俺が生きている限りは共にいると言い始めた。

なのでその老竜をイズルガルドと名付け、普段は南区画の隅にその巨体を置いていた。

「少し困ったことになった、至急来てほしい」

『わかった』

短い言葉だがすぐに来るだろう、この時間帯はまだイズルガルドの活動範囲内だ。

「ねえ、いったいユウキは何をぶつぶつ言っているの？　もしかして頭がおかしくなった？」

……エルファがいなければ俺はこいつを百回殺していた自信がある。

隅の方でもベアトリクスを射殺そうとするアイラを必死に抑える
オーラの姿が確認できた。

ほどなくしてイズルガルドが俺の目の前に現れたので俺はベアトリクスを見てくれと頼みこむ。

「うーん、なんか嫌な感じね。心の奥底まで見透かされているよう
だわ」

ベアトリクスの感想は概ね合っている。テレパシーが使えるイズルガルドの前にはどんな嘘もつくことはできない。

『……ふむ、おそらくこの娘は嘘についておらん』

「ほら、私の言ったとおりでしょ」

視線を外したイズルガルドはそう評するが、「ただ……」と続けた言葉が不吉だった。

『一個の人間がここまでの悪意と狂気を身に宿せるものだろうか。その闇は深く、ワシでさえ全てを見通せん。使い方次第ではユウキに大きな栄光を齎すであろうがもし誤れば大いなる厄災が降り懸るであろう』

「劇薬か……」

俺はベアトリクスをそう評する。

「ありがとう、イズルガルド。助かった、このお礼はいずれする」

『ワシの酔狂だから礼などいらん。それではユウキ、もう用はないようじゃからこれで失礼するぞ』

イズルガルドはそう述べると翼を広げて飛び立ち、元の場所へ帰って行った。

「イズルガルドがそう評するのなら問題はないだろう。ベアトリクス、お前を参謀に命ずる。だからしっかり働け」

「ご拝命承りました我が君。必ずやご期待に添えて見せましょう……アハハハハハハハ！」

ベアトリクスは恭しい態度で頭を下げたと思いきや次の瞬間には大声で笑い始めた。

「……よくこれで権謀術数渦巻く王宮内で生き残れたな」

怒りを通り越して呆れてしまふ俺がそこにいる。

するとエルファこうフォローした。

「ベアトリクス様は普段は淑女然ですが、気に入った相手だけこのような態度を取ります」

それを聞いた俺は喜んで良いのか悲しんで良いのか分からなくな

ってしまった。

俺は至急主要なメンバーを集めて会議を開き、その席でベアトリクスを参謀につけると発表すると、当然のごとく反対者が現れた。

反対しているのはキツカ、アイラ、ユキ、クロスやヒュエテルさん、ティータさんやサラ、ククルス、オーラなど市民出身の者で、賛成者は王宮に身を置いていたエルファ、フィーナ、レア、ミア、レオナなどだった。

「絶対に認められないわ！ そんなこと」

キツカがそう言つて断固反対の態度を取り、周りもそれに同調する。

キツカ達からすればジグサールの危機を齎し、さらに不快な言動をするにも関わらず自分達の上につくということが我慢ならぬのだろう。

「いいえ、あなた達はベアトリクス様の力量を知らないからそんなことを言えるのです」

するとエルファが反論する。

エルファ達は王宮に身を置いていたのでキツカ達よりベアトリクスと長く接していた経験がある。僅か16歳の少女が老獪な国の重鎮を手玉に取っていた様子を知っていることから、絶対に敵に回したくないのだろう。

「あらあら、大変ねえ」

自分の処遇からここまでの大騒ぎになっているにも拘らず、どこ吹く風とばかりに自分の銀色の髪をくるくる巻いて遊んでいるベアトリクスは本当に大した奴だと思う。

「お前のせいでこうなっているんだぞ、少しは収束させようと思わないのか」

そのあまりに呑気な様子のベアトリクスにそう毒づいたのは仕方ないだろう。

「うーん、そうねえ。会議を長引かせて相手に時間を与えるのは馬鹿らしいからそろそろ終わりにしましょうか」

ベアトリクスは挙手をして注目を集め、これまでとは違った凛とした口調で話し始めた。

「つまりあなた達は私の実力が信じられないから私が上につくことを是としないのね」

「当たり前でしょ！ 王女か何だか知らないけど勝手に現れたあなたに誰が従うものですか！」

キツカが立ち上がって激昂する。

「あらら、結構嫌われているわね。まあ、私は新参者だから仕方ないわ。しかし、私は老竜イズルガルドに認められ、我が君が参謀に命じたのよ。つまりキツカ隊長は我が君に逆らうとでも？」

「そ、それは……」

「ユウキ様を諫めるのが私達の役目なのよ、今はどう考えてもユウキ様は間違った決断を下そうとしているのだから逆らっていないわ」

言葉に詰まったキツカの代わりに副隊長のククルスがそう弁護した。

「へえ、そう来るのね」

ベアトリクスは何が面白いのかヒュウッと感嘆の声を上げる。

「まあ、そんな建前なんてどうでもいいわね。私は参謀なのだから私が提示した策で判断して頂戴」

そろそろ潮時など判断した俺は口を開き、現在の状況についてアイラに報告させる。

「……現在私達は王女殺害の大悪人とされ、王国騎士団がこちらへの進撃準備を進めています。そして、それに並行して各貴族が私兵を徴兵しました。その数はおよそ5万。その数がこちらへ向かっていますのでおそらく貴族の私兵の方が先に戦闘が始まるかと思われます」

アイラは多少不満げな様子だったがそんなことなど微塵も見せずスラスラと文章を読み上げる。

「で、ベアトリクス。こちらは3万しかいないが、実は10万の戦力を持っている。だから彼らを殲滅できるが、それをするよりザ

リア国が侵略してきた際に非常に困ることになる。こちらも相手も被害を最小限に抑えるにはどうすればいい？」

おそらく向こうは俺が3万しか持っていないと踏んだのだろう。

しかし、輪番制によって全兵のうち3分の2を単なる労働者として計上していたので実質上の戦力はその3倍にあたる10万だ。

さて、この圧倒的優位の中でどんな采配を振るのか振るとベアトリクスは唇に手を当てて少し考え込んだ後に口を開く。

「そうね、彼らは数が多いけど所詮は寄せ集めの烏合の衆だわ。だからそこをつけば良いのよ」

「つまり頭さえ潰せば簡単だと？」

俺がそう聞くとベアトリクスは大声で笑い始める。

「アツハツハ、それは無意味よ。むしろ下策だわ。彼らは指揮系統ができていない代わりに個別に動くことができるわ。そりゃあ相手を徹底的に痛めつけるならそれでいいけど、今回はそれを是としないでしょ？」

ベアトリクスの言うとおり相手の頭を潰して降伏を促すのが基本だが、彼らは寄せ集めであり各軍隊が別個の指揮系統を持っている。各個撃破するのならこれ以上の条件はないが、今の状態ではお勧めできない。

「それに貴族の中でも優秀な者は何人かいるのよ。もし乱戦の最中に彼らを殺してしまうのは非常に惜しいわ」

腐敗が進んでいる貴族だが、やはりその中でもまともな貴族はいるものだ。この後を考えると彼らは生きていてほしい。

「で？ どうする？」

「そうね。無能な貴族は肅清し、有能な貴族だけ生かす方針でいきましょうかしら」

「そんなことはできるのか？」

俺がそう尋ねるとベアトリクスは当然とばかりに。

「できるわ。3回の敗北とお金があればね」

女神のような美しい美貌を醜悪に歪ませてそんなことを吐いた。

「この戦が私の最期なのかも……」

私——エレナⅡグランシリアⅡイーズルブル子爵は今回のユウキⅡジグサリアスⅡカザクラ男爵の討伐に疑問符を抱いている。

彼は第一王女であるベアトリクスⅡシマールⅡインフィニティを

殺害し、自らを王と称してジグサリアス国の建国を宣言したとして反逆罪の疑いがかけられていた。

一山幾らの浮浪児が市民となり、はては貴族として幅を利かせているのは生粋の貴族である私から見ても面白くないものだが、それでも荒廃した領地を僅か2年で国を代表する都市へと発展させ、多数の兵と魔導騎士団、そして竜騎兵軍団を持つまでに至らしめた彼の手腕は決して侮れないものだと考えている。

まともにやりあえばこちらが大怪我をするので戦いたくないのだが、侯爵クラスの貴族に奨励をかけられては子爵である私は従うしかない。

どうすれば良いのか散々悩んだ末に私は信頼できる兵を選抜してこの貴族連合に加わった。

一応弁護のために言うておくが、少数の兵しか連れてこなかったのは私だけでない。他の何人かも私と同じ様な不安に駆られて兵をわざと少なめに持っていった。

で、その所業が多数の兵を持ち込んだ伯爵や侯爵クラスの貴族達の不評を買ったのだらう。私を含めた少数の兵しか連れてこなかった貴族を初戦の前線を任された。

「今夜は無礼講だ！ 何をしても許す！」

そう言うって祝宴を催し、最後の晚餐とばかりに大騒ぎした翌日。

私はここで果ててしまうとまで考え、意気込んだ戦いだっただが、以外にもジグサル反乱軍は大して戦いもせず、早々に軍を引

き上げていった。

私はこの機を逃さず追撃しようとしたのだが、後に残された糧食や軍資金を見て取り止めざるを得なかった。我が領地の1年は無税でもいけるだけの量が残されていたので、隊長達がここで止めることを進言したからだ。

最初の取り決めにより、戦いによって得た戦果は各々が自由にしていと決まっていたので、これらは自分たちと同じ様に前線を任された者だけで分かち合った。

「これだけあればしばらく民を飢えさせずに済むな」

「ああ、俺の領地も子供を売る親が減る」

その成果に後方で控えていた貴族達は齒軋りしていただろうが、これくらいは許されるだろうと。前線に出ていた私達は笑いあった。

で、次の戦いも私達が先鋒になった。

あれはたまたまの偶然。次からはジグサール反乱軍が本腰を入れてくるという意見が満場一致だったからだ。

そして2回目の戦闘。

これも1回目の戦闘の繰り返しでジグサール反乱軍は早々に撤退していった。

違っていたことといえば残されていた糧食と軍資金の量ぐらいか。

前は1年分だったが、今回は2年分あった。

私達が大した戦闘もせず、うまくまと成果を得たことが悔しかったのだろう。

今度は彼らが前線に出た。

3回目に何か起こると踏んでいたのだが、何事も起らずに戦闘は終了。彼らは3年分の糧食と軍資金を得た。

そして、次に誰を先鋒に据えるかは大揉めに揉めた。

この3回の戦闘で連勝し、旨味を知った私達が「自分が自分」と自己主張したからだ。

ジグサー反乱軍など恐れるに足らず、所詮は成り上がりの者だ。

と、というのがすっかり私達の常識になっていた。

が、私はそれを冷めた目で見ていた。

工業都市ジグサーが生み出す利益は私が持つ領地からの収入など比べ物にならない。そして、もしジグサーが10年分でもポンと出せるぐらいの財力があるのなら、私達はすっかり相手の策略に嵌っているといえる。

すでにこの連合の統制などあらず、各々がいかにして相手を出し抜こうかに注意を張り巡らし、ジグサー軍のことなどもはや考えていない。

しかし、彼らは知っているのだろうか。

ジグサール反乱軍はまだ竜騎兵軍団と魔導騎士団を出していないことに……

そんな懸念を抱いた私は後方支援に回ることにした。

そして、それは私だけでない。

初戦と次戦で共に出た者の多くも私と同じ危機感を抱いて裏方を選んだ。

「……ユウキ男爵は恐ろしい方ですね」

そんなことを呟くのは私の部下であるキリング＝トリアエルだ。

彼女は頭が私より切れるので私の右腕として軍政に活躍してもらっている。

「どういうこと？」

聞き逃せない言葉を呟いたキリングを私は問い詰めると、彼女は前線の方に目を向けながら。

「おそらくユウキ男爵はすでに戦の後を視野に入れています」

見て下さい、とばかりにキリングは両手を広げて。

「今、この連合は欲に負けた者と欲を制御できた者の2つに分かれています、前線には前者が集まり後方には後者が集合しています」

その言葉の通りに私は周りを見渡す。

前線にいる貴族は民からの評判が悪く治安も低い。そして後方にいる貴族はその逆で名君とはいかないまでも優れた統治を敷いている者ばかりだ。

「そうです。玉石混合の貴族連合をユウキ男爵は2つに分けました、私ならここで仕掛けま——」

「ま、魔導騎士団だ！」

キリングの言葉と同時に前線から絶望の悲鳴が上がり、幾つもの火柱が出現する。

魔導騎士団——魔法によって広範囲殲滅を主とする軍団であり、彼らを擁するのは一部の実力者にしか許されない。

打たれ弱い、その攻撃力は比類なき力を持つ彼らが最も力を発揮できる瞬間は今回のように相手が密集している時だ。

事実、彼らが放つ魔法は大きく地面をえぐり、次々とこちらの味方を絶命させていく。

「な、何をしている！？ こちらも魔導騎士団で対抗すればいいだろう」

魔導師の攻撃を防ぐには特殊な加工を施した防壁が装備で身を固

めるか同じ魔導師で対抗するしか手段はない。私は魔導師を持つていないが、侯爵や伯爵クラスの貴族なら擁しているだろう。

しかし、キリングはそれに首を振る。

「もう遅いですよ。魔導師というのは集団になると力を発揮します。最初の一撃で固まっていた魔道士を狙い撃ちにしましたから彼らに防げることはできませんし、何よりあちらは練度と装備が違います」

キリングの言葉通りだ。

彼らの魔導騎士団は宮廷魔導師など優秀な魔導師で構成されているだけでなく、あの世界最高峰の技術力を持つ工業国家ジグサールの装備だ。そこら辺の魔導師では敵うはずもない。

「しかし、このまま見捨てるわけにもいかん！ 総員！ 戦闘準備」

一刻も早く彼らを救援しなければならない。私はその思いに駆られて号令をかけるのだがキリングは諦めた様な声音で呟きました。

「もう遅いんですよ、すでに私達は詰まれています。ここまでの策を考えたユウキ男爵が救援などを許すと思いますか？」

その言葉と同時に身も凍るような咆哮が辺りに響き渡り、私達の上には30体を超える竜が上空を旋回し始めた。

「私達はジグサリア王国竜騎兵軍団隊長、キツカ・カザクラ！ 素直に降伏するのなら身の安全を保障するわ！」

「……私達の負けです、ここは潔く投降しましょう」

キリングの言葉を聞いた私は地面に膝をついて慟哭するしか
なかった。

対貴族連合（後書き）

次は対王国騎士団です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709w/>

ゲームの世界で第二の人生！？

2011年12月1日16時40分発行